霧の中

佐川一政

話の特集

霧の中

霧の中

第一章 9
第二章 14
第三章 43
第四章 102
第五章 123
第六章 142

解説 174
佐川一政年譜 208
付・川端康成　日本と西洋との間 216

霧の中

『霧の中』と題し、一ジャーナリストが、独房を訪ねてくるという架空の枠組を設けたものの、描かれた事象そのものは、記憶の底に鏡をあてて、照らしたものばかりです。

佐川一政

第一章

私が偶々ドキュメンタリストとして、この事件に関係することになったのは、まだその事件の余波が、世の中を何となくざわつかせている頃でした。ある夏の初めの、かなり涼しい一日、私は、この犯人を、パリの南東部にある、その独房に訪ねたのです。

古い石づくりの、この刑務所の中を、看守に伴われながら、右へ左へと歩かされていくうちに、二階三階まで吹きぬけになった、鉄格子が白いクリーム色のペンキにぬられた建物の一隅に、「43」と、薄い青色でかかれた文字の、小さな扉の前でようやく私は止められました。

入口から付き添ってきた背の高い看守は、館中に轟き渡る様な音をたてて扉を開くと、

横に狭いその小さな部屋の左にすえられたベッドの上に、彼はこちらを向いて、ちょこんと座わっていました。ちょうど窓がその背後にあり、そこからさす光が彼の顔に影をつくっていました。彼は、おどろいた様にこちらを見ながら、少しひきつる様な微笑を口のまわりにつくって、軽く会釈しようとしました。

　頭だけが大きく、その部分だけは、三十を過ぎた大人です。どこか人を寄せつけぬところがあります。そしてまなざしは、何かおどおどしています。その印象をはねのける様に、私が勢いよく手を差し出すと、その中に、冷たい、ひ弱な指がすべり込んできました。その手の小ささに、私はいささかおどろきながら、しかし、無関心な風を装って、思い切り明るい笑顔をつくり、彼の腰かけていたベッドに、どんと座わりました。

　そして今まで私の右手にあった壁に向かい合って、一瞬声をたてそうになりました。そこには、事件の記事が、大きな彼女の写真を中心にして、パネルのまわりに、ぎっしりとはさみ込んであったのです。毎日これを眺めて過ごしているのでしょうか……。

「あなたの記事ですね」

「ええ」小さな、文字通り蚊の鳴く様な声で、彼は答えて、

「集めているんですよ」

「御自分の記事を？」

「ええ。興味があるものですから……」

私は、この妙な答えにふたたびおどろきながら、

「有名人ですからね、いまやあなたは」

「とんでもない有名人ですよ」と、今度は、明らかな笑い顔をつくって答えました。その笑った目の中に、今までとは違った、意外な人なつっこさをみ、また同時に、どこかひどく子供っぽいそぶりをみました。

　私がここにくる前に、何人かの彼の友達だったという人の話を思い出していました。つきあっていると彼にはどこか、支えずにはいられない様なところがあったというのです。それがあるいは、彼らの心をつなぎとめていた一つの大きな原因だったのかも知れません。私もその〝わな〟にはまりそうになる自分を感じながら、

「既におききおよびと思いますが、私は日本のある出版社から派遣されてきた雑誌記者です。あなたのことを取材してこいというのが命令でしてね」と、ふたたび笑おうとしましたが、何故かそのまま笑いがのどの奥にひっこんでしまうのを感じました。

「御存じでしょうか？　ヨーロッパ訪問の途上にある首相の耳にまで、わざわざこれに関して、日本の外務省から報告が飛んだということですよ」

「少しフランスの新聞で読みました」彼は静かにそう答えて、

「皆さんに、大変な御迷惑をかけてしまって……」といいかけ、

「しかし、こんな大騒ぎになるとは……」と、急に笑い声をたてて、たまらなくなった様に、苦笑とも皮肉ともとれる笑顔をつくりました。私はそこに、このもの静かな青年の奥に秘む不敵さを垣間見た様で、少々不愉快な気分が、胸をよぎりました。そこでおかまい

なしに、

「皆が、これはフランスも日本も同じですが、あなたの真意をさぐろうとしています。とにかく、前代未聞の怪事件ですからね」

「心理学者も、いろいろ言っている様ですね。こちらの新聞にも、こういった記事がいろいろ出ています」

「ところで、あなた御自身は、そういうことに関して、どう思われているのですか？」

「そういうことと言いますと……」

「つまり、皆がいろいろ議論してもはっきりとはわからず、あなたの真意に関していろいろ取り沙汰しているという……」

「ある意味では当然かも知れません。私自身にもわからないのですから……」

「あなた自身にもわからない？」

「ええ、よく説明は出来ません。またそれが出来れば、こんな事件には到らなかったでしょう」

「それはそうかも知れませんが……」

「しかしある意味では、どうして私の抱いた気持がわからないのかという気持も強くあります。いらいらする程……」

「ほお？……」と私ははじめて、彼の心の奥の秘密につきあたった様な気がして彼の顔をみました。彼はその時下を向いていましたが、いきなりこちらに向き直って、目の奥底までのぞき込む様に、私をみました。私は下に向き直り、低い声で、

「それでは、あなたのお気持なり、何なり、出来る丈すべてを私に話して頂けませんか。雑誌の記者といっても、決して無責任に記事にはしませんし、もしどうしてもあなたがお希みなら、私はそれを伏せておきましょう。ここでお伺いすることは、まったくプライヴェートな会話と考えて、その後、あなたの承認を得た上で、あなたの許可された部分だけ記事に致しましょう。それで御了解頂けますか？」

彼はうつ向いたまま、ほっと息を軽くはいて、静かに、

「私としては特に、公開されて悪い様なことは一つもありません。すべて書いて下さって構いません。ただ、私の申しますことを、出来る丈その通りに書いて頂けるのならば……」

「それは無論です」

しばらく彼は下を向いて黙っていましたが、やがて顔を上げると、目の前の、彼女の像を、じっと見つめていました。その視線が、やがて、その像を超えて、彼方を見つめる様なまなざしにかわると、軽くふるえる様な声で話しはじめました。

第二章

私がはじめて、彼女の存在をはっきりと認めたのは、事件からちょうど一カ月前になる春の盛りでした。フランス現代文学の講義を、私達は、大学の同じ教室――ダダイズムで受けていました。かなり遅れてその授業に加わったこともあり、それまで、私は彼女については、時々、授業のはじまる前、私の席の前を、ふっと通り過ぎていく、色の白い、背の高い女の子、という印象しかなく、しかも何かいつも、決まった男の子と連れ立って教室に入ってくる様に思われ、いずれにせよ、自分とは関係のない存在だと感じていました。無論顔をながめたこともありません。自分の前を通り抜けた後、どの辺に座わるのかも知りません。

しかしこの日は、その娘が、隣の席に座わっています。しかもきょうは彼女の順番なのか、時間がくると、メモ用紙をとり出して、やや高めの、軽くはずむ様な声で、研究発表をはじめました。彼女の息づかいが伝わってくる様で、その吐いた息を吸いこむ様に、深く息をした時、教授が、自分の隣に座わる様に彼女を促しました。

教壇の上に行き、腰かけようとした時、そのすらりとした姿勢、白くて長い首と、その下にある、よく発達した、ふくよかな胸が目に飛び込んできました。思わず、自分からは程遠い存在と感じ、また同時に、一度でもこんな女友達を持ちたいと思いました。少なくとも、今までには知り合ったことのない女性でした。

目の離せなくなったまま、みつめていると、透き通る様なその白い肌、整った、すっきりとした顔立ちのもつその気品と、それでいてどこか人なつっこい身のこなしにあらわれるそのやさしさに、フランス女性にみられる冷たさとは何か違ったものを感じました。ややゲルマン的な顔立ちに、しかしドイツ女性でもないものを感じます。オーストリア人だろうか、ふとそんな気がしました。いつか目にした、チロルの雪のかかったアルプスの山を思わせるものを彼女はもっていました。でも、それとも違う……オーストリアでよく目にした、横に広い丸顔の女性とも明らかに違います。

やがて彼女は、ドイツ語のテキストを読みはじめました。「やはりゲルマン系なのか……」と思いました。よく通る、その美しい声のドイツ語の響きにききとれ、ますます彼女に魅かれていきました。しかし、じろじろみることの気づまりを、次第に感じはじめま

した。やがて彼女の方でも、二、三回、気のせいか、やや怒った様な視線を投げかけてきて、それ以上、みつめる勇気が失くなってきました。といって、もう既に彼女から目を離すことは決して出来なくなっていました。

ふと思いついて、私は彼女を、手元のノート用紙に描きはじめました。無論それは、描くというより見る為です。出来上がったそれは、私の初恋の女性に似ていました。みれば確かに、きめの細かい白い肌、すっきりとした美しさは、彼女をおもわせるものがあります。

しかし、目の前の彼女の、そのやわらかい雰囲気は、そのノートの上には、とても出ていません。気品と温かさと健康さ、これを一つのイメージにつくり上げるには、私のデッサン力は、到底不足していた様です。そして何より、一枚の絵を描き上げるには、私の心はあまりにおちつきを失なっていました。とうとう、発表の最後まで、彼女を見つめ通し、そして彼女が何について発表したかについては、遂に最後までわかりませんでした。

発表の後、学生の間で議論がはじまり、授業は延々と続きました。彼女は終始その間、教授の隣に座わっていました。そしてそれを私は終始ながめていました。ようやく終わり、彼女が、私の隣の、自分の席に戻ってきて、私のなめ後にあった椅子においてあるバッグやレインコートを取ろうとした時、バッグの先が、私の腕に触れました。彼女の視線を感じました。

しかし私は、まともに彼女の方をみて、彼女がおそらく表情によって言うであろう、おわびのあいさつに答えることが出来ませんでした。何かうしろめたいものを感じていたのかも知れません。遂に一言も、彼女と言葉を交えることなく、私達は別れました。彼女は廊下に出て、階段を駈けおりていった様に思います。

私はその後を、ゆっくりとおりていきました。私の横をすり抜けておりていった別の女の子と、一言二言言葉をかわす彼女の声がのぼってきました。メトロの入口をおり、切符を買って、プラット・ホームに通じる階段を上がっていくと、そこに彼女はまだいました。しかし、私は声をかけることが出来ません。

やがて彼女は、ホームの腰かけに座わりました。私は、その横に座わることが出来ず、同じ腰かけの、一番端に、不安定に腰かけていました。ようやく電車が入ってきました。彼女は立ち上がってそれに乗り込みました。私は後からそれに乗り込みました。彼女は、補助席の、通路側に座わりました。その近くに私は行って、立っていました。お互いにもう知っているはずです。彼女も私を、教室でみているはずですから。しかし、声をかけることは出来ません……何といったらいいのか……とうとう声に出していった言葉が、「今、何時?」でした。彼女は、手首を差し出して、時計の表を私にみせました。もう九時をまわっていました。私は少しおどろいた風をして「もう?!」といいました。「ええ」と彼女は少し笑って、やはり随分おそいわねという表情をしました。

地下鉄が止まると、私は瞬間的に飛びおりてしまいました。しかし気づいて、あわててまた飛びのりました。次の駅でおりて地下鉄の通路を歩いていると、横合いから、さっと

駈けぬけていった人がいます。彼女でした。かなりのスピードで、たちまちその姿は、階段の陰にかくれてしまいました。私の行き先のホームに上がっていくと、何と彼女もそこに立っていました。少しばかり息を切らしています。今度は、話しかけるのもかなり気楽に出来ました。にこっと笑って彼女に近づくと、彼女もにっこりとほほえみました。

「九時十五分に約束があるの……」

「あ、そりゃ大変だ。どうして途中で出なかったの」

「だって……」

「先生の横だったから？」彼女は笑っていました。

「ダダイズムを研究してるの？」

「うーん（と少しためらって）シュルレアリスムの作家（その名前は覚えていません）を研究してる」

「僕も少し二十世紀はじめのダダイズムを、日本の作家と比較しながら研究したけど……」

私は今まで日本文学などとはまったく縁のない、西洋文学だけをその対象として研究している西洋人の学生と、ほとんど話したことがありませんでした。研究のことにしても、一体何について話したらよいのか見当がつきません。

やがて電車が入ってきました。今度はほとんど同時に乗り込みました。彼女は、すっすっと奥に入って、一つ目のボックスの窓際に腰かけました。その隣もあいていたのですが、何かぴったりくっついていく様で抵抗があり、わざと彼女の向かいの席に座わりました。

改めて彼女を正面からちらりと見ました。少しくたびれた、大きめのレインコートを着、これもおそらく手編みの、ほそく丸まったマフラーをつけた、何の飾り気もない格好で、真直ぐ私の方に目をそそいでいます。フランス女性の、どこか人をはねつける様な視線とは違い、自然に彼女に近づいていくことが出来る様な気がしました。

「日本にもダダイズムの作家はいるの？」と、屈託なくそう尋ねました。しかし私は心の中で、日本という言葉と、ダダイズムという言葉に、何か限りない距離を感じました。一体彼女の中で、日本というものが、どういう風にとらえられているのだろうか、という気がしたのです。少なくともそれは、極東の、遠い遠い島国に違いありません。ふたたび、彼女との間に、それと同じ様な距離を感じました。

「うん」と短かく答えてから、「でも随分前の話、五十年以上も前のこと……」と答えました。五十年前にもこれと同じ様な文学運動が日本にはあったと言いたかったのですが、次の瞬間、でも一体どういう風に……？と思い、所詮西洋のイミテーション、なんの意味もない、とかえってみじめな気持になりました。自分もその血を受けている日本という国がひどくみじめに思え、日本人であることに言われのないひけめを感じたのです。おそらくこれは、私が勝手に思い、勝手に感じていたことなのでしょう。彼女は相変らず、屈託のない様子で、話しつづけていました。

「アヴァン・ギャルドの美術展など、よく行く？」ときくと、

「うう」と少し口ごもってから、「ええ、特に演劇などよく行くわ」と答えました。彼女

と、肩を並べて劇をみている光景が心をよぎりました。

「授業は何回？」ときいた時、「二回だと思うわ。五月中でおしまい」と答えました。私はその時、彼女は次の週は来られない、これが最後だと言った様に思いました。

「さっき、君の顔をデッサンしていたの」もしかしたら、私がみつめていたのを不愉快に思っていたのではないかと案じて、その口実半分にこう言いながら、そのデッサンをしたノートを、彼女に差し出しました。彼女は首をかしげる様にして手にとって、少しの間だまってながめていました。「うまく描けなかったけど……」と少し言い訳をして、彼女の様子をみていると、彼女は、ふたたび軽く首をかしげて、にっこりほほえみ、ノートを返しました。

「よく授業中に人の顔を描くんだ。ペアールさん（私達の先生です）の顔も描いたよ」というと、「あ、そう?!」と、また笑って言いました。

彼女は、五つ目か六つ目の駅でおりました。その時ひらりと翻って、「さよなら」と、きれいな笑みを残していきました。そのレインコートの先が、私の肩先を軽く撫でた様な気がし、その涼やかな風が、彼女のやさしい思い出を送ってくれた様に思いました。私は静かな温かい気持の中にいました。焦燥は消え去って、落ちついた気分で、プラット・ホームの喧騒を眺めていました。

「これが最後なら、彼女が劇の話をした時、いつか一緒に行く約束をしておけばよかった」ふとそう思いましたが、しかしその思いも、さ程、悔恨の影は伴わず、静かな微笑になってあらわれました。そして、彼女の、その静かな思い出のうちに、その日は流れていきました。

それから一週間経った日、私はふたたび彼女を、同じ授業の教室に見出しました。私はその日、通路側の一番端に腰かけていました。すると、しばらくして何と彼女が入ってきました。私のすぐ横をすり抜けて、同じ並びの、真反対の窓際の席に腰かけようとして、私と視線のあった時、別れた時と同じく美しい微笑を浮かべました。

彼女の後には、フランス人の男の子と、いつも彼と一緒にいる韓国人の女の子が居ましたが、その女の子が、彼女に話しかけていました。離れていてよく聞きとれませんでしたが、彼女の、その日着ているTシャツのことを話している様です。みると、短かい半袖の白い布地に、東洋風の家と、漢字が並んでいます。

「何でそんなの着てるの？」とでもきいているのでしょう。彼女は、「たぶん、私、ちょっとおかしいんでしょ」と、かざした手をふりながら、皆を笑わせていました。「どこで買ったの？」「サン・ミッシェル」私がじっと見ていた為か、それとも一度日本人かと思って彼女に話しかけたことのあった為か、その韓国人の女の子が、「あなた、これ読める？」と私にきいて、彼女の胸の方に指をさしました。

彼女の方に近づけるよい機会を得て、私は彼女の脇にすすみ出ました。しかし、彼女は別に私の方にふり向く様子もありません。彼女の胸の前に首をかしげて、読みとろうとしました。顔の前に、豊かな健康なふくらみがみえ、思わず目をそらしました。それに、そ

の中国の文章はよみとれません。「中国語だからわからない」と答えました。おずおずと、前の席の机の上に開いてあったノートをその場所にもってきましたが、彼女のすぐ隣に座わる勇気は、やはりありません。

やがて授業が始まりました。寝不足で、うとうとしながらも、すぐ近くに、終始彼女の白い肌を感じていました。みると、私の右隣にも、きれいな女の子が座わっています。この子は、典型的なフランス女性のタイプで、整った顔立ちをしていますが、大変冷たい感じを与えました。一週間前の、つかのまのふれ合いで、彼女はすでに私のよく知っている、身内の様な存在に感じ、この意地悪そうな冷たい女の子に、かえって新鮮さを感じる妙な気持になりました。このフランス娘は、やや浅黒い肌をしていましたが、それに比べると、何だか彼女は、豆腐の様な気がしたのです。そしてそう思う自分の心を笑いました。あれ程、魅きつけられ、しかもまだろくにも知らないくせに、もうこんなことを考えている、と。

その授業の間は、彼女の白い存在を感じるか、うとうとするか、どちらかでした。やがて授業はおわりました。学生が次から次へ去っていく中で、彼女は、そのまま残っていました。何か彼女との接点をつけるべく、私は彼女に、シュルレアリスムのよい解説書はないかきいていました。「う、う」と彼女は短かくつまって、「先生とちょっと話すことがあるからその後で……」と言いました。

先生は、その他の学生と話しています。やがて彼女だけになり、教壇の近くで少し言葉をかわしてから、席に帰り、そこで、自分の住所を書いているのでしょう。小さな紙に何か書いています。それをのぞき見する様で悪い様に感じ、そばを離れました。彼女は、随分時間をかけて、ゆっくり書いています。ようやく立ち上がって、それを先生に渡してから、窓際で、少し先生と話をはじめました。

短かいTシャツのそでから、白い二の腕がむき出しでした。そのいかにも、きめのこまかい若い乙女の肌に、思わず息のつまる思いがしました。これも、やはり私の初恋の女性に似ています。彼女と同じアパートに住んでいた時、夏など、その若々しい腕をさらして、私の部屋に座わっていました。ただしいつも男の友達と一緒に……。

ある時、その男友達が、彼女の二の腕をみながら「よおついとるな」と冷かし半分に言いました。すると彼女は「喰べたらおいしいわよ」と、にこりと笑顔をつくって肩をすぼめ、ほっと紅にそまって言いました。「喰うんか？」「ええ、そのうち……」私はいつまでも、その会話を忘れることが出来ませんでした。

「それじゃあニースへ行くのと同じ位の距離だね」という教授の声がしてきました。みると、少なくとも私に対しては決してみせたことのない様なにこにこした顔で話しています。

そういえば、彼女が発表していた時も、終始笑顔をつくっていました。他の、それ程美人でない女の学生には、ひどく軽蔑的な態度をみせていたのを思い出し、「この女ったらしが」と心の中で苦笑しました。ようやく会話はおわり、教授は出ていきました。出てい

きしな「それじゃ来週、出席証明書を渡すからね」と私にちらりと視線をやってそう言いました。きょうは僕にまで愛想がいいなと思いました。

彼女と二人丈になりました。急に教室がガランとし、心持緊張しました。近寄っていくと、彼女はそのままだまって立ち上がり、教室を出ようとします。私はそれについていきながら、一緒に廊下を出、階段をおりていきました。一階のホールに出ても、やはりだまったままです。次第にこちらの心は緊くなっていく様でした。外へ出た時、やっと「ミシェル・カドーのシュルレアリスム」というのがあると一言いいました。「カドー?」何だか日本人のような名前だと思いながら、何度か問い返しました。その時、二人の学生――あの東洋人の女の子と、フランス人の男の子が立っているのに気づきました。どうやら、彼女を待っていた様です。私がついてきたので、少し勝手が違ったという風でした。

また彼女のTシャツの話になりました。今度は少し無遠慮に、彼女の胸をのぞき込みました。相変らずそれは健康に息づいて波打ち、ほんのりその温かみが伝わってくる様に感じました。ふと彼女の顔をみると、私の肩越しに遠くを見ていて、私の存在を無視しようとしているのか、少しうるさく思っているのか、少なくとも笑ってはいませんでした。

少々ちぐはぐな気持になって、メトロを隔てた車道にさしかかった時、カフェーに寄るかどうかという話になっています。少し前を歩いていた私は、ちょっとためらってから、「それじゃ……」と別れようとしました。「よければ、一緒に来たら……」とフランス人の男の子が言います。「邪魔じゃない?」と言うと、「全然。どっちみち、他の友達も一緒だから……」と少し笑って答えました。

一緒に向かい側にあるカフェーに行きました。中に入ると、そこには先程教室に居た学生達が、どっかと席をしめ、談笑していました。心のどこかで、なあんだ、という気がしました。テラスの中の一番角に陣取っている学生達の横にある、入口近くの席を選んで、彼女が一番奥に座わり、その隣にフランス人の男の子、そして韓国人の女の子が座わり、その隣の、一番入口に私が座わりました。やはり自分は借り物だという気がどこかでしました。と同時に、フランス文学を専攻しているフランス人の学生の、こういった集まりに加わることははじめてで、何か未知の世界に飛び込んだ様な、少しわくわくする様な気持になっていました。新しく、自分の世界が開けていく様な気がしたのです。

日はまだ高く、通りを隔てた向かいの古い建物の屋根の向こうには、青空が美しく輝いていました。

彼女とフランス人の男の子はビールをたのみました。韓国人の女の子は、チェリー酒を、そしてなぜか私は、ココアを飲んでいました。ここにもどこかに借り猫の様な気持があったのでしょうか。他の学生達も皆、ビールやチェリー酒を飲んでいます。

自然に二つのグループが出来ました。はじめに座わっていた学生達と、後から入ってきた私達のグループと。自分の研究していることなどの話になって、私の番がまわってきた時、私は学部のこと、研究のことなど少し話しながら、「ソルボンヌの比較文学科には、日本文学を専門に研究している先生がいなくて……」と言いかけると、「いるんじゃな

い？」と、フランス人の男の子が、私から目をそらし、彼女の方を向いて言いました。それが何か、半ば軽蔑した様な口調にきこえました。

私は日本人でありながら、日本語を教える学部にいて、その理由として、この様に言ったのですが、それが何か、フランス語もろくに出来ないから、ソルボンヌの比較文学科に入らないのだろう、という様に彼の調子はとれたのです。

韓国人の女の子の話になった時、「フランス語、上手だね」と思わず言いました。とにかくなんのためらいもなく私達と、特にフランス人の男の子と、よく話しているからです。ところがこれを言った時、「はははははん」と、フランス人の男の子と、韓国人の女の子は、顔を見合わせて笑いました。「これが上手にきこえるなんて……」と言っている様で、余程フランス語を知らないか、それとも心にもないお世辞を言った様で、ひどくバツの悪い気がしました。

早口のフランス語でしゃべる彼女を見て、ふと「フランス人？」と私はききました。「オランダ人」と彼女は答えましたが、その、余韻の残る様な美しい声の響きに、すぐには、日本語でいう〝オランダ人〟というイメージが浮かんできませんでした。

正直のところ、私は一般にオランダやオランダ人というものに、それまであまり好感をもっていなかったのです。直接知っている人といえば、かなりお金にうるさかった、前のアパートの家主ぐらいで、どうも、その対日感情にもすっきりしたものを感ぜず、また、中学の頃、英語のテキストに出てきた、つぶれた様なベレー帽に、これもつぶれた様な顔

をした、がっちりした体軀から、チーズのにおいのする様な手がのびて、痛い程握手する……そんなイメージが強く、ゴッホにしても、チューリップにしても、すべて同じ様な色彩をもっている様に感じたものです。

ところが、「オランダ人」と言った、目の前の、透き通る様な白い肌をした、ほっそりとしたこの女性は、それとはまったく異なったイメージをもつ存在でした。私は、それまでもっていた観念が、一度に消散していくのを感じました。

アルコールが運ばれてきた時、差し出された韓国人の女の子のグラスから、彼女はチェリー酒を一口飲んでいました。それから二人は、住所を交換しました。彼女の住所を渡されると、「リュー・ボナパルト」と、韓国人の女の子は、その独特の発音で言った後、「すてき、典型的なフランスの通りの名ね」と言いました。それを、何かきいては悪い様な気がしながら、私はきいていました。他人の住所を、むやみに知るべきではないと思ったのです。

それから「月曜、火曜、水曜……」などと、何か大きな声で読み上げています。この会話の半ばから、私は彼女に自分の住所を渡そうか、どうしようかと思いながら、ひざの上においてあったカバンから、タイプ用紙を取り出し、誰にもわからない様に、テーブルの下で住所を書き、それから、ひざの上にそれをのせたまま、やがてその面においた指が、次第にしめりをおびて、紙の上にしわが出来た時、おずおずとそれをテーブルの下から取り出し、そして、隣の韓国人の女の子に渡していました。それをそのままバッグにしまい

込みましたが、私には住所はくれません。「やはり警戒されたのか」と思いました。

ふと、隣の彼女をみると、ひざにのせていた赤い手帳を手にとり、それから私の方にそれを差し出しました。それは先程、韓国人の女の子に渡していたものです。小さな、かなり使い込んだ、ほのかに彼女の手の匂いのする様なその手帳の間に指を入れて、「ここに書いて」と言いました。みると、細い線がぎっしりと並んでいます。その小さなスペースに、私は少しどぎまぎしながら、自分の住所を書きこみました。私のアパートの建物には、ヴィラ・エルランジェという名前がついていましたが、それを書きおとし、書きおわってからそれに気づいて、住所の一番下に書き加えました。それは、私の住所の中で、一番美しい名前でした。

手帳をかえすと、首をやや傾げてそれをみてから、私に軽くほほえみ、バッグにしまいました。私は反射的に、かばんからタイプ用紙を取り出して、彼女に渡しました。彼女はまた、首を傾げながら、かなり時間をかけて自分の住所を書いていました。それを受け取ると、タイプ用紙の隅に、まるい小さな字がおさまっていました。

その時私ははじめて「ルネ・ハルテヴェルト」という、彼女の名を知ったのです。

住所の下には、月曜、火曜、水曜という文字と、午前八時から午後一時まで、という数字がみえます。

「これ、何？」ときくと、

「電話をしていい時間と日のこと」と言います。

一体、どういう意味なのか……これ以外の時間、彼女の電話は、一体誰の為にあるのだろう……その誰かと、くつろいだ表情で長々と電話をしている彼女の姿が横切りました。ここに書いている時間だけ、その他の（どうでもよい?!）人々と話すことにしているのだろうか……その細かい時間の制限に、何かはじめから、交際を限られた様に感じました。しかしとにかく、彼女が住所をくれたことはうれしく、一歩彼女に近づいた気がしました。

「映画か芝居か、皆でみにいきましょうか？」と、彼女はちらりと三人を見回して、指で軽く私達の方を指さしながら言いました。その時、上演されている映画の話になり、『ウエストサイド物語』が話題にのぼりました。「僕みたよ」というと、「私も二回みたわ」と、にこにこして言います。はじめて、自分の興味のある話題になり、そして彼女と、その同じ話題の上で一つになった様に感じてわくわくしながら、「同じ監督の『サウンド・オヴ・ミュージック』みた？」「ええ」「僕十回みた。レコードもすりきれる程かけて」と言いました。「十回?!」と、かたわらで韓国人の女の子が叫びましたが、彼女はほほ笑んだまま、別に何も言いませんでした。

その間に一人、また一人と、会話の輪から去り、カフェーを出ていきます。「なんで帰るのだろう？」私は思わずそう思いました。「すべてはこれからはじまろうとしているのに……。こんなに日は高く、明るいというのに……。一体、これから帰って、何の用があるというのだろう……」

その内、フランス人の男の子と、韓国人の女の子も立ち上がり、帰っていきました。私も帰るべきなのか……一瞬そう思いましたが、立ち去ることは出来ません。ルネの隣にいた女の子が、「一緒に夕食とらない？」と、他の男の学生達を示しながら、そう言いました。予め約束でもしてあったのか、「ええ」とすぐにルネは答えました。男の学生の一人が、「フランスのチーズを御馳走するね」と笑って言いました。私は切り離された気がして、外をみながら、やはり先程、帰ればよかったかと思いました。相変らず、入口に一番近いところにいるのですから、そうしようと思えば簡単でしたが……。

やがて日の少しかげりはじめた頃、皆は立ち上がって、「食事にいこう」と言っています。私はいつ、皆と離れたらよいのかと思いながら、テーブルの上にばらまかれた小銭に、私の分を加えていました。一人が、それをかき集め、カウンターに払いにいくと、皆もそれに続いて、テーブルを離れました。

ルネは残り、「皆と一緒に食事しない？」と私にきいています。この言葉を待っていたのですが、一瞬ためらって、「でも、僕は招待されていないから……」と答えました。彼女の顔はふと沈み、私の前から去ると、皆の方へいきました。

彼女は、流行の、幅の広いパンタロンをつけており、その大きくふくらんだズボンの布地の中央に、それでもわずかな割れ目が出来て、そしてそのまわりに、彼女自身のお尻のふくらみがういてみえました。彼女は間もなく皆から離れると、絵葉書の並んでいるスタンドの方にいき、パリの風景のあるその内の一枚をとってながめています。私はその方

に歩いていきました。しかし私が近づく前に、彼女はそこを離れ、ふたたび皆のいる方に近づいていきました。私はカフェーの外に出て、何となく皆を待っていました。そして皆が出てくると、メトロの方にいこうとするそぶりをしました。「一緒に食事しよう」とその内の一人が言いました。彼女が皆にそう言ってくれたのでしょうか……目の前がパッと明るくなった様な気がしました。

日は暮れかかり、ともりはじめた街の灯を、深い濃紺の空が、静かにつつみ込んでいます。「デカルト街の方までいくよ。あの辺のレストランにいころって言ってるんだ」私を入れて皆で五人、その内男は三人で、その一人の男の子がにこにこして私にこう言いました。

私もすっかりうきうきとし、歩をゆるめて、彼女の隣になった時、「オランダのことは……チーズとチューリップのことしか知らない。あっ、それから風車！」と笑いながら言うと、彼女もほほえんでから、「私も日本のことは、キモノしか知らない」と言いました。その〝キモノ〟という発音が、とても日本的な、素直な発音だったので、私は少しおどろきました。

彼女の他に、もう一人、先程、彼女の隣に座わっていた女の子がいました。彼女は飾り気のない、さばさばした感じの子で、話しはじめると、やはりこちらの方が、気が楽に話せました。南仏の出身で、日本映画のことをかなり知っており、二人で映画のこと、演劇のことを話しはじめました。後を歩いている彼女がきいているのを、常に意識しつつ……

他の女の子と、この様に話すのをみて、彼女がどう感じるだろうかと感じつつ……。

やがて、狭い、かなり傾斜のかかった、この区域独特の通りの一画、カルチェ・ラタン特有のにぎわいの中に、小さなギリシャ料理の店がありました。その夜は、暮れても気温は下がらず、細い通りに、椅子をぎっしり並べてテラスがはり出していましたが、どれも満席です。

そこで、そのテラスの一隅を予約して、時間つぶしにまた通りを下っていきました。「酔いどれ船」と、古びた金箔で書いてある店の前を通った時、それを指さし、にっこり笑って彼女の方をみましたが、きょとんとしています。ランボーを知らないのかなと不思議な思いがしました。一方、フランス語をどれ位勉強したのかという私の問いに、「六カ月」と答えて、私をびっくりさせました。「六カ月?!」と思わず問い直しながら、六カ月でこれまで話せ、読め、書けるとは……やはり同じヨーロッパ言語の中にいるからだろうかと思い、「僕は十年以上もしてるけど……」とはさすがに言えず、ただ絶望的な気分で、彼女の白い端正な顔を見上げていました。やはり自分は、極東から来た東洋人なのかという気がしたのです。

一緒にカフェーに入りました。小さなミュージック・ボックスのある一隅に陣取り、私とフランス人の女の子が向かい合わせに、その横にそれぞれフランス人の男の子が座わり、テーブルの端にもう一つ別のテーブルの椅子をつけ足して、そこに彼女が座わりました。メニューをみながら、私もこの時からアルコールを飲むつもりでした。皆がすすめる飲み

物にきめました。私はトイレに立ちました。帰ってきてテーブルにつく時、隣のフランス人の男の子が奥に入って、私は彼女の斜め横の席につくつもりでした。しかし〝親切にも〟彼は、私をまた奥に押し込んだのです。

次に彼女がトイレに立ちました。なかなか帰ってきません。ふと、中で何をしているのだろうかと思いました。彼女とトイレとは、どうしても結びつきませんでした。ようやく彼女は帰ってきました。飲み物がテーブルに並び、乾杯をして、「これは何？」と言いつつ、皆の見つめる中で、それをぐっと飲み込むと、とたんに口の中に強い刺激を感じて、「ハアー」と口をひらき、目を見開いたので、向かいのフランス人の女の子は、「すてき！」と言って笑いました。たったこれ丈のことが、この様な感嘆詞になってかえってきたことに、その子の、異国人に対する思いやりを感じると共に、かえって、自分が異国人であることを強く感じました。

ふと見ると、カフェーの表のガラス戸に、私達五人の姿が写っています。大柄で白い肌の男女の中に、一人の、灰色のブレザーを着た小さな東洋人が沈み込んでいます。思わず目をそらしました。既に時計は十時半をまわっています。ミュージック・ボックスから二、三曲、流行歌の流れた後、「そろそろいこうか」と言って立ち上がりました。私が小銭を出しかけると、「いい、いい」と皆は手をふってそう言いました。

ギリシア料理のレストランに着くまでに、私は昨年したギリシア旅行の話を彼女にしました。「私も両親と一緒に一度行ったわ。島じゃなくて、街の中だけど……」と彼女は答

え「アテネ？……」と私がききかけた時、レストランに着き、彼女は私の質問には答えずに、フランス人の男の子の指さした奥の席にすすみました。

彼女と、フランス人の女の子が向い合わせに座わり、その隣には、前と同じ男の子が座わりました。どうやら恋人同士の様です。彼女の隣の席はあいています。もう一人のフランス人の男の子に、ふと「座わったら？」と言って、手で促しました。「君が座わって」という彼の答えに、しかしすぐに彼女の隣に座わりました。

彼女の裸の白い腕が、目の端をとらえてきます。ようやく彼女の隣になったと思いました。しかしまもなく彼女はその手を額にやって「頭がいたい」と言いました。次には気分が悪いというのではないかと急に心配になって、「水、水を飲んだら」と言い、「水を下さい」と、私はもうギャルソンに頼んでいました。「アスピリン、アスピリン」と誰かが冗談半分に言っています。

水が来ました。「大丈夫？」と言うと、「大丈夫、大丈夫」と彼女は言いました。様子からみて、大したことはなさそうです。ただ、ぶどう酒は、彼女のコップだけ、少なくつがれました。メニューが来た時、「私、あんまり食べられないわ」と彼女は言いました。「私も」とフランス人の女の子も言います。やや、男の連中は、水をさされた様な気分になったのか、しばらく黙ってメニューをみていました。あの「私も」は、あるいはフランス人の女の子の、軽い批判だったのかな、と思いました。皆これから、さあー、食事をはじめようとする一番楽しい時だったのですから。

皆、三十フランのメニューに決めました。もっとも、メニューといっても、その種類はかなり豊富でした。「君、フランス語、随分上達したよ」と、角に座わった、少しふとって、一番社交的なフランス人の男の子が、彼女に言いました。彼らは、七カ月前の彼女を知っているわけで、その彼女が、オランダからパリに来た頃は、どんなだったろうかと私は想像しました。今程、フランス語は上手ではなかったのだろうか……オランダ語のなまりがあったのだろうか……そうして一層彼女をかわいく思いました。

彼女は、顔を上げて、皆をみていましたが、だまったままです。それから話は、授業のこと、他の仲間のこと、趣味のことから、ミッテランの大統領就任式のことまで及びました。「就任式、僕達行くけど、みに行く？」と、例のふとった彼が、彼女をさそっていました。「いえ」と、彼女は、あっさりことわりました。総じて彼女は、ややだまり気味でした。まだ頭痛が残っていたのでしょうか？……。

ギリシャ料理の話から、「この次は日本料理にしようか」と誰かが言っています。また集まる機会が出来た、と私は思いました。前菜が来た時、彼女は、向かいのフランス人の女の子のとっていた、彼女のものとは種類のちがうものをすすめられるまま、自分のホークで少しとって、口にはこんでいました。

私と彼女は、同じものをとっていたので、私にもフランス人の女の子はすすめました。と同時に、ふとった男の子も、私に、それと同じ種類の前菜の、彼の皿をすすめました。一瞬ためらってから、しかし私はすぐに、斜め向かいの女の子の皿に手を伸ばしました。

彼女が先にとって、そのホークの型のついた後をけずりとって……。それは、ギリシア料理独特の、にんにくの味のする前菜でした。

メインの肉料理で、私と彼女はやはり同じものでした。（私が、同じものを選んだ為かも知れません。なるべく彼女と同じ様に行動しようとしていたのでしょうか）。くし刺の肉が、ちょうど彼女の前にある大きなガラス窓の中で、勢いよくあぶられています。彼女と、向かいのフランス人の女の子は、少し顔を見合わせてから、その様子に見入っています。会話にあきたのか、あるいはその光景に魅かれたのか、その間、私達にはすっかり背を向けてしまいました。

薄闇にほんのりと浮かぶ彼女の白い二の腕のむこうに、赤い炎が踊り、その中で、褐色の肉片がキラキラと輝いてみえました。その肉片が皿に盛られ、テーブルの上に出され、皆の腹の中におさまった時も、未だ空はわずかに光を残し、人通りは絶えず、そのにぎやかな人の声が肩先をかすめていきます。

「すばらしい夜だ。少しも寒くないじゃないか」

「まったくだ。めずらしい夜だよ」

そんな会話がテーブルに流れました。その時感じた、なんとも快い、さわやかな風を、今でもこの頬に感ずることが出来ます……。

デザートをとって、コーヒーになる前に、彼女は突然、「もう帰らなければ……」と言いました。「これから、ディスコテックに行こうと思ってるのに……」と誰かが言うと「明日朝はやいの。子供を預からなければならないから……」と言いました。そしてバッグから、お金を出しましたが、百フラン札しかありません。すぐに私が探すと、折よく五十フラン札が出てきましたので、それを彼女に渡し、彼女の百フラン札を受け取りました。お金だというのに、何か彼女のものが渡ってきた様で、うれしい気持になりました。その札の面を彼女の手の温かさをさぐる様に、軽くなでました。

彼女が立ち上がり、私のうしろをぬけて、今までと反対側に立った時、「僕も帰る。メトロの駅もよくわからないし……」と言っていました。その言い方が、自分でも、やや唐突に感じていると、彼女はメトロの地図を取り出して、私に説明しかけました。もとより頭には入ってきません。私もお金を払おうとしましたが、やはり五十フラン札しかなく、めんどうに思い、またカフェーでのこともあるので、そのまま札をテーブルの上におきました。誰も何も言いません。ふと、先程カフェーでわずかながらおごってくれたその時の皆の笑顔を思い出し、その皆の心が、この時離れてしまった様に感じました。

彼女はその時、すっと手を伸ばすと、ふとったフランス人の男の子の前にきたコーヒー・カップを手にとって、一口飲み「帰らなくっちゃならないから……」と、にっこりして言いました。男の子は、少しばかり驚いた様子でしたが、やはりにこりと笑って応えました。何か彼がうらやましい気がしました。

「じゃ、アデュー」と誰かが彼女に言ったので、私は少しびっくりして反射的に、

「アデューじゃないでしょう。皆で日本料理店にいくってことになってるんじゃない？」

と一息に言いました。

「あ、そうそう、そうだった」と誰かが言って、その連絡は、私がすることになりました。その時はじめて、彼女は、私の他には誰も住所を渡していない、つまり彼女の住所を知っているのは自分だけだと知りました。無論、悪い気はしませんでした。しかし、それまで夕食まで共にし、親しそうに話していた以上、もうとっくに、お互いの住所は知り合っているものと思い込んでいましたので、一時を過ごしてあっさり、アデューの一言で別れるその淡白さに少々びっくりしました。七カ月の間、同じ教室で過ごしてもこんなものかと、ややうすら寒い気持になったのです。

誰かがまだ彼女に話しかけている時、私はさっさと皆にあいさつして、そのまま歩き出していました。何となく、皆の前で、彼女と肩を並べて帰りたくなかったのでしょうか……。

私が一人暗闇に差しかかった頃、彼女は追いついてきました。二人だけになった時、改めて、この女性は一体どういう女の子で、どうして私と並んで歩いているのだろうという気がしてきました。彼女が少しばかり、赤の他人に逆戻りした様な、改めて自己紹介でもしなければならない様な、妙な気分になったのです。今まで他の友達の中で、自然に話し合っていたのが、急にそこから切り離され、二人丈、新たに向き合わされて置かれた様な気持がして、おそらくお互いに、少しばかり相手をさぐる様な気持になったのでしょう。

「こんな夜道、一人で歩いちゃあぶないよ」その、何とはなしに気まずい沈黙を破って言

った私の言葉に、彼女はちらりと私の方を見て、かすかにほほえみました。その後、六カ月でフランス語をマスターしたという彼女の言葉がやはり気になっていたのか、私はまたフランス語の話をはじめていました。彼女はこの時、三カ月前までは、イギリス人の友達と一緒で英語ばかり話していたので、あまり、フランス語はあまり進歩しなかったけれど、その後は、フランス語ばかりだったから、上達したという様な話をしていました。

ルクサンブルグ公園の、こんもりとした黒い影のみえてきたころ、彼女のアパートの話になり、カルティエ・ラタンは近いし、ルクサンブルグ公園も目の前だし、本当に理想的！」と言っていました。その理想的（イデアル）といった彼女の口ぶりが忘れられません。「ああ、彼女はパリの生活を本当に楽しんでいるんだな」と感じました。そして、ふと、はじめの頃の、なじめず苦しんだ、自分のパリの生活がおもい出されました。

「パリに来るのははじめてだったの？」「ううん、一度家族と来たことあるの」「ああ、それじゃあもう知っててよかったでしょう」

私はパリに住みに来たのが、パスポートというものをはじめて持った時――すなわち、外国に出たのがはじめてでした。しかも彼女は外国といっても、電車や車で数時間のところ、私の外国意識とは随分違うだろうと感じました。

「この夏、オランダに行くかも知れない」

「エムステッド？　エムステッド？」と彼女はくり返しています。

私はその時、その名が、彼女の家のある、オランダの街の名とは知りませんでした。彼

女の早口の発音の為、アムステルダム、と言っている様に思われました。私は心の中で無論、彼女を訪ねたかったのです。しかし、もし彼女がアムステルダムといったなら、随分一般的な話をしている訳で、家に招待するなど遠いことだなと感じました。もしかしたら、私の意図をうすうす感じて、わざと話をそらしているのだろうかという気がしました。

「ゴッホの美術館知ってる？　あそこは是非行きたいし、レンブラントもみたいし……」

と私は言っていました。しかし彼女は特に何もいわず、前の方をみつめたまま、歩いています。やがて広場に出ると、パンテオンの巨大なドームが、晴れ上がった闇の空にしずんでいました。その横を通りぬけると、白木が闇の中にういてみえます。にわかごしらえの舞台の様なものがあります。

「なんだろう？」と思わず言うと、

「ミッテランの就任式の……」と彼女が言いかけて、ああ、そうかと思いました。

なんだかはずんだ気持になって、わざと、その舞台の上を横切って、「社会主義のお祭り？」と笑いながら、彼女に言いました。舞台の屋根のむこうで彼女も笑っています。彼女ところやって食事が出来たし、また映画にも一緒に行けるし、それから日本レストランにも行けるんだ、また彼女に会えるんだ、と思うと、単純な喜びが、心の底からわいてきて、それが、新しい大統領の誕生という社会の転換期の、なんとなく浮き立つ様な雰囲気と一緒になって、思わず舞台の上で、はね上がりたい気分になりました。しかしそのまま舞台をおりて、パンテオンの前の通りをおりていきました。

周囲の店並から急に明るい光があふれ出し、彼女の姿が、その中に浮かび上がりました。あるカフェーの前を横切った時、中にいた数人の男の一人が、その彼女の姿をみて、ピューッと口笛を吹き、何か叫びました。やっぱり彼女は目立つなと思いながら、「ね、やっぱり夜はいろんな人がいるでしょう？」と彼女の方をふり向いて言うと、ただ彼女は笑っていました。まるで、そんなことは気にならない様子で、さっさと歩いていきます。自分が男を魅きつけるということすら感じていない様です。

「兄は、日本にいったことあるのよ」と、突然彼女は言い出しました。「へえ？」としばらく何も言えませんでしたが、「お兄さんから、何か日本のことをきいた？」とききました。その答えはよく覚えていません。ただ、キモノはきれいだった、彼女の為にも買ってきてくれた、という様なことを話していた様に思います。彼女の着物姿を心の中に描いていました。

やがてオデオン座の前へ出ました。電気の消えたガラス窓の中に、芝居のポスターが白く浮かんでいます。「何か芝居みた？」ときいてみましたが、特に彼女は何も答えませんでした。その正面に出たところで、ふっと立ち止まり「メトロの駅はこの先にあるけれど、でも、もうないと思うわ。私はこっちだから、さようなら」と彼女は言いました。

やや唐突なその調子に、びっくりしながら、「この先大丈夫？」ときくと、「ええ」と答えて、にっこり笑いかけました。「映画のことも知らせてくれる？」と言うと、「あ」と思

い出した様に短かく言って、「キム（韓国人の女の子）に私が電話することになっているから、その結果を、この次の授業の時、彼女からきいてくれる？　私はいないけど……」と早口でそう言いました。友達に会いに、一週間程、オランダに帰ると言っています。

「じゃあね」と私達は手を上げてあいさつをかわしそのまま別れました。

私はそれ以上、後をみないで、オデオン座を後ろに残し、メトロの方まで歩いていきました。そこには、タクシーの長蛇の列が出来ています。その真中あたりの車に手を上げると「乗って！」とすこぶる機嫌のいい運転手の顔があらわれました。

「ミッテランになるんで、タクシーなんか乗るやつ、いなくなっちまったんだぜ」と言いながら、「何かが変る！」という気分の中に浸り切った様に、うきうきしている様子がこちらにも伝わってき、彼女と別れたばかりの興奮も手伝って、フロントガラスの前を横切る、真夜中とはとても思われないその人並をみて「何かが変る、何かが変る」と、私も心の中でつぶやきながら、アパートまで、その運ちゃんと大いに語り合って帰りました。

第三章

翌日から、私は日本レストランをどこにしようか考えはじめましたが、ふと、いっそ、自分のアパートでやったらどうだろう、と思いました。無論それは、彼女に自分のところにきてもらいたかったからですが、改まったレストランなどより、その方がずっと楽しい雰囲気になると考えたのです。料理はすき焼に決めました。十年も前に、日本で下宿していた時、作ったことがあったからですが、しかし大方忘れていた為、知り合いの人に、その作り方を何度も電話でききました。

その次の週の授業の時、皆にきいてみることにしました。その日、彼女はいません。いつもの様に、大学のカフェテリアで一息ついていると、偶然そこにフランス人の男の子と

韓国人の女の子が立ち話をしていました。にっこり笑って近づいていくと、むこうは、まだ話に打ち込んでいて気づかぬ様です。やがて二人は何か笑い声をたてました。やっと気づいたのか、こちらをみても、前のつづきで、笑ったままにあいさつもしません。

「彼女から電話あった？　オランダ人の子の……」と言いかけても、私の顔に視線をおとしたまま、まだ笑いつづけています。

　もう一度繰り返すと、「ええ？」と、韓国人の女の子は、その笑い顔をややくもらせ、眉をしかめると、「ああ、あったけど……」と言いかけて、また思い出した様に笑いはじめ、向き直ったフランス人の男の子に、身体をもたせかけるように、二人で笑いつづけています。何がそんなにおかしいのだろうと思いながら、ふと、オランダの彼女との約束をこんな風に追っている自分を笑っているのだろうかという気がしました。

「それで？　彼女は何ていったの？」とおずおずたずねると、ようやく、笑い声をおさめながら、「それでって？……つまり週末に彼女から電話がかかってくることになったけど、こないだ話してたのは、イヨネスコの芝居をみにいこうってことになったの……」

芝居？　映画じゃないのか？　『ウエストサイド物語』じゃないのだろうか……と思いながら、そんなことにはあまり関心がないといった二人の様子に、それ以上きく気持も失せ、何か自分をひどく場違いなものの様に感じながら、教室に向かいました。

　教室の中は、まだガランとしています。何となく、先週ルネが腰かけていたところに座わって、少し窓の外をみてから、カバンの中からタイプ用紙を取り出し、それに、自分の

アパートの地図を書きはじめました。友達に渡す為です。でも一体この地図が役に立つ時があるのだろうかという気になりながら……。何とはなしに淋しさが心の底からこみ上げてきます。それでも地図を書き上げた頃、教室は一杯になりはじめていました。友達が入ってくるのを待っていましたが、三人のうちの一人もあらわれません。「一体どうなったのだろう」、そのまま授業ははじまり、教壇の方に向き直りました。

　それは最後の授業でした。途中で教授の顔を描きはじめましたが、彼女程、無論興ものりません。時々うとうとしているうちに、時間が過ぎていきました……ふと後を見ると、あのフランス人の女の子が座わっています。急に気持が軽くなって、教授の声も耳に入ってきました。先程の、地図をかいたタイプ用紙をふたたび取り出して、手にとってみました。

　授業がおわり、少し皆が出ていくのを待って、その子の方に近づき、軽くあいさつしました。もしかしたら、この前途中で帰ったので気をわるくしているかも知れないと思ったのです。しかし彼女はにっこり笑って応えました。

「日本のレストラン探したけど、皆すごく高いので、もしよければ、僕のところでもいい？　僕、料理するから……」と言うと、「もちろん」と気持よく答えました。「これ、住所と地図」と言って渡すと、「ありがとう」と受けとってから「ちょっとあなたに日本語の名前のことできさたいことがあるの……」と言いはじめました。何のことだろうと思いながら、その日、教授が、出席証明書をくれることになっており、既に廊下に立って待っ

ている様子でしたので、そういうと、「どっちみち、後でカフェーにいくでしょ。私もいくから、その時教えてくれる？」と言うので、喜んで「うん、もちろん」と答え、その場を離れました。

　私は教授について歩きはじめました。大股にさっさと階段をのぼっていき、何も口はききません。この前の、彼女と一緒の時は、私に対しても、気軽に声をかけていたのに、まるで別人の様です。「論文読んで頂けましたか？」以前に、修士論文を彼に渡してあったのですが、なんの批評もなく、読んだとも一言も言わないままなので、最後の授業でもあり、思い切って、きいてみたのです。

「あなたの先生と同じ意見です」すぐに返答が返ってきましたが、ひどく一本調子の、予め用意していた様な答えでした。思わずきき返したくなる様な調子です。〝あなたの先生〟とは、その論文の中にはさみ込んであった、審査にあたった女の先生のことでしょう。

「本当に読んだのだろうか？」と思いました。日本の前衛芸術運動のことなど、はじめから関心もなく、他にすることがたくさんあるのに、何でこんなものを読ませられなければならんのだ、とでも思ったに違いありません。そしてたまたま目にとまった、同じ仕事仲間の、その女の先生の批評にちょっと目を通していたので、反射的にそういったのでしょう。「こんなものだ」と心の中でつぶやきました。私が話していても、すぐにそっぽを向いてしまうその態度をおもいあわせると、これが自然でした。自分が、極東の東洋人であることをふたたび感じました。自分の研究になど、関心をもつのは、所詮ほんのひとにぎりの人達にすぎないのでしょう。越えたくとも、越えられぬ柵が、自分の周囲にはりめぐらされているのを感ぜずにはいられません。

　教授もカフェーに行くのでしょうか……同じ方向に歩いていたので、さすがに何か話さねばならぬと思ったのか、カフェーの見えてきた頃、「博士論文では、どんなテーマを選んだのかね？」とききました。しかし、その質問に答えおわる暇もなく、カフェーに到着し、私の答えはききおわらぬまま、他の学生達と話しはじめました。彼の隣は、韓国人の女の子になり、私は、いつも彼女と一緒の、フランス人の男の子になりました。儀礼的に、彼は私にあいさつしましたが、私が隣に来たことに、少々戸惑っている様子でした。

　彼はいつも女の子にかこまれていました。いつだったか、はじめて教室の中にみとめた時も、周囲は女の子でいっぱいで、しかも、入ってくる女子学生一人一人に、まるで幼な友達の様な調子で笑いかけています。そういえば、彼自身もどこか女性じみたところがあります。私は、こういうタイプの男性を、最も理解し難かったのです。私も、女の友達が大部分であり、いつか、論文完成を祝ってパーティーをひらいてくれた女友達の一人に、私が招待した友達が、女の子ばかりなので、「どうして!?　おかしいわ……」と、冷やかし半分に言われたことがあります。無論、女の子と一緒にいた方が、楽しいからに過ぎませんが、しかし、いつも自分と彼女達との間には、越えられぬ壁があると感じていました。しかし、彼の方は、何か自然に、彼女達——あるいは女性なるものと、同化していく様で、本能的な違和感すら感じました。尤も、片方、その彼をうらやむ気持があったこと

も事実です。ただ、この男の子を、忌み嫌っている女の子がいることも確かで、ルネにしてもこの間の様子からして、それ程関心はない様でした。

　周囲をみまわしながら、ふと、この間もこの同じカフェーにいたのだ、と思い、しかし、まるで違うところにいる様な気がしました。「一体今頃彼女は、オランダで何をしているのだろう……」あのフランス人の女の子と、男友達はみあたりません。どこへ行ったのだろうと思っていると、大分してようやくあらわれました。男の友達の方が、私をみて、気持のよい笑顔をうかべました。一晩夕食を共にしたことで、心が通い合ったのでしょうか、うれしい気持になりました。彼らの席にはやく行きたかったのですが、私のまわりは一杯で、身動き一つ出来ません。

　私をふくめて、皆、チェリー酒を飲んでいました。そこでは教授もよく口をききました。教室でいつもしゃべりまくっているヒステリックな女の子が、ここでもよくしゃべっています。はじめのうち、その会話に耳を傾けていましたが、すぐに疲れて（この日は、何故か大変疲れを感じていました。先週の、いつまでもカフェーにいたかったのとは大きな違いです）遠くをぽかんとみつめながら、また彼女のことを考えていました。

　その内、一人また一人と去っていき、席に余裕の出来た頃、フランス人の女の子は「日本語のこと、きいてもいい？」と、私の方をみながらききましたので、すぐその隣にうつりました。そして親しい人達の近くにいった様に、内心ほっとしました。

　彼女の質問は、フランス人の男の子の名前を、日本語でどう書くのかというものでした。私は少々面喰らい、カタカナという存在を、どうしたわけか、すっかり忘れてしまいました。「日本語にアルファベットはないの？」ときくので、ないと答え、一音一音、それに類似した音の漢字を苦労しながら並べ、その並べた漢字の意味を、また一つ一つ説明しはじめました。何も知らない彼女は「すばらしい！」と言っていました。その後、私の住所と地図を渡しながら、「ルネは、週末に帰ってくるので、彼女の都合はまだわからないけれど、とりあえず今週の土曜日にしたけど、いい？」とききました。

「ルネって？」と男の子が、フランス人の女の子にきいています。「オランダ人の子よ」「ああ」と言い、週末は……と言いかけて、「いや、たいしたことない」とすぐに否定し、了解の返事が返ってきました。そこで、もし彼女の都合がわるければ、来週の火曜か、あるいはその週末位にしようと思うけど……と私は言い添えました。いずれにせよ、女の子の方が、土曜日の朝に、私のところに電話をする、ということになったのです。

　間もなく二人は立ち上がって、皆に軽くあいさつをすると、そのまま出て行きました。これから彼らと一緒にどこかへいくとは思っていませんでしたが、あまりにあっけなく行ってしまった感じでした。私だけが、テーブルの一番端にとり残された風で、そのまますぐに帰れば二人に途中で会い、邪魔になるかも知れず、中途半端な気持でそのまま座わっていました。もとの席にかえってもいいのですが、皆をかきわけてその中におさまる気にもなりません。時々、遠くにかけてある円形のかけ時計の針をみながら、一人いらいらとしていました。時間がひどくおそしい様な気もしてきます。

フランス語での会話は、もう何も耳には入ってきていますが、私の方をみようともしません。一体何の為にここにいるのかという気がしてきました。立ち上がるきっかけを待っていたのですが、みつかりません。しかも、そのままもう少し我慢してそこにいれば、何かよいことでもある様な気がしていたのです。あの時計の針が、あと十分たったら立ち上がろう、もうあと五分たったらと思いながら、とうとう十時半をまわっていました。

やっと立って、マントを着はじめましたが、だれも気にとめるものはいません。このままあいさつもせずに行ったところで、だれも気づかぬかも知れません。しかしそれではあまりにみじめな気がしました。教授の方に歩いていって手を差しのべ、「ありがとうございます」と言うと、彼も手を出して、にっこりと笑いました。それから、教授のまわりの、二、三人の学生と目であいさつをかわすと、教授の隣にいた韓国人の女の子が、親しげな様子で「またね」と言いました。やはり、私のことは忘れていなかった様です。

メトロの駅について座わっていると、むかいのプラット・ホームに、あのやせぎすのヒステリックな女の子がやってきて座わりました。「もう別れたのか、それでは私が立ち上がった時は、皆帰る直前だったのか、韓国人の女の子はいないな、それならやはりもう少しがまんして残っていればよかった、そうすれば、まただれかと親しくなれたかも知れない。もしかしたら、ここにはいない、あの女の子、他の学生の中では、一番目についた、やや年上の、あの学生とも話が出来たかも知れない」と思いました。別に、その女子学生

に興味があった訳ではありませんが、そこから、先週の様に、また新しい世界が拓ける様な気がしたのです。そんな思いが一度に頭をよぎり、後悔しはじめました。

私と同じプラット・ホームに、すぐ私の近くに座わっていた女の学生達がやってきましたが、私の存在に気づかぬふりをしながら、知らん顔をして、というより、私が話しかけるのをまるで恐れている様に、わざわざ、私と反対側の、プラット・ホームの一番端まで、早足に歩いていってしまいました。先程まで、ああして同じカフェーの片隅に座わっていたのに……と冷水をかけられた様な気がしました。

やがて入ってきたメトロに乗り込んで、その一隅にうつむき加減に座わっていました。その夜はひどく疲れて、アパートに帰りました。しかし、ベッドにしばらく寝ころがった後、起き上がって、またタイプ用紙を取り出し、彼女に宛てて手紙を書きはじめました。土曜日になったからと知らせる為です。そしてもし都合がわるければ、帰り次第、すぐ電話をしてくれる様に書きました。

彼女にはじめて書く手紙です。しかし思いの外、楽に書け（日頃、改まった手紙は、特に、新しく知り合った女性に書く手紙は、ひどく苦労します）書いているうちに、先程の疲れは不思議に消えていきました。

その次に、別の紙に地図を描きはじめました。これも、かなり苦労すると思っていたのですが、下書きをした後、二回目で仕上がりました。二つのメトロの駅から、近くのスポーツ用品店、パン屋など書きましたが、一番の目印になる中華料理店は書きかけてやめま

した。私が東洋人であるのを思い、あまりに東洋的イメージが強くなり過ぎるかとおそれたのです。その代わり、住所にある〝ヴィラ〟（別荘という意）という言葉を大きく書きました。それを封筒に入れ、その表書きをする時、彼女の書いた住所をとり出しました。その丸っぽい字をなぞり、何度も何度も、彼女の名前を心の中でくり返しながら書きました。

　彼女の帰ってくるのは週末とはききましたが、いつのことなのかよくわかりません。金曜の夜、友達の家に呼ばれていました。しかし、もしかしたら、その夜に電話があるのではないかと案じ、昼にかえてもらいました。しかし、果たしてあるかどうかもわからない電話を、むなしく待つわけにもいきません。テレビのスイッチを入れ、映画をみはじめました……ほどなくその中に引き込まれていきました……突然電話のベルが鳴りました。

　反射的に受話器をとると、小さな、少しかすれて高い、あまり聞きなれぬ声です。何を言っているのかわかりません――ブラウン管では、映画のクライマックスにさしかかっています――何度かきき返すと、

「ルネ、ルネ、サンシェで、この間友達と会った……」あっと思って、何故念頭から去っていたのかといぶかりながら、「電話してくれてありがとう。手紙ついた？」と、あわててそう言いました。

「今、帰ってきたところ。友達にきいてみたら、一緒に行きたくないというので、もしよければ来週に……」テレビからまた大きな人の叫び声と、それと重なる様に、ラスト・シーンなのか、たっぷりとした音楽の束があふれてきました。しかしボリュームを下げる為に、彼女との会話を中断する気にもなれません。友達というのが反射的に、あの、フランス人の男の子と、韓国人の女の子のことで、先日、大学のカフェテリアであった時の、その、私を無視する様な顔つきが同時に浮かび、あすの土曜日、私を含めて映画かどこかへ行くことを彼らがしぶって、彼女と三人丈でいくことになり、たまたま私がその日の夕食をさそったので、帰りに私のアパートに寄りましょうかと、彼女が提案したところ、彼らがイヤがったのでは……とそこまでが、一瞬のうちに、頭の中を走りぬけました。

「それじゃ、月曜か、火曜か……あるいは、次の週のおわりにでも……」「いつでもいいわ。じゃ月曜にしましょうか……？」と言っています。なるべく早い方がよいと思い、その日に決めました。

「帰ってきて、すぐ電話してくれたの?!　そりゃどうもありがとう」と、これは心から言いました。

　少し間をおいて、「じゃあね、月曜日に」と彼女は言って電話は切れましたが、この「じゃあね（ボン！）」という言い方が、なんともいえず、やさしく温かみがありました。相手の気持を十分にくんで言っていることが、こちらにもよくわかり、フランス人のいう、かわいた調子の〝ボン！〟とは、明らかに違うひびきがあります。いつまでもこの響きが、彼女のやさしい想い出となって残りました。

　しかし、電話を切った途端、もしかしたら、彼女は、明日私を一緒に誘うつもりだった

のだろうかと思いはじめ、電話がよくきこえなかったこともあり、大変気になりはじめました。それならば、明日、彼女に会えたかも知れないのに……。

その翌朝、フランス人の女の子から、約束通り、電話を待っていたのですが、いつまでしても、電話はかかってきません。やがて、本当にかかってくるのだろうかという気がしはじめました。今までよくあった様に、さんざん待たされる丈ではないのか……一時まで外に出ずに待って、とうとうあきらめました。一体どういうつもりなのだろう。あんなにはっきり言ったのに、私の住所を失くしてしまったのだろうか……と思いながら。

その日は、珍しく、暑い日差しが朝から照りつける上天気でした。皆、それまでの、外套をかなぐりすてて、若い女性は、白い肌をむき出しにした軽装で街を歩いています。先週みた彼女の白い二の腕が目の前に浮かんできました。きょうも同じ様な姿をしているに違いない、そして一緒に、郊外の森の中を歩きながら、そのかたわらにいて、その健康なかおりの中に浸ることが出来たかも知れない……。

昼食をとりにカフェーにはいると、やがて真白いパンタロンをつけた、若い女の子が、友達と晴れやかな笑い声をたてて入ってきながら、斜め向かいのテーブルに座わりました。その若々しい息吹のたちのぼってくる様な様子をみつめながら、ああ、今頃、彼女と一緒にいられたかも知れないのに、とたまらなくなって、もしかしたら、会えるかも知れない、いや、こんな天気のよい日に、一人でアパートの部屋にいるはずはないなどと思いながら、服を着替え、タクシーをよんで、彼女のアパートまで出かけました。

ボナパルト街は、細い通りの、商店街で、ひどくにぎやかなところでした。「ああ、もう自分は、彼女のアパートの前を、うろつくことになってしまった」自分をあざわらいたい気持になりました。いつでも同じだ……今までの様に……。自分のしていることに、腹立たしいうしろめたさと、ばかばかしさを感じつつ、しかし、それでも、引き返すことは出来ません。彼女の住所の番号は59でしたが、何と二つ、この番号のついた建物がありま す。むかって一番右手の建物は、小ぎれいなショーウインドウに、ワンピースなどの並ぶ洋品店、もう一方は、B59と書かれてあります。

普通、学生などは、B（ビス）という文字のついた附属の様な建物に住む場合が多いことを思い、ここだろうかとドアを開こうとしました。しかし、そのドアはガラスのはまった、かなり豪華なもので、インターホンまでついています。これでは入れないと思っていると、ちょうど中から人が出てきたので、すばやく中にすべりこみました。赤い、分厚いじゅうたんが敷きつめてあり、「まさか、あの質素な彼女が、こんなアパートを借りるはずはない」と思いながら、それでも階段をのぼり、一つ一つ表札を確めようとしました。しかしほとんど名前は書いてありません。とうとう最上階までいき、見つからず、引き返しました。管理人にきこうかと思いましたが、その部屋がどこかわかりません。その間、もし、ここで彼女に出くわしたら……そう思った丈で、顔から火の出る思いがしました。「まあ、アパートまで来たの！」住所を渡したことを後悔するに違いありません。すぐに逃げ出したい気持でした。

部屋が見つからないのを、半分ほっとした気持で外に出ました。もう一度、洋品店の前を通り、その先をみると、ホテルがあります。外からみたところ、結構、デラックスなたたずまいに思われます。ここに部屋をかりれば、彼女の近くにいられるな、と思いました。誰か日本から人が来たら、このホテルをすすめようかと、そんなことを考えました。もう一度試しに引き返し、B59の、ふとその先をみると、うすよごれた、半ば消えかかった様な、黄色いペンキで、59と書かれている小さな入口がみえました。

ハッと思って、そのドアを押し開くと、うす暗い細い廊下のむこうに、ゴミ箱が、つみ上げられています。そこまで歩いていくと、急勾配の階段が右手にあり、その先は、闇に消えています。それに足をかけ、二、三段のぼりかけながら、「まさか、こんなところに」と思う気持と、しかし今にも、その上の闇から、彼女が駆けおりてきそうで、そのまま、かけた足をふりはなして、引き返しました。帰りは、右手に、ガラス戸の管理室の様な部屋が見えました。軽くノックしましたが、土曜日の為か、答えはありません。救われた気持で立ち去り、すぐにタクシーに乗って帰りました。

その夕方、私は、むちうちの治療の為に、知り合いの、指圧師のところに出かけました。彼は本業は学生でした。五時の約束でしたが、六時をすぎても、七時近くになっても、他の患者と話す声だけきこえて、診察室から出てきません。私はその間、待たされていた廊下につみ上げてある本のたばから、二、三冊の本をとり出して、時間つぶしに目を通していました。サルトルの関係の本の中に、ボーヴワールとの邂逅の場面がありました。この、きたならしい、風采の上がらぬ小男が、学友の女性達を、いかにのぼせ上がらせたかの話です。サルトルだって、女がいたのだ。愛される喜びをあふれる程知っていたのだ。それなのに……自分が限りなくみじめに思われてきました。

七時をすぎて、たまらなくなり、もう待てるかと外に飛び出し、数歩歩きかけた時、左ひざがガクリとおちて、強い衝撃を感じました。みると左足が、地面に半分ろまっています。穴におちたようす。背後で高い笑い声がおきました。みると、若い金髪の女の子が、他の女の子とこれが笑わずにおられるかという様に、笑いこけています。痛みに目がまわりそうになりながら、近寄っていくと、女の子は、顔をひきつらせる様にしながら、しかしまだくすくす笑っています。その若い女の子の、自分を笑う顔をみながら、サルトルの本を読んでいた時に感じた、自分のみじめさが、もう一度激しくよみがえり、なさけないいきどおりにかられながら、「他人（ひと）の不幸を笑うもんじゃない」と言おうと思いましたが、痛みと屈辱感とで口がきけず、そのまま、診察室の前の廊下に引き返しました。さすがに申し訳ないと思ったのか、中から「もうじきにおわります。もう少々お待ち下さい」という声がきこえてきました。その日は、結局、むちうちの他に、青くはれ上がったひざの治療もしなくてはなりませんでした。

九時近くにようやく家に帰ってくると、アパートの入口に、いつもは見慣れぬたばこのすいがらがおちています。アッと思い、郵便受けをみましたが、何もメモはおいてありません。もしかしたら、友達は来たのだろうか……予定通り、今晩だと思って……そして私

のいないのをいぶかり、少々気をわるくして、帰ってしまったのだろうか……彼らとの約束は、七時でしたから、それまでには帰れるものと思っていたのです。

　翌日、あすの月曜の夕食の為に、私は日本酒を買いに、日本品店に行きました。思いついて、徳利なども買いました。そして……その月曜日は来ました。頭の中で段取りなど描いてから、ベッドをおり、まず野菜を買いにオペラ通りの近くの日本食品店へ向かいました。とにかく分量もあり、またいろいろなところをまわらなければなりませんので、タクシーを使いながら、その次に、近くの日本料理店に行き、さしみを買い、そして帰りがけにその前を通った日本のお菓子屋で、羊羹を一本買って家に帰りました。

　一度帰ってから近くのスーパーマーケットで、足りぬものを買い集め、それから知り合いの人にもう一度、すき焼の作り方を電話で確めました。時間は飛ぶ様に流れ、約束の六時半になろうとしています。もう一度部屋を見渡し、気にとまったところをかたづけて、片すみの、インターホンの近くにある椅子にほっと腰かけて、果たして彼女は来るのだろうかと思いました。こうやって、同じ姿勢で、塵一つおちていないじゅうたんを見つめながら、その時私はむなしく待っていました。それは日本語の家庭教師をしようと、大学に貼り紙を出し、それに応募してきたフランス人の女の子です。一人は一度来た丈で、二度と来ませんでした。もう一人は、遂に一度も来ませんでした。

　約束の六時半はまわろうとしています。また同じことかも知れない。十分程過ぎた時、ビーッと、頭の上のインターホンが鳴りひびきました。飛び上がって受話器をとると、

「ルネ」という、少しはずんだ、短かく切る様な調子の声がしました。

「入って」と言って、インターホンについているボタンを押し、入口のドアをあけました。

　それからいそいで、ステレオのプレイヤーを、レコードの円盤の上にのせました。ヘンデルのミサ曲のゆっくりとしたテンポが流れはじめます。誰か招待した場合は、はじめはいつもこの曲をかけることになっていました。そのゆったりとしたテンポが、部屋の空気を整え、いかにも人を迎え入れるにふさわしい雰囲気になる様な気がしていたのです。にっこりと、笑みを一杯にふくんで、彼女は入ってきました。

「私が一番後かと思ったわ」いつもよりも、心なしかきれいな服装をしている様に思われます。何か心が痛みました。別にだました訳ではありませんが、他の友達は来るはずはありません。土曜日の朝、かかってくるはずの電話がなかったことなど説明し、「でも、もしかしてまだ来るかも知れないけれど、よくわからない」と言いました。何故か、本当にそんな気がしていたのです。

「きっとわからなかったのね」と彼女は軽くうけながし、別にこだわる風も見せません。彼女の、率直な気持に打たれました。「電話がかからなかったのは少しがっかりしたけれど」これは半ば本当で、そして半ばうそです。「でも、君が来てくれてうれしい」と小さな声でつけ足しました。これはもちろん本当です。

　彼女は、ベッドの頭の近くに腰かけ、私はその隣に、少し離れて腰かけました。テープ

ルの上に既に用意してあったおかきと紅茶をすすめながら、少し話をしました。

「やっぱり来ないね。じゃあはじめようか」としばらくしてそう言って立ち上がり、冷蔵庫からさしみを出しながら、「きょうは全部純日本式で通すよ」とふり返って言うと、彼女はにっこりしました。

「これ、典型的な日本料理の一つ。生魚食べたことある？」ときくと、ふたたび笑みを浮かべて「いいえ」と言います。

「じゃ試してみたら？ イヤだったら食べなくていいんだよ」と言いました。

彼女は笑みを絶やさず、じっと大皿の上の赤い生身をみつめています。私はまず、日本酒のびんとシャンペングラスをテーブルに並べ、同時に、おかんの用意をしました。グラスについで、乾杯すると彼女はビールの様にそれを傾けて飲むので、「それ強いよ」と言うと、少し笑って「おいしいわ」と言いました。

それから私が箸を手にとると、ちらりと私の手元をみてから、おどろく程上手にそれをあやつって、何のためらいもなく、さしみの一片を口に運びました。

「おいしい？」ときくと、「ええ」と、にっこりしました。自然なその態度にびっくりしながら、異国の文化に対する実にみごとなその対応に心を動かされました。私は今まで、ある程度日本を知ったフランス人の友達しか知りませんでしたが、このほとんどまったく日本を知らない彼女が、何の抵抗もなく、素直に反応していくことに、うれしいおどろきを感じたのです。

それからおかんをしたお酒をすすめ「どちらがおいしい？」ときくと、冷やの方だと答えました。それから彼女は、おどろく程よく話しました。早口でよくききとれぬこともありましたが、そのいかにも明るい、生き生きとした話し方に魅きこまれていきました。

「ヴィラって、すてきな名前ね」と言っています。やはり効を奏したかと思いました。それからお互いのアパートの話になり、「君のところ、どれ位？」とおそるおそるきくと、「タダ」といいます。「タダ?! どういう意味？」「どういう意味」と彼女は私の言葉を繰り返してから、「週三回、月、火、水に、家主の子供を二人、午前中あずかってて、それでタダになるの」と言いました。そうすると、あの電話番号は、その家主のアパートのものなのか……これではじめて、彼女の住所の〝なぞ〟が解けました。そして、私がわたされたものがどうでもよい人用の為の電話番号だという、自分の〝思いすごし〟についても……。

しばらくして、本番のすき焼にうつりました。「お料理するの、はじめてなんだ。うまくいくかどうかわからないよ」と言いましたが、事実誠に不安でした。

「何か手伝いましょうか？」「とんでもない、きょうは君はお客さん、そこに座わってて」と言って、白菜を切ったり、肉を冷蔵庫から出したりしていると、「レコードみてもいい？」と言っています。「もちろん」といって、ふとふりむくと、ステレオの前に、長い足を折り曲げて、ちょこんと座わっていました。

「ダリダ好きなの？」

「うーん、まあまあ。二度も公演みにいったよ」

「よかった？」

「わるくない」

「ねえ、そこにあるレコードの表紙……うん、それそれ。グレース王妃だよ」

そういって、彼女の顔をのぞき込みましたが、何も言いません。私はグレース王妃が、というより、グレース・ケリーが好きでした。

彼女がもとのベッドに座わり直した時、「何か君のききたいもの言って」と彼女を見て言いました。少し考える様にしてから、「ベートーヴェン！」と、その言葉に合わせる様に、首を前に少しふり出して言いました。私のレコードの大方は、ベートーヴェンだったのです。

「オーケストラがいい？　合唱がいい？」「うーん……オーケストラ」そこで、第九交響楽の第三楽章をかけました。しかしそれが合唱にかわった時、「ね、知ってる？　これ。ミッテランの大統領就任式の時、演奏されたの……」「ええ、ええ、ええ」と、彼女は思い出した様に言ってから、私を見上げてにっこりし、「パンテオンの前できいたわ」「行ったの？」「ええ」この前、デカルト街のレストランで食事をした時は、友達にさそわれても、ことわっていたのにな、とふと思いました。

それから友達から借りてきたキャンピングガスを用意するのに少してこずりました。次にいよいよ火をつける段階になって、マッチのないことに気づき階下の家主のところに借りにいきました。火をつける時、何度も火傷をしそうになったり、思わず手を引っ込めたりしていた為か、彼女の顔から笑いが消えて、不安そうな顔つきでながめています。はや、愛想をつかされたかなと思っていると、ようやく火がついて、なべをその上に置きました。

ところが、予想通り、油を敷き、野菜を入れ、それから肉を入れると、たちまちそれは黒こげになり、けむりがたちはじめ、やがてモーモーと部屋にたちこめはじめました。二人とも目が痛いやら、咳こむやら、窓の方へいったり、ドアをあけたり、部屋の中を右往左往した末、彼女が「そこの窓あくの？」と、机の前の、いつも閉じている窓を指さして言ったので、カーテンを開き、力いっぱい押し開くと、入口につづく庭がきれいにみえました。「ここ開けるのはじめてだ。ああ、いい景色だねえ」と私は言っていました。

この窓のおかげで、けむりはようやく退却しはじめました。その時、ドアのベルが鳴りました。何だろうと思って開くと、真上に住むマドモアゼルが、「すみません。でも何かあったんでしょうか？」と、笑い顔をつくって、しかし少しあわてた様子で、息を切らせて立っています。「ああ、なんでもありません。お料理していて、けむりが出たんです。御心配なく……」と言うと、笑ったまま、「ああ、わかりました」と言って帰っていきました。

いつもは、出くわしても、にこりともしないその顔つきを思い、妙に機嫌がいいのに、不思議な気がしました。もしかしたら、彼女が居るからだろうか……。でも、彼女はその

時、部屋の奥の、ベッドの上に座わっていましたから、わかるはずがありません。やはり、私の態度が、彼女の為に、少し違っていたのかも知れません。屈託がなく、しあわせそうにみえたのかも知れません。笑いながら部屋の中に帰ってきて、「上に住む人。火事かと思って、飛んできたらしい」と彼女に言うと、心配そうな彼女の顔に、笑顔が戻りました。

なべの底にへばりついた黒こげの肉片をけずりおとしてから、「どうしてこうなんのかな？」と言いながら、水を次第に足して、もう一度、おそるおそる肉を入れました。今度は、けむりもそれ程たちませんでした。それでも焼けすぎの、固くなった肉片を、彼女にすすめ、「大丈夫？」ときくと「ええ」と何でもなく答えて、口に運んでいました。

「お箸、本当に上手だね」と彼女の手をみながら、もう一度、自分の箸を持つ手をみせて「この親指が大事なんだ」と説明し、「ちょっとごめん」といって、彼女の、箸を持った親ゆびにかるく触れました。思いの他、大きな頑丈そうな手です。ほの温かい彼女の体温が、その指の一点から伝わってきて、心の中でわずかにふるえました。

例の初恋の女の子が、私の部屋に、その男友達と居る時、彼は、よく、彼女の手や、時には腕を、何かいう度になでたりさすったりしていました。そして私はその度に、その白い肌がいやでも目にしのび込んできて、息苦しくなりました。彼らは、別段恋仲という程でもない様でしたし、またその女の子は、普段、格別の〝きれい好き〟で通っており、男の背広をもつ時すら、不潔そうにつまみ上げていましたので、この時にこにこしながら平

気でさわられている彼女が、私にはどうしても理解出来ず、また、その指の先すら触れたことのない自分を思って、たまらない気持になりました。

初恋というものの、こちらが好きになった丈で、彼女はそんな私の気持を知りつつ、むしろ、その様な私の感情を、逆なでする様なことを、たとえ無意識にも、しながら、私の気持に対して、応えていたのかも知れません。この〝ふれ合い〟も、あるいはその表現の一つだったのでしょう。

この女性に限らず、少し女性に慣れた男が、よくも知らない女の子の、手や肩に平気で触れるのをみながら、その度に、そこには、私の測り知れない世界があると感じ、はじめから、私はそういう世界に入ることは禁じられていると感じました。どうしても自分には出来ないだろうと思っていたのです……。しかしこの日、はじめてそれを、このオランダ女性に、おずおずと試みました。しかし、その長くて大きな指の上にのった、自分のか細い指をみて、思わず引っこめました。

彼女は、相変らずにこにこと笑みを一杯に浮かべ、私をまっすぐにみつめて、早口に話しています。机のスタンドの、斜め下から照らしてくる光に、眉のない、普通なら、少々気味のわるい顔になるはずですが、彼女の、そのややまるい、若々しい笑顔は、やはりかわいらしく、そのふっくらとした下くちびるが、油でキラキラ光っているのも構わずに話しつづけています。私は立ち上がって、戸棚から紙ナプキンをとり、彼女に渡しました。

彼女ははじめて気づいた様に、少しの間話すのを止め、「ありがとう」と短かく言って、

口をぬぐいました。

「食事はどうしているの？」と私がきいたことから、大学食堂の話になり、「他のところは知らないけれど、ソルボンヌの近くの食堂にいって食べたら……」と言って、舌の先を少しつき出して、「ぶるぶるぶる」とそれを左右に動かし、首をふって、おどけてみせました。

ひどい味、という意味ですが、それがなんの飾り気もない、少しボイッシュなジェスチャーで、今までの私の女友達と確かにちがうと感じました。彼女達は、どちらかというと小柄で、繊細な感じでしたが、同時に、やや神経質なところもありました。

しかし、ジーパンの足が、前に置いてある机の角に、ほとんど達しそうな程長いこの彼女は、その為か、繊細さというより、おおらかな温かさを感じさせます。そして同時に明らかにそこに、若々しい健康さと生命力を感じたのです。彼女の発する生命のその息吹に、自分の生命を弱々しくさえ感じました。「いや、でもこれもすべて、彼女の大柄なせいかも知れない」

「日本では、肉は何を食べるの？」皿にもられた生肉を、しゅっしゅっと勢いよく音をたてているなべに移していると、突然彼女はそうききました。どうしてこんなことをきくのかと思いながら、「うーん、ことだいたい同じだよ。牛とか豚とか……羊はそれ程食べないかな……」と答えました。

ふと「君の様な女の子……」とふざけて答えようかと思いましたが、言葉にはなりません。たぶん、笑って受け流すでしょうが、あるいは、極東の国、自分にとってまったく無知の国では、あり得るかも知れないと思い、急に私がこわくなって変に警戒しはじめるかも知れないと思ったのです。娼婦と性交している時、その豊かな尻にかみついて、「日本じゃ、西洋の女の子を食べるんだよ」と言いたくなる時がありましたが、彼女の前で、たとえ冗談にしても、とてもそんなことは言えませんでした。

ステレオからその時「クロイツェル・ソナタ」が響いてきました。そのか細い、しかしやわらかい曲想が、空中をかけぬけていく様に思われた時、彼女の、ほんのりと紅のさした白い頬が、そこに溶け込んでいく様に感じながら、思わず、「この曲、きれいだね」と言いました。彼女は、軽く首をかしげて「ええ」といった文でした。

フランス人の話になった時、フランス人は、外国のことは何も知らないといって、「オランダの出身で、というと、ベルギーもドイツもオランダも皆一緒ってよくいうわ」と笑っていました。そこで私は自分の経験を話して「コイン・ランドリーに行った時、その店の主人が、『フランス人は、自分じゃ何もつくれない。この機械にしたって、ベルギー産よ』と言ったけど、その機械の名前、どうみたってドイツなので、そういうと、『ベルギーもドイツもオランダも同じよ』って言ってたよ」と言いました。「そうそう！」と彼女は大きく笑ってうなずきました。

「フランス人に比べたら、オランダ人は、かなり外国に慣れてると思うわ。もっとも、私のおばあさんは、外国人ってきくと、端から皆ダメって言ってたけど……」といかにもお

かしそうに、しかし深い愛情をこめて言った後、「もう死んじゃったけど……」と言った時、ふっと目に涙が浮かびました。早口で話しながら、ふとみせたそのやわらかい心の動きに、胸があつくなりました。

私は彼女の受け皿をとって、それに焼けた肉を入れようかと思い、彼女の手から、その箸をとりました。心なしか、彼女はおどろいた様に少しだまっていました。西洋では、他人の食器に触れるのは非礼なのかと思いましたが、私の箸でするより、よいと思ったのです。箸には、彼女の体温がしみ込んでおり、彼女の手に触れるより、はるかに彼女を感じました。「おおすぎたら、残していいんだよ」と、少し心配になっていうと、「これが、最後」と答えました。そういった、ちょっとした言葉の端や、しぐさが、実に屈託がなく自然で、何の抵抗もなく、こちらに伝わってくるのです。彼女の箸のまま、皿から新しい肉をなべに移し、それからその箸で、なべの中をかきまぜました。そして箸を返した後、かきまぜたあたりから、焼けこげた肉片をとって口に運びました。

すき焼なべを台所のガス台の上に置き、テーブルを片づけてから、羊羹を取り出しました。その間彼女は、本棚の方にむき、私に背を向けていました。私が近づいていっても、そのままの姿です。

「僕の研究している作家の本はこれと、これと……」と言って、三、四冊その中から仏訳を取り出し、「よかったら読んでみて、どれか……。借すよ」と言ってから、川端康成の「雪国」「眠れる美女」「みずうみ」の概略を説明しました。「眠れる美女」のエロテック

な筋を説明する時、ふと彼女の方をみました。最後に「どれがいい？」ときくと、「雪国」と言いました。「ゲイシャって、知ってる？」ときいた時、彼女が「いいえ」と答えたことに何となく好感を持ちました。

それから、私の参加し、写真ののっている座談会の記事のある雑誌を取り出し、彼女に見せながら、他の三人の座談者が、どういう人なのか説明したあと、ふたたび自分の写真を示して、「この人は何もしていない」と少し笑って言うと、「今に……」と彼女はほほ笑んでいました。何でもないその言い方に、彼女の温かい思いやりを感じました。

私の研究の話を少ししてから、本棚の端にしまってあった修士論文をとり出して彼女にみせながら、「このあたりは、君にも少し興味あるかも知れないけれど……」と言って、ヨーロッパ前衛芸術運動の研究の章を指さしました。彼女は手にとって、その目次をながめていましたが、それ以上はページをくりません。「これが出版されたら、進呈します」と言いました。私の論文は、その予定があったのです。未だ存在せぬその本の表紙を、手のひらに感じながら、彼女に渡す時のことが、心に浮かびました。

「君もD・E・A（博士課程の一年目）？」という質問から、少し彼女の大学の話になりました。ベアール教授のことか、「何を言ったって、ウンウンウンで、笑っててバカみたい。その点、エコール・ノルマル（フランスの最高教育機関）はとてもまじめだわ」と言っていました。彼女の発表した時、鼻の下を長くした笑顔で、その隣にいた教授の顔が浮かんできました。彼女は、エコール・ノルマルの授業にも出席しているのか……。

「オランダでは、外国語はいつ頃、何からはじめるの？」ときくと、

「リセ（高等学校）で、英語の必修の他にフランス語とドイツ語の選択があって、私ははじめドイツ語をとってたけれど、ドイツ語はとっても難しいので、フランス語にかえたの。英語が一番簡単。でも今はフランス語の方がいいかな」と言っています。

「ドイツ語もうまいじゃない」と言うと、

「わかることはわかるけれど……どうかしら、発音の方は……」と言って、照れた様に少し赤くなって笑いました。

それからふと手元の「雪国」の表紙に黒々と書かれた漢字を長い指でたどりながら、

「これ何て書いてあるの？」ときくので、これが雪という意味、これが国という意味と、一つ一つの漢字の意味を説明しながら、日本語の話になりました。やはり日本語にアルファベットはあるのかときいています。「君は日本語を習う権利があるよ」と、ふとこの間のカフェーで、日本語をきいていたあのフランス人の女の子達のことが心をよぎり、わざわざ来てくれた彼女への感謝の気持をこめて、そう冗談まじりに言い、タイプ用紙をとり出して、まず、簡単な象形文字を並べました。〝木〟のかたわらで〝人〟は〝休〟むなどと言いながら……。

その次に、「日本語のアルファベットには二つある」と言って、ひらがなと、カタカナの表を書きました。あいうえおを、これが基本音といって書いた後、そこから発展させて音を重ねて説明し「君の名前はどう書くかわかる？」ときくと、一音ずつ表でさがしながら、しかしすぐに自分の名前を、私の文字をまねながら、書きました。

その後、彼女の苗字や、国の名前など、大変のみこみが早く、すぐに書ける様になりました。最後にその表を大事そうに折りたたむとバッグにしまい込みました。そして、「ヨーロッパ言語は、皆同じ様なものだけど、アラブ語や日本語はぜんぜん違うわね」と言いました。どうして突然アラブ語がでてくるのかと思い、そう言われたことに、やはり西洋人である彼女にとって、ヨーロッパ以外の外国語は、皆同じなのかと思い、少々がっくりしました。大変無邪気に言われた丈にかえって心に残ったのです。

最後に、彼女は、七月の半ばにオランダに帰り、それから友達と〝大旅行〟をするのよと言っていました。「どこ？　ヨーロッパ？」ときくと、「もっと遠いところ」と言うので、冗談に「日本？」と言うと、笑って首をふりました。とうとうその行き先は、ききそこねました。「その旅行の後は？」とふときくと、「さあー」と笑いが消えて、しばらくだまっていましたが、「またパリにくるかも……」と、晴れやかな笑顔と共に、そうつけ加えました。「それはいいじゃない！」と私も笑って言いました。私はその頃日本に帰らなければならないと思いながら……。

時計が十時半をまわった頃、「じゃそろそろ帰るわ。また明日の朝、子供を預からなければならないから」と言いました。先程、外食といっていたことをふと思い出し、日本から送ってきたインスタント食品をいくつか取り出して、彼女に渡しました。その一つの、カレーの箱の裏の説明書をみながら、「るるるるる……〝ブレイク！〟」と、最後の英

語の部分丈、巻き舌で、おどけた身振りで首をふりながら発音し、「これ丈はわかるわ」と笑いながら言いました。そして「どうもありがとう」と、にっこりしてそれをバッグに入れました。それから、表の鍵をあける為に、下までおりていきましたが、そのまま、メトロの駅まで送っていくことにしました。彼女は上機嫌でした。

アパートの庭におりたった時、「とてもいい感じね」と言っていました。昼間は小鳥の声に満ちているその小さな一画は、夜のしじまに静まり返り、黒々とした枝がその中で息づいています。門から外に出た頃、「オランダに来るんだったら、住所あげるわ」と、にこにこして言いましたが、「もっとも私、いるかどうかわからないけど……」とつけ加えました。それ程寒くなく、心地よい夜でした。

メトロの近くまで来た時、「おにいさん、日本に来たことあるんだって?」と、この前の時の話をおもい出してそう言うと、何故かちょっとつまって「ええ、船で東南アジアの方からまわっていったの」と言いました。ああ、そうだったのか、西洋人が日本に来る場合、大抵、他の東洋の国とかけ持ちでくるもんな……。彼らにとってはそれが普通なのでしょうが、何故かこの事実を、あまり愉快なことには受け取られなかったのです。

メトロの高い階段をおり、切符売場の前までくると、急にこちらを向いて、明るい笑顔で、「本当にどうもありがとう」と言いました。一瞬、何故お礼を言われているのかと思いながら「こちらこそありがとう。慣れない料理でごめんね」というと、「ううん、よかったわよ。〝けむり〟以外はね」と言ってまたにこやかに笑いました。その〝けむり〟と言った時の、少しおどけた明るいやわらかい発音を忘れることが出来ません。

「それじゃ、他の友達と連絡をつけて、映画に行く日が決まったら、電話するわね」とキチンとした調子で言い、それから、ショルダー・バッグの中をさぐりながら、何か探しています。それでもみつからないのか、バッグを肩からはずし、しゃがみ込み、ひざにのせたバッグを大きく開きました。中にあるものがふと見え、彼女の世界をのぞきみした様な気がして、すぐに目をそらしました。定期券を探していたのです。それを手に取って「さよなら」と、改札口の中に消えていきました。

私は後をふり返らずに、すぐに立ち去りかけましたが、ふとその時、切符売場の女の人は、私達をどう見たのだろうと思いました。背の高いヨーロッパ人の若い女性と、背の低い東洋人の男が、親しげに言葉をかわして、別れたのを……。

アパートの部屋に帰ると、まだけむりが残っているのか、けむたさと、すき焼のにおいと、そして熱気が一緒になり、息苦しい程でした。もう一度窓のあいているのを確めて、ふと見ると、彼女の座わっていたベッドのところがへこんでいます。さわると、まだ温みの残っている様な気がしました。腰をかがめて匂いをかぎました。彼女のにおいがした様に感じました。

その前のテーブルの上には、彼女の使った箸やおわんが、また机の上には、日本酒のはいっていたシャンペングラスやおちょこがあります。

まず箸の、口をつけて茶色く変色したその先をなめました。

次に、シャンペングラスの底に残っていたしずくを、口に流し込み、そのグラスの、やや曇った縁を、舌の先でなめまわしました。おちょこも同じ様になめると、これは、彼女の口から運ばれてこびりついた、すき焼のにおいが強くしました。

それから、おわんに残っていた肉片や、食べ残しの野菜を、むさぼる様に喰べました。まだおなかが減っていたのでしょうか……。おそらくそこに、彼女のにおいを、彼女を求めたのでしょう。

高校の頃、給食に配られるコーヒー牛乳のびん——それを、少しかわいらしい女の子が、飲みおわって、ケースに返してあったのを、わずかのすきをみて、口にもっていき、その中の数滴を、のどに流しこみました。その時の、あの甘い味を忘れることが出来ません。コーヒー牛乳の味に違いないのですが、彼女自身の味のように感じ、恍惚となったのです。

その為か、身体の弱かった私が、体育の授業に出席できず、よく一人だけ教室に残っていた時、抗し切れずに、彼女の食べおわった弁当箱を取り出して、その中にあるかわいらしい箸の先をなめまわしたことが一度ならずありました。手が、体中が、ガタガタとふるえ出しながら、うしろめたさからくる恐怖感と同時に、文字通り、ふるえる様な喜びを感じていたのです。

あるいは、女の子と一度も口づけしたことのない私の形をかえた抱擁だったのでしょう

か。うしろめたさが、かえって奇妙に喜びをつのらせたともいえるのかも知れません。今でも、その子の弁当箱の残り香を感じる様です。

彼女の使ったおわんなど、洗うにしのびず、そのままガスコンロの横におきました。箸は、割り箸でしたから、そのまま紙差に入れて、やはりおわんの上に置き、それから自分の使った分だけ、きれいに洗いました。

その夜は窓を閉めずに寝ることにしました。けむりのにおいや熱気の為ですが、それさえなければ、彼女の残り香をのがさない為に、窓をぴったりしめ、それを体中に感じながら、ねむりにつくつもりでした。それでも、ベッドに横たわると、言い知れぬ幸福感が打ちよせてきました。満足感と言いかえてもいいものです。そして身体の疲労にもかかわらず、頭は熱して、いつまでもいつまでもさえわたり、彼女の言葉、彼女の表情、その笑い声が、次から次へと思い出され、しあわせなほほ笑みがうかんでくるのを禁じ得ませんでした。そして何かじっとしていられない気持になり、一番親しい友達に、「とうとう、僕の恋人が出来たよ！」と叫んでいる自分を頭に描きました。そして自然に、涙があふれてきました。そこで、彼女の素晴しいことを、つぶさに彼らに話すのです。

そして次には……いつもの様に、彼女は自分のかたわらに、真白い衣裳をつけて、ういういしい表情で立っています。「死が二人をわかつまで……」という神父の言葉に、彼女は小さな声でうなずき、その指先が、私の手の中で軽くふるえています……。

次に、彼女は、白い病院のベッドに、青白い疲れた表情で横たわっています。その視線

が、私の入っていったことに気づいてこちらにそそがれると、そのかたわらに近づき、その汗ばんだ額に、そっと接吻して「ありがとう」と、心の底から言います。うっすらとほほ笑んだ彼女の手がのびていった先に、真赤な、新しい生命が横たわっています。そこまできて、新たに涙のあふれてくるのをおさえることが出来ませんでした。この幻を何度、私は見てきたことでしょう……。あの初恋の女性にはじまって、女性と知り合い、胸をときめかせながら、その姿が、心を去らなくなる時に、それはいつもみる幻です。そしてその幸福の瞬間は、しかし必ずまもなく破れるのです。それを何度くり返したことか……そして今、彼女が……。

ふいに、一カ月前、デンマークで知り合った、あの彼女のことが思い出されました。知り合った晩、あんなににこやかに、親しげに、私をアパートに招いた時の顔、その翌日、私が重いカバンをもって、ホテルを引き払ってやってきた時の、彼女の笑いの消えた顔。そして……二人で、コペンハーゲンの街を散歩しながら、次第に黙り込んでいったその顔。彼女と二人丈でアパートの部屋に居た時、チェスが出来ないと言った時の、彼女の半ばあきれ果てた顔。そして……約束していたはずの、夕食のことをすっかり忘れてしまった時のあの顔。やがて、私が部屋の中にいる丈で、いらいらしていたあの顔……。

それは、初恋のあの子が、アパートの、私の部屋に入ってきた時の顔に重なります。

彼女の、関西の大学のすぐ近くの同じアパートに、私は東京からやってきて、住みました。その二年前の夏、私は彼女にはじめて会い、その後、彼女の両親にあてて、手紙で彼女への気持を述べました。はじめて、アパートの近くの喫茶店で話した時、彼女はひどく陽気でした。しかし直に、彼女は、私の部屋に、男友達を連れてくる様になりました。私の態度は変にぎこちなくなり、それに反比例する様に、彼女と彼とは、ますます親しくなっていく様でした。

ある日、近くの家にお風呂を借りていた彼女を、夜道を送りにいった時、中華ソバ屋に入りました。「最近よく食べるんですよ」という私の言葉に、「欲求不満の時は、よく食べるんですって」と彼女は答えます。「それでふとってるんですか？」と私が言うと、彼女はしばらくだまり込んだ後、「冗談言うの、もっと練習した方がいいですよ」と言いました。

毎晩の如く、男友達とやってくる彼女がある日「わたしこのごろ、面喰いになってきたわ」と言います。この友達とは別のもう一人の親しい男友達は、アラン・ドロンに似ているわ……私への、あてこすりかと、その言葉をきいていました。

その私の部屋には、スウェーデンかどこかの街角の噴水で、小さな子供達が、水浴びをしている写真のついたカレンダーがありました。その、北欧らしいやわらかな春の光のあふれた情景を「どうしてこの世はこんなに美しいんだろう」と感じながら悲しい気持でな

がめていました。

翌年、私は、関西の別の大学の大学院の試験に合格し、引越しました。そのアパートに、彼女は毎晩お風呂を借りにきました。彼女の入っている間、私はテレビをみます。おわると、大抵彼女もテレビをみていきました。それが私の毎日の生活の中で大きな楽しみになりました。

彼女の入浴中は、決して台所にはいかないことにしました。台所と、風呂場の間の戸はこわれて、半開きになっていたからです。しかしある晩、彼女の湯上がり後の為に用意した果物の皿に、ホークの欠けていることに気づき、ふと台所に出てしまいました。すると、そのすりガラスの窓に、彼女の影をみた様な気がし、あわてて部屋に飛び込みました。

やがて彼女も、阪神間がよいということで、私のアパートから一駅のところに引越してきました。そのアパートは私が見つけ、保証人になりました。

そのアパートには、電気のカサがなかった為、私のところにあったものを下げて、届けにいこうとしました。タクシーで、そのアパートに通じる坂をのぼっていく時、彼女の部屋の窓にあかりがついているかどうか確めました。ついています。思わずギクリとしながら、果たして今晩は、行ってよい晩なのだろうかと思います。電気のカサを下げて、こうして夜道をやって来たことによって、僕の彼女に対する気持の、何分の一かでも伝わり、僕に対する気持も、少しはかわるのではないか。イヤ、急に僕のイメージがかわることだってあり得る……そう思いながら、しかしそれは果たして今晩か……彼女は今、どんな気

持でいるのだろう。もしかしたら、今晩は絶好の機会かも知れない、いや、それはあるいは明日かも知れない……。

そう心にくり返しながら、アパートの階段に足をかけます。今度踊り場に、右足からついたら、ゴーだ、左だったら帰れ……右だ！……いや、さっき足ふみした為ではないのか……そう思っているうちに、彼女の住んでいる一番上の階に出ています。六甲連峰から吹きおろしてくる冷たい風に、頬をふるわせながら、しのび足で近寄っていき、ドアのベルに手をかけますが、まわり中の空気が壁にでもなった様にそれ以上身動きは出来ません。

やがて一歩ずつ、ぬき足で下がり、それから、彼女の部屋の方をちょっとふり返り、また階段をおりていきます。左でおりたら引き返せ……右だったのでそのまま坂をおりていきました。そしてそこから、もう一度彼女の窓をふり返ると、何故かあかりは消えていました。出かけるところだったのか……そうすると、もうすぐおりてくるかも知れない。はやく消えなくては……こんなところでうろうろしているところをみられたら、それこそすべてはおわりだ。そう思って通りかかったタクシーにとびのり、それからもう一度ふり返ると、またあかりはついていました。「やはり居たのだ……」闇に沈む、ひんやりした夜景をみながら、失敗したのでは、やはり絶好の機会を失なったのではと思いはじめます。

「あの信号が赤になったら、ストップ、やはり失敗したのだ」と思ってみます。はやく走れ、はやく走りぬけ、でないと赤にかわってしまう……あっ、黄色になった……車はその時、交叉点の真中を横切りました。ぎりぎりでＯＫという意味なのか……。

自分のアパートに帰り、階段を上がって、部屋に入り、あかりをつけ、ほっと息をつきながら、やがて夜のしじまが一斉に鳴りはじめ、彼女の部屋の窓のあかりがみえてきます……そして、私はまた、闇の中におりていきます。タクシーにのり、今度はその坂の下でおりると、電気のカサをユラユラさせながら、また私は坂をのぼっていきました。どうか居ない様にと祈りながら……。

しかしその窓を見上げると、やはりあかあかと灯はともり、その中で彼女の影がゆれていました。「どうしてあの影の為に、こんなに苦しまなければならないのだろう。いっそあんな影など消えてしまえばいいのに……」しかしその内、そんなことを繰り返すことに次第に慣れ、そしてやがて、そうすることが、私の、彼女への愛の表現のような気がしてきたのです。もちろん、彼女は何も知らず、自分だけの、秘められた世界でした。いつ、どうやって、その電気のカサを彼女に渡したかは覚えていません。

二年後、彼女は卒業し、私は修士課程をおえて、関西を去りました。その年のおわり、福岡の彼女の家に行った折、別むねに引越した彼女の、そのガラリとしたもとの部屋に、私はとまることになりました。まだ彼女の机がおいてあり、抗し切れず、その引き出しをあけると、あのドロン君が、彼女と肩を並べて写っていました。その肩には彼の手がまわり、私のみたこともない様な、明るい彼女の顔を、そこに見出してすべてを悟り、はじめて、静かに、彼女との過去をふり返ることが出来る様になりました。

「毎日お風呂にいれてあげてるなんて、すてきやわあ」男女のゴチャゴチャした関係が一番イヤで、結婚なんて考えられないと言っていた大学院のクラスメートの彼女は、私の初恋の経験を語った時、そう言っていました。彼女のいうフラタニティー（友情？）とかいう関係で、それでも私達はよく会っていました。

大学院を卒業した一年後、パリへの留学の決まった時、結婚間近の友人の勧告もあり、一度別れてしまったら、それきりだという両親の言葉もあり、ついに彼女にプロポーズする決意をかためました。父の会社の寮の二階で食事をしながら、八時間彼女の隣にいました。こんなに長い間二人きりで一緒にいられたことをうれしく思いながら、しかし、私がきれいすぎるとか、結婚という概念がのみこめないとか、雲の中にいる様な気持で、彼女の言葉をきいていました。

その後一人神戸にくり出して、たった一軒知っていたバーにのり込み、そこの女の子の一人に、彼女のことを必死になって話していました。どうしてもふられたとは思われず、彼女を送っていったタクシーの運転手に、「あの子、あんたに気があるんとちゃうか」と言われ、その気になって、もしかしたらそうかも知れないと思い、そのまま神戸にそのタクシーをとばしていったのです。いや、パリにいってからすら、いつか彼女もパリにくるものと思っていました。そこでその二年後、突然、「わたし、結婚します」という手紙を受け取った時、一瞬どう考えてよいかわからなくなりました。

彼女は、ピアニストの卵でした。私がパリ留学に発つ、その春のはじめに、彼女もパリに留学したいと言って家にやってきました。ちょうどレッスンを受けていたフランス語の先生を紹介し、時間を合わせて、一緒に通いました。そのレッスンの為に、私は作文をつくって、それをその場で読むことになっていましたが、いつかその文章を、片わらできいている彼女の為につづっている様な気がしてきました。しかし結局彼女は、家族の反対にあって留学は断念し、その代わりに、夏にはヨーロッパにくると言っていました。

パリに来ても、彼女に手紙を書くことしか考えられず、どこをみてまわることも出来ず、フランス語の勉強すら出来ず、慣れぬ異国で、もんもんとした毎日を送っていました。

その夏、彼女がロンドンに、英語の勉強にきているということは知っていましたが、住所は知りません。ちょうどパリに来ていた父が、日本に居る母と、彼女のことを電話で話しながら、メモをとっているのを目にし、その上の紙をはがして父の立ち去った後、いくらかペン跡の残っている下の紙をひきちぎり、学校の住所をつきとめました。そしてまだパリに居た父を置いて、ロンドンに発ちました。

ホテルにつくとすぐに、その学校にいき、授業の合い間に学校のカフェテリアで友達と楽しそうに話している彼女を伺い、少しためらった後、そこから彼女のでてくるのを待っていました。そしてそこで私達は、その翌日、バッキンガム宮殿をみにいく約束をしたのです。彼女がピアノを一人で練習している、貸し部屋に迎えに行き、しばらく彼女の弾いているのを、真後の椅子に座わってみていました。「よく、二本の手が、同時に違う様に動きますね」とふと言うと、「あらまたこれは初歩的な質問を……」と彼女は言いました。

その日は半日だけ彼女と一緒でした。その翌日、私達は今度は郊外にいきましょうと約束をし、ハンプトンコートに決めました。うれしさと、若干の不安とで朝から胸が一杯になって、待ち合わせの場所まで出かけると、彼女のかたわらには男の子がいました。同じ学校の仲間だという、その背のすらりとした、口の達者な日本人の男の子と、彼女が親しげに話せば話す程、私の存在は何か浮いてきました。「ドーヴァー海峡を渡って、恋しい人のもとに飛んできた訳ですか」と彼女の前で言われ、思わずギョッとしました。

初夏の、テームズ川の岸辺の緑に腰かけて、そのあつくもさむくもない、やわらかいそよ風に髪をなびかせながら、ぼんやりと暮れかけた橋をながめていました。その静けさが、彼女と彼の前で、さざめき立っている私の心を、次第に重く沈ませていきました。

私はその翌日、彼女をレストランに夕食に招待しました。彼女の下宿に、私に電話してくれるようメッセージを入れたのですが、私の顔をみるとすぐ、「びっくりしたわ」と言いました。家の誰かに、何かあったのかと思ったそうです。二年程前に、彼女は父親を失くしていました。東京の音楽学校の寮に入っていた彼女が、その知らせを受けた時の気持を思い、自分の無神経さが恥ずかしくなりました。私は、家族の不幸というものに出合ったことがないのです。

「どちらにお座わりになりますか？　こちらですか、それともあちら？」彼女がレストラ

ンの一隅の、奥の席に座わると、ボーイは、そう言いながら、彼女の正面と、横を次々に手でさししめしながら私にききました。一瞬ためらってから、私は彼女の隣に座わりました。パリのレストランで、よく男女がその様に座わっていたのを思いながら……。

私が座わった途端、しかし彼女は言いました。「今晩は九時半までしかいられません。その後用事があるので」

その九時半に別れ、彼女を、バスの停留所にのこして帰った翌日、彼女に会うと、「あの後、バスがぜんぜん来なくてね……。でも隣に待っていた人がとても愉快な人で、十一時すぎまで、話し込んでいて……」と楽しそうに話しています。「九時半以降の、用事は一体どうなったのだろうか……」

翌日、私は、エリザベス・ホールのコンサートにでかけ、彼女を待っていましたが、行くかも知れないと言っていた彼女は、しかしついにあらわれませんでした。

その翌日のパリ祭の夜、彼女に何も言わず、私はパリに帰りました。帰って、しかしすぐにまた、電話器に向かい、彼女の、ロンドンの下宿の番号をまわしていました。その晩、エリザベス・ホールですてきなコンサートがあったと言い、「どうして来なかったのですか？」と彼女に言われ、ああ、今晩彼女は来たのかとひどく後悔し、とうとうその翌日、またロンドンに引き返しました。

「きのうの夕方、帰ったばかりじゃないですか」ロンドン空港の税関でそう言われた時「人に会う為です。会いたい人がいるのです」と言ってました。しかし……そのまま彼女に会いに行くことが出来ず、夕食にはいった、うす暗いレストランの片すみから、彼女に電話をしました。きのう程、はずんだ声ではありません。「明日、帰ります。明日、パリに帰ります」私は反射的にそう言っていました。

私はその夏、彼女がその前年と同じ様にイタリアのシエナである音楽の夏期講座に参加するものとばかり思っていました。彼女にもそうきいていたのです。その時期に合わせて、私のイタリアへの旅行のスケジュールをたてました。

フィレンツェに着くと、その美しい街を横目に、すぐにシエナに向かう汽車にのりこみました。二泊三日のフィレンツェでの滞在中、毎日私はシエナに通い、その音楽学校にでかけました。名簿を調べ、教室の中まで入っていきました。しかし……彼女の姿も名前もありません。

次に、フィレンツェのホテルを引き払って、シエナに移り、まだ来るかも知れないと、音楽学校に通じる、傾斜のかかった細い目抜き通りを一日中、歩きまわったり、あるいは、街の中央にある小さな闘牛場の様な広場で、もしかしたらここで会えるかも知れないと、そのカフェーに座わり込んで食事をとり、ぼんやりとあたりを見回していました。しかしとうとうローマに発つ日が来て、そこを去り、そしてまもなく私はその旅先で、床についてしまいました。後で知ったところによると、彼女は予定をかえて、その頃、スイスの山の中にいたのです。

夏のおわり、彼女のお母さんがやってきて、そして二人でヨーロッパを旅行した後、最

後にパリにくることになっていました。私は部屋のじゅうたんを洗い、壁にかける絵を買い、紅茶セットをそろえ、そしてホテルを予約して待っていました。最初の夜は、ブローニュの森のレストランと決めていましたが、「そのレストランのすぐ近くに、僕のアパートもありますから……」と言って、自分のアパートに来てもらいました。あの、新品のポットから紅茶をそそぎ、ピアノ曲をかけながら……。

レストランでの食事中、「一緒にシャルトルの大聖堂をみにいきましょうよ」とお母さんが言いました。隣の彼女は、うつむき加減にだまり込んでいます。「あまり出しゃばってもいけませんから、用事のある時だけおっしゃって下さい」思わずそう言って、そしてすぐにひどく後悔しました。

翌日、ヴェルサイユ宮殿に行き、案内役を頼んだフランス人の友達の家に招待されました。夕食後、その友達の家のピアノに向かい、多くの、お父さんの希望で、彼女はショパンの「別れの曲」を弾きました。

オペラ座や、コンサートに案内し、その最後の夜は、セーヌ川のバトー・ムッシュで夕食をしました。夜もふけ、その闇の中に、こつ然と、幻の様にうかびあがるノートル・ダムがみえてきた頃、お母さんは気をきかせて、二人だけにしてくれました。しかし、その時彼女と何を話したのか覚えていません。その帰り、歩いてシャンゼリゼを下り、闇に光のしぶきをふき上げるコンコルド広場の噴水の脇を通って、ホテルに送りました。アパートに帰り、ホッと息をついて、ベッドに横たわると、突然、訳のわからぬ悲しみがこみ上

げてきて、たまらなくなり、あのフランス人の友達のところに電話をしました。彼はもう眠っていると、そのお姉さんに言われました。

それからしばらく、コンコルド広場を通ることはさけていました。ある日、メトロを待っていると、突然、あの、彼女の弾いていた「別れの曲」が、心の中にわき上がり、やがて耳の中一杯に鳴りひびきはじめました……それはやがて、静かなほほえみになって私のくちびるに浮かび、そしてようやく、私はコンコルド広場を通ることが出来る様になりました。

その翌年、私は一度、彼女の関西にある日本の家を訪ねましたが、それから半年後「ケープタウンの雄大な自然の中に彼といます。私、結婚します」という手紙が届きました。

「今度の木曜日、うちに来て下さいよ。夕食、招待します！」

そのかわいらしい日本語で満面に笑みをたたえながら、彼女は言いました。父の関係会社のパリ支店の女性秘書で、同時に、私のいっていた同じ大学の、日本語科の卒業生です。はじめのうちは、ただ事務的に、不慣れな外国生活の私を助けてくれていた丈でしたが、次第に心が通うようになりました。彼女が日本に旅行した時、私の両親は、家にまねいたり、共に旅行したりして彼女を歓待しました。そして一年後、こう言って彼女は私を自分の家に招待してくれたのです。

私の住んでいたアパートからすぐ近くの、ヴィクトル・ユーゴー通りの、その赤いアパルトマンの扉が開くと、「ハ、ハ、ハ、来ましたね」と、ドアのところに立って彼女は大きく笑っています。いささか戸惑いながら、もってきたバラの花たばを彼女に渡しながら中に入りました。中国や日本のお皿が壁一面にかざられ、細くて、道路のように続く廊下には、日本の浮世絵がならんでいます。おじいさんは、中国大使をして、日本にもいったということです。

応接間には、パリの電話名簿程の分厚さの、古めかしい本があり、それには、十二世紀からの家系が記されているそうです。彼女の家が、由緒ある貴族であることを、その時はじめて知りました。

温厚なお父さん、明るくて開放的なお母さん、そしてかしこそうな妹さんと、共に食事をとりながら、不思議なほど、私の心は解放されていきました。

「アパートの部屋はドアがこわれてるんですって……強盗もパリにはいるんですよ」

「まだ来ません」

お母さんは大笑いしました。

この夜をさかいに、彼女は、会社からしばしば電話をしてきます。「デートしましょう！」そういって、小さな車で迎えにきてくれ、あちこちを一生懸命案内してくれました。私は彼女のいうデートとして日本語が、単に、フランス語でいう〝約束〟のことなのか、それとも、日本語の少し特別の意味のあるそれなのか、遂にわかりませんでした。「あるいはただ単に一人で淋しそうだと思い、誘ってくれるのだろうか……」古めかしいレストランで食事をした時、「貴族は食べ方まで違います」と言われ、ものがのどに通らなくなりました。

半年程、病気をしていた彼女が、久しぶりに家に招待してくれた夜、私はやや疲れていました。ブルターニュにもっているという古い大きなお城の話、そこにある、巨大なじゅうたんの話などきいているうちに、いつかみせてもらった、あの家系の本の分厚さが、心にのしかかってくる様な気がしはじめました。

「川端も、ハラキリしたのでしょ」という彼女の言葉にいささかおどろきながら、今まで随分日本文学の話をしてきたのにな……と何かがく然とした気持になりました。相変らずお母さんは陽気にふるまい、いろいろおかしい仕草をして、私を笑わせようとするのですが、私はただほほ笑んでいることが精一杯でした。

それから間もなく、彼女から電話があり、「これ、ホットニュースです。私、婚約しました！」と、晴れやかな声で言いました。

その四カ月後の六月、彼女が、お父さんの手にひかれて、教会に入ってきた時、その、あまりの美しさにぼう然としました。文字通り、透き通る様な白い肌に、真白な衣裳はこの世のものとは思われなかったのです。

その後、ブローニュの森のレストランの庭で開かれた、盛大な披露宴のおわりに、「それじゃ、さようなら」と言って近づくと、その言葉も耳に入らぬ様に「踊りましょ！」

と、手を差し出しました。「とんでもない」私はそう言って、別れをつげようとすると、いきなり顔を近づけて、頬に接吻しました。私にとって、これは生まれてはじめての女性からの接吻でした。その後、どの様にアパートに帰ったのか覚えていません。

彼女はその時やっとパリに来て四カ月程でした。日本人である私をみると、なつかしそうな顔をして近づいてきました。

はじめて彼女のアパートに食事によばれた後、私達は映画をみ、おそくまで夕食を共にしました。私の皿からエスカルゴをとって口にし、「あなたの ところに おかまあるの？じゃ、あたし御飯作りにいって上げるわ」と言います。私は自分の耳をうたがいました。そして突然世界が、かわってしまった様に感じました。雪のふりしきる街を帰ってきて、ベッドに横たわると、ふと、「わたしの耳は貝のから、海の響きが こだまする」というコクトーの詩が、何故か耳の中で、静かにくり返されていきました。そしてほとんど悲しい程静かなおちついた気持に沈みました。

それから、知り合いの日本人の家族のところに食事によばれた時、彼女も招待したり、オペラ座やコンサートにつれだっていき、またしばしば、私のところにやってきて、二人で買い出しにいってから、肉を焼いたり、すき焼を作ってくれたりした後、葡萄酒で乾杯し、一緒に食事をして、そしてメトロの最終まで、話しこんだり、音楽をきいたりしました。

食事がおわり、デザートのお菓子を食べていたある時、自分の紅茶をのんでしまった私が、「それもらってもいい？」と、彼女の、飲みさしの紅茶をさしていうと、「きたないと思わないの？」とききます。「だって君のじゃない。それとも君病気なの？」と言いながら、そのさめ切った紅茶がのどを通っていく時、まるで彼女を抱きしめた様な気持になりました。

「どうして、もっとはやくあなたに知り合わなかったのかしら」コンサートの帰りにカフェーにアイスクリームを食べに入った時、彼女はそう言いました。その彼女がある時、「部屋は別にしてね」と、他の、私の友達の大勢いる前で突然こう言いました。

その夏、私の参加することになっていた、インスブルックで開かれる国際比較文学会に、やはりソルボンヌのフランス文学科の大学院の学生である彼女を、同伴者として、誘い、その宿泊所である学生寮の部屋を、彼女の為にも予約していたのです。その時、私の友達はほとんどカップルできており、また、彼女のフランス語の教え子とかいう大学生の若い女の子もいました。

私はいきなりはねつけられた様にものが言えなくなりました。そのままアパートに帰り、天井をあおぎながら、しかし直に、ふるえる手で彼女に手紙を書きはじめました。しかし思い直し、彼女を紹介してくれた、フランス人の女性の友達に電話してから、ただ「ショックを受けた。お互い三十にならんとしているのだから、もう少し人の気持をわか

らなくては……」という文面に書き直して手紙を出しました。しかしその翌朝、「なによあの手紙！」とすさまじい剣幕の電話がかかってきました。しかしその日、彼女がスペインにたつことも考え、私はなにも言いませんでした。

それから一カ月程して、また忘れた様にカフェーで、アイスクリームをおごった翌日、電話でふと、彼女に貸したカレンダーを返してくれと言うと、しばらくだまってからいきなり「何よ、今頃になって……だいたいあなたは人の気持になんてこれっぽっちもわからない、世間知らずのお坊ちゃんなんだから、どうしようもないわ！　もうあなたなんかうんざり。今までだってどれ丈私がイヤな思いしてきたと思うの。私はこんなみすぼらしいアパートに住んでいるというのにあんなぜいたくなアパートに住んで……片はしから、オペラなど、コンサートなどの切符買ってきて、渡すんだから……」

「でもそれは君がいきたいと思ったから……」

「ほら、それよ！　何でも君が、どうのって、恩着せがましいったらありゃしない……。もうとにかくあなたのお金でなにかされるのはイヤなの！　だいたいあなたのお金じゃないでしょ！　なによ、親の金を湯水みたいに使ったりして……。なんの経済観念もないんだから……とにかく今までの分、みんな返すわよ、こんなに節約しようとしてるのに、本当に困るわ！　あなたばかり会ってるんでうんざりしてるの。フランスに来て、日本人に会うことないわ。おいしいもの食べられなくたって、あなたに会うよりましだわ！」

何も言えなくなっていると「何とか言ったらどうなの。わたしもう怒ってやしないわ

よ。笑って言ってるんだから……とにかく今晩は約束だから、いって上げるわ」

ただぼう然として時を過ごした後、ベルが鳴って戸を開くと、にっこり笑って彼女は入ってきました。しかしその夜は、九時すぎになった頃、帰っていきました。そしてそれが、彼女の、私のところにきた最後の夜となりました。まもなく彼女はフランス人のボーイ・フレンドを見つけて、私の前からすっかり姿を消しました。

ある日彼女に電話をして、フランス語を教えてくれる様に頼みました。レッスンの後、テレビをつけると、彼女の好きな俳優が出ている映画がはじまりました。「帰らなきゃ、帰らなきゃ……」と言いながら、ブラウン管に引きよせられていく彼女をみながら、私はインスタント食品を温めはじめました。出来上がって、彼女のところにもっていくと、「あら！」と言い、「帰らなきゃならないのに……」と言いながら、ゆげの立つお皿をみつめて、「しようがないわ」と座わり直しました。

こうして私は彼女と一緒に食事をしました。「お腹も一杯、心も一杯」テレビがおわると、そう言って彼女は帰っていきました。私も、心は一杯でした。お腹の方は、彼女の為の準備ばかり気にとられ、彼女が帰ると、急に空腹感がしてきました。

それから週に二回あるレッスンの度に、前もってビデオで、テレビから映画をとりました。「あんまり録音しないで下さい」彼女はある時そういいながら、やはりテレビの前に

座わっていました。明りの消えた暗い部屋の中に、今晩は一人ではない、彼女と一緒にいると思う丈で、心が満たされていく様に感じました。

もっとも彼女には、れっきとした婚約者があるので、それ以上のことは、無論はじめから考えていません。そうして、彼女がそばにいてくれる丈で充分だったのです。ある日、グレース王妃のことから、やや口論となり、しまいに彼女は、こんなことを言いました。

「あなたは霧の中にいる。お金を稼せいだ経験もないのに、人を批判する資格もない。○○は（彼女の婚約者）いつも日本の社会と戦って生きている。あなたが、死にたいなどと言うのをきくと本当にいらいらする！」

「あなた?!」、日本語の家庭教師をするという私の貼り紙に応募してきた一人の女子学生が、待ち合わせた大学の廊下で、私だと言うと、彼女はあ然とした表情でそう言いました。そして、彼女の言った時間に、部屋を掃除し、お菓子を買って待っていたのですが、彼女はついに二度とあらわれませんでした。その後、偶然大学で出くわした時、私をみとめると、よそをむいて一言「お金なくなったのよ」と言いました。

……その、私にそっぽを向いた彼女の顔が、やがて、街を、男に腕をいだかれて私のかたわらを歩いていく、多くの女性の顔になっていきます。その輝いた顔。幸福によいしれる顔。私に永遠に禁じられたその顔。……そして彼女

の、顔……。

「彼女をブローニュの森にさそおうか……」ふと私はそう思いました。今度の週末？……電話をまたしなければ……また、電話。電話か……ためらいながら、何度、私は今までにこの電話をしてきたことか……。女性に、女性達に、私の前を通りすぎていった女性達……。

私はひどい疲労感を感じました。と、その時ふいに、洗面台に向かって、手をあらっている、彼女の後姿がうかびました。「よかったら手を洗ったら……」思いついて、私は帰りがけに、彼女にそう言いました。

ドアは半開きになっています。ジーパンの足がすらりとのびたその姿で、小さな洗面所はいっぱいにみえます。彼女の大柄なことを、改めて思いました。「彼女は、気づいているのだろうか、私が後に立っていることを……」正面の三面鏡に、ときざみに写るその顔の動きに、気づいている様にも思われますし、まったく知らぬ様にも思われます。

私の斜めうしろには、常にカービン銃のはいっている折りたたみ式の衣裳ダンスがあります……本棚をながめていた時のあの後姿……その無頓着な背中……娼婦の、裸の白い背中……彼女達は、いつもそうして、私に背を向けて、ビデをつかいました。その真後に立って、私は、その背中に、うなじに、カービン銃の先でねらいをつけています……。

「まさか！」私は思わず頭をふり、この幻を払おうとしました。そんなことが出来るはずがない……そんなひどいこと……そして忘れようとしました。しかし、直に、「どうせダメだ、また同じことの繰り返しだ……」と、疲れた声がしてきます。

もしそうなら、もし本当にそうならば……一層今……はじめて彼女をみとめた時の、あの姿……豊かな胸、よく発達した四肢……そして、あの気品……私には永遠に触れられぬもの……もし、もしあれに手をかけることが出来れば、そして……その肌の下にかくされているあの豊饒なひろがりを、真近にその肌を目でまさぐることが出来れば、そして……その肌の下にかくされているあの豊饒なひろがりを、口にすることが出来れば……それはまさしくすべてだ、すべてをかけて果たすべき、至上の極地だ。

……彼女は本棚の前にいる。私は銃をとり出し、構えて……打つ、うつぶせに倒れかかる彼女……その姿が、ありありと浮かんできました。うしろ向き……その為には……机に向かって、本を読んでいる、本……川端の「雪国」……そのオランダ語訳……それを彼女に録音してもらう……そう彼女に頼めば……私はほとんど一瞬にして浮かんだこの映像の実現を、その時確信していました。

オランダ語訳のテキストは、パリで見つかるだろうか……ドイツに住んでいる知人に頼むことにしました。翌朝電話をすると、あまり心当りはないとのこと、ついでにドイツ語訳も頼み、オランダ語訳が難しければ、それで済まそうと思ったのです。二、三日待って下さいとのこと、それなら、何も川端でなくてもいい、何か、ドイツ語の詩集でも……ちょうど、私が前衛芸術運動を研究していると彼女に言ったし、彼女もその辺りの研究をしているのだから、いっそその時代の詩にしては……だれかが録音するのを頼んだということにしようか……ふとある日本人の先生の顔が浮かんできました。あの先生にしよう。あの先生なら、その様なことを気軽に頼みそうだ……「なに、試みだ、試みにすぎない。準

備する丈だ、どうせやれるはずがない、準備する丈なら、別に構わないだろう……」

私は三日後、モンパルナス近くの、ドイツ語専門の本屋に向かっていました。手には、彼女宛の絵葉書が入っています。佐伯祐三のパリの風景が描かれ、「この間は、僕のひどい日本料理を食べてくれてありがとう」という文句ではじまり、録音を依頼する文面がその後につづいていました。しかし、それをポストの口にはさんで、そして手を離すことは出来ません、もし離してしまえば、すべてが、本当にまわりはじめてしまう、取り返しがつかない……そう思いながら、それをにぎりしめて、そこまで歩いてきたのです。きくと、ちょうどドイツ表現主義の詩集があるとのこと、すぐにそれを買い求めた。表現主義独特の、あのもやもやとした内面の霧は、今にぴったりする様に感じます。

外に出ると、ふと、彼女のアパートにいく時に見た、あのサン・スュルピスの教会堂の尖塔の先が、通りのアパルトマンの屋根の向こうに、白く光っています。「そんなに近くにいたのか、彼女は……」それなら、今すぐいってみよう、そう心に決めて、本をコートの中にかくし（新品の本を、そこで買ってきたというのでは、話のつじつまが合わぬと感じたのです）彼女のアパートに向かいました。

前と同じ様に、狭い入口から、うす暗い廊下を通って、奥の階段を、二、三段のぼりかけましたが、引き返し、管理人室のガラス戸をノックしました。ふらふらと人の影がみえると、戸の中で小柄な老婆が、上目づかいに、ひどく疑い深そうに見上げていました。内心をみすかされた様に感じながら、それとも私の東洋的マスクの為かと思い直し、

「ルネ・ハルテヴェルトさんに会いたいのですが……」と言いました。

老婆は、私を見上げたまま、何も言いません。

「オランダ人の女の子です」ようやく戸を半ば開いて、顔をつき出しながら、「どんな子？」とき き返します。戸惑いながら、彼女のイメージを心で追って、「背の高い……」と言いかけると、「やせた子？」と言います。その言葉に、自分がこれからしようとしていることを思い、複雑な気持になりました。やせてはいない。つくところにはちゃんとついている……。

「その子なら、五階の左、一番奥にいるよ」という老婆の言葉に、一気にのぼっていきました。そしてのぼり切らぬうちに、高い、明るい、まさしく、あの、彼女の声があふれてきました。ドイツ語の様な響きにきこえますが、オランダ語でしょう。階段の一番上の段をふみこえた足はそこまで来て自然に止まってしまいました。

「ああ、これだからダメなんだ。せっかく女の子と知り合い、少しはいい印象も、もたれたに違いないのに、すぐにそのチャンスを、自らこわしてしまう」今、自分が何の為に来たのかも忘れ、知り合ったばかりの女の子のところに早々押しかけて、わざわざうるさがられようとしている自分を思って、こう心の中で言っていました。次第に息苦しくなってきます。

「階段を降りよう、このまま降りて、何もかもやめてしまおう……」その時、突然、彼女の声は止み、そして、ギーっと、ドアのきしる音がしました。私は飛び上がり、階段をかけ降りようとしましたが、思う様に足は動きません。このままでは見つかってしまう。こんなところでみつかっては……私は、ドアに通じる廊下の方へ数歩ふみ出していました。

その光のないつきあたりから、彼女の、すらりとした白い影があらわれました。「おや、来たの？」歩をゆるめずに、いつもの明るい笑顔で、少し首をかしげ、やわらかい、軽い響きでそう言いました。その調子が、私のそれまでの、ぎこちない、こおりついた様な心を一度にとかした様に感じながら、私も彼女の方に歩をすすめて「うん」と笑ってうなずきました。私の脇まできて一瞬立ち止まりドアのところに引き返して、ショルダー・バッグから鍵をとり出し、大きな音をたてて、鍵をあけています。「ううん、ここでいいよ」と言いかけましたが、その時はもうドアは半ば開いていました。

すると、そのすき間の向こうに見知らぬ女の子の顔が、こちらを見上げています。彼女は私を部屋の中央に通すと、自分はドアの入口に立ちました。私は一瞬ためらいました。入口の壁に面したベッドに腰かけているその女の子は、正直とても美人とは言えない顔立ちで、おとなしそうな、しかし気のせいか、どこか用心深そうな顔立ちをしていました。彼女の、オランダ人の友達なのでしょう。一緒に大旅行をするというのは、彼女のことでしょうか……内心、この娘がよく覚えていて、後で証言台に立ったらどうなるか、と思いました。いや、その前に、この娘が、警察にとって、有力な証言者になるに違いない、とも考えました。

「イセイ」と、いつもの、軽くはずむ様な調子で、彼女は私を紹介しました。私はその子

が手を差し出すと同時に手を差し出していました。

部屋は、ひと目見た限りでは、屋根裏部屋の様で、若い二人の女性のエネルギーの為でしょうか、むせかえる様な熱気に満ちています。彼女の、ほっそりとしたイメージと、どうしてもそれは結びつきませんし、あるいは、この、友達の発するものではないかと、勝手な解釈をしていました。

「お茶飲む？」と彼女はきいています。

「いやいやとんでもない」と反射的に答えました。

なるべく、この友人の女の子の視線の前にいたくはなかったのです。

「出かけるところなんでしょ？　邪魔したくないから」早口にそう言うと、彼女の顔は、心持くもった様に感じました。

それから、彼女を見上げながら、「一つお願いしたいことがあるんだけど、僕の日本の先生に、ドイツ語の、表現主義の詩を録音してほしいと頼まれたんだけど、僕はドイツ語知らないし、友達にもドイツ語の出来るのいないから、もしよければ君に頼みたいんだ」と一気に言いました。

彼女の顔から笑顔が消え去り、「私の、ドイツ語の発音あまりよくないけれど……」と言ってから、「それでもよければ……」と言い足しました。「私のところでするの、それともあなたのところ？」「出来れば、僕のところ、機械が重いから……」と言うと、すぐに「ええ、いいわ」と言い、ややにこやかな顔に戻りました。

私はそのまますぐに立ち去りました。通りに出ても、出かけるところだった彼女が、すぐにアパートから出てきて、私の後を追ってくる様に感じ、タクシーに飛びのりました。

「さいは投げられた」走り去っていく街の風景を目で受け流しながら、次第に強く、そう感じはじめました。大きな一歩をふみ出した、と思ったのです。「私のところで、だって？　それじゃあ、何も出来やしない。もし、彼女がそう言い張ったら万事休すだった。もしかしたら、彼女はうすうす感じていたのだろうか……いやいや、すぐに、僕のところに来ると言い直したあの表情からみて、何も知らないんだ」そんなことを、取りとめもなく考えていきながら「あるいはこれは、うまくいくかも知れない」と思われてきました。

その夕方、私はシャンゼリゼに出かけました。もしかしたら、これが最後になるかと思いながら。そして、ことによったら、私の命も……。

第四章

昨年の暮、私は、誰にも知らせず、家族にも黙って、一人日本から、パリ行の飛行機に乗り込みました。窓の外に広がる雲塊をみつめながら、その時も同じ様に、これが最後だ、死出への旅路だと思っていました。

秋のおわり、私は学業を一段落し、職をみつけねばならぬということで、本心はいやいやながら、パリを離れました。しかし、どうしても心にとらわれることがあったのです。学業生活を一旦打ち切らねばならぬ無念さや、パリという、西洋のど真中での青春に、終止符を打たねばならぬことなど、いろいろな理由を挙げていましたが、それは口に出して言えるもの——すなわち、体裁のいい口実に過ぎません。

パリの地に来て三、四カ月の頃私はよくその時住んでいたアパートの近くを、夜、しばしば彷徨したものです。そこには毎夜、女を乗せた車が、同じところを、くるくるまわっていました。時に首を出して、赤い唇が、闇の中に浮かび上がります。

その一台の、これはじっと止まっている車がありました。ためらいながら近寄ると、ブロンドがうっすらと浮かび、裸の太腿がその下に続いています。これは、私が長い間日本で夢見ていた、典型的な西洋人の女性でした。

ふらふらとドアに手をかけると、白い項が目の前にあらわれ、チューインガムの匂いがしました。顔はほとんどみる余裕がありません。女が何と言ったのかもわからず、既に私の片足は、その女の隣の助手席にかかっていました。太腿の下の豊かなふくらはぎの丸みが、夜の光の中に呼吸しています。小さな車体は、飛び上がる様に走りはじめました。そこよりさらに暗い闇を求めて、私達は消えていきました。……もう、どうなってもいい、日常世界からその瞬間、すべり落ちる様に感じながら、くらくらとする快感の中に、身も心も任せて走っていきました……。

九年前の夏のおわり、私は自分の部屋を出て、近くに住む西欧人の女性の部屋に向かっていました。彼女とは通りで会った丈です。ほっそりとした美しい女性の、その白いふくらはぎを見つめながら、彼女は何故か、祖母が最近まで住んでいた、私達の家の近くのアパートに住んでいるという気がしてならなかったのです。うろ覚えながら、西欧人の名前を、その郵便受けにかつて見出した様な気がしていたのです。その上、彼女が歩いてきた

方向に、そのアパートはありました。もう一度確めに行きました。確かにカタカナ書きの、外国人の名前があります。「彼女に違いない」私はそう信じて疑いませんでした。

その夏、私は、卒業論文を書いており、冷房装置の乏しいその部屋にいると、目まいがしそうでした。しかもしばしば、一人の西欧人の女性の影が、時に声を、時ににおいさえ伴いながら、私を脅かしていました。彼女は、語学学校のフランス人の先生で、二年前に三カ月程、習ったことがあり、七月のはじめから、彼女の夏期集中講座があったのですが、私がそれを申し込もうとした時は、既にクラスは満員でした。そのうらみが、後々まで尾をひいて私を苦しめていました。論文を書くのに疲れると、白紙にいたずら書きをはじめます――彼女が教室でかがみ込みながら、向かいの席の生徒のフランス語を直している、その折れ曲がった腰の真後に私はおり、そのまるい尻に見入っている。そして私の頭から、フランス語で「なんてうまそうな」という文字がたちのぼっているというものです――自分のそのいたずら書きを何度もみつめながら、いたたまれない気持になりました。

そんなある日、私は通りで、その西欧人の女性に会ったのです。自分の失なった喜びを、彼女で一度に取り返せないか、そしていっそ、長年の夢を彼女で達成出来ないかと思ったのです。そう思うと、もう勝手に私の幻想はまわりはじめていました……窓から忍び込む……彼女は、後を向いている……ベルトをもっていこう、そしてそのベルトで、後から首をしめよう……気を失なったら、すぐに……そうだ、ガムテープがいる……それで口をふさぎ、それからロープももっていって手足をしばろう、そして服を脱がし……股はど

うなっているのか、ちょっと見てから……お尻を、台所にあるはずの包丁で切って肉をえぐりとり、これをフライパンで調理しよう……いや、やっぱり殺さなきゃ無理かな……。

私は部屋にある扇風機の首をめがけて走りより、ベルトですばやくしめ上げる動きを、何度もくり返しました。近寄った時、顔をみられたらどうしよう、誰とすぐわかるではないか……ふと、私は、銀座で、仮面ばかりがそのショーウインドウにならんだ店を思い出し、そこに出かけ、グロテスクな面を一つ買いました。そして、家のあちこちからかき集めた、細なわやガムテープなどと共に、その面をかばんにつめました。それから私は机の前に座わり、紙を取り出して、ふたたびいたずら書きを始めました。

西洋人の若い女性が、ロースト・チキンよろしく皿にのり、その背中にささっている旗に、「我遂白人美女肉喰」と、でたらめに漢字を並べ、その絵の下に、「動物の肉を喰うのに、何故人間の肉を喰ってはいけないのだ。人間も動物ではないのか。それは所詮人間のエゴイズムに過ぎない。動物を虐殺する人間に、それを批難する資格などない」という様な文句を並べていました。

この〝考え〟は、ずっと以前から私の内にありました。

「どうして人の肉を喰べてはいけないの？　先生」と、無邪気に、女の先生にきいている小学校一年生の自分の姿がうかんできます。

「だって、○○君が急にいなくなっちゃった。きのうの晩御飯のおかずに喰べちゃった。ふとってたからおいしかったなんてなったら困るでしょう？」

とその時先生は、ユーモアをまじえて笑いながら、やさしい口調でそう言いました。しかしその時、私は心の中で、「○○君より、△△君の方がいいな。だって△△君は、運動もよく出来るし、かわいらしいし、とってもおいしそうじゃないか」と思っていました。運動着に着替える時、パンツになった△△君の、ももがぷるぷるふるえていた……あれを喰べたいな、心からそう思っていました。その時私が一番おいしそうだと思ったのはもも肉でした。時々自分の裸のももをさすったり、もんだりしながら、どんな味がするのだろうと考えました。そしていつか、両親に喰べられるに違いないと思ったのです。

三つか四つの頃、弟と共に釜に入れられ、茹られている夢をみました。額に汗をうかべて目を覚ますと、スタンドの薄暗い光が天井に丸く浮いていました。

それ以来、両親に叱られたり、つらいことがあると、わざとそうしているのではないかと思う様なことがありました。苦しめば苦しむ程、肉が旨くなる為に……。母方のおじが来て、時々弟と芝居をさせられました。その時はいつも、私達は、〃人喰い鬼〃のおじにむさぼり喰われたものです。「やっぱりそうなんだ」と心の中で思いました。

その頃は、ももの他の部分はさして興味もありませんでした。おしりは、なんだか脂肪くさくて、うんこの出るところだし、きたならしいと思っていたのです。

それが、四年生ぐらいの時だったか……担当の男の先生が、科学の時間に伝染病の話をして、「もし××ちゃんが病気にかかって、人喰い人種にとっつかまって、××ちゃんのお尻の肉を喰べたとする。するとかわいそうに、人喰い人種も伝染病にかかってしまうのです」と語って、皆を大いに笑わせました。その時、彼女の、丸い白いお尻が一杯に浮かんできました。××ちゃんは真赤になって、しばらく口をとがらせて怒っていました。彼女は、バーのママさんとかの子で、色が白く、目のパッチリした、かわいらしい女の子でした。

それ以来、その対象は女の子に、そのお尻にかわったのです。五年生の三学期に、私は公立小学校にかわりました。同じクラスに、色の白い女の子と、やや浅黒い女の子がいて、その二人が、一番かわいらしく思えました。色の白い子は、竈に入れても、なかなか焼けないだろうな、色の黒い子ははやく出来上がって便利だな、色の白い子は、おもちの味、色の黒い子は、芳しいパンの味、などと空想しました。

……私の部屋には、相当な量の、世界児童文学全集が二種類もありました。小さい頃から、あちらこちらと拾い読みしていましたが、やはり私の目はすぐに人喰い鬼とか、人の喰べられる話にひかれていました。

「どうしておばあさんのおめめはそんなに大きいの？」

「おまえをよくみる為さ」

「どうしておばあさんのおててはそんなに大きいの」

「おまえを抱く為さ」

「どうしておばあさんのお口はそんなに大きいの？」

「おまえを喰べる為にさ！」

という、あの、おおかみと赤頭巾ちゃんのやりとりを、心の中でくり返しながら、まるで自分が、そのおおかみになっておばあさんに変装し、いや、おおかみの様なおばあさんでもいい、そのすさまじい顔の老婆になって、かわいい小さな、いや、うら若いきれいな娘の前で、そのセリフをくり返してよだれを垂らしている様に感じていました。

　また、よく知っていたはずのペローの「眠りの森の美女」に続編があったことを、その頃知りました。めでたく結ばれた王子様のお母さんが実は人喰い女で、王子様のいない間に、オーロラ姫の小さな男の子と女の子を喰べたくなり、料理長に命じます。しかし、彼は機転をきかせ、子鹿を料理して、彼女に喰べさせます。

　その内、彼女は、よいソースで、オーロラ姫自身も喰べたくなって、これもコック長に命じます。オーロラ姫は、ねむっていた百年はのぞいても、既に二十なので、その皮膚もかたくなっており、これではごまかせないと彼はあきらめ、彼女に覚悟する様に言い渡します。……やがて、テーブルの上にのった豪華な肉料理を、義母はさも〝うまそうに〟喰べはじめます……実は、その白い首を差し出した姫をみて、コック長は、とても殺せないとあきらめ、雌鹿を料理して出したのです。

　しかし、また人の肉を求めて、義母が森をさまよっていた時、生きたオーロラ姫とその二人の子供の声をきいて怒り狂い、三人とも、蛇に喰わせようとしますが、その時王子が帰ってきて、この女王の方が、蛇の餌食になるというものです。ソースをかけて、オーロラ姫の肉だと思い込み、皿の肉塊にむさぼりつく描写は、ほとんど暗記してしまう程くり返して読みました。オーロラ姫とか、肉塊とか、ソースとか、雌鹿とかいう言葉が、頭の中をくるくるまわりました。二十を越すと、肉はかたくなるのだろうか……若い女性の肉の味は、雌鹿の肉に似ているのだろうかなどと感じながら……。

　中学校に入り、社会科の時間に、クノッソスの神殿の話になり「そこには、牛頭人身の化物が住んでいて、毎年ギリシアから、若い女の人を七人つれてきて、その化物に喰べさせていたのです」と先生が話すと、わっと、男生徒から笑い声が起こりました。何故か先生まで赤くなっています。もしかしたら、若い女性を喰べたいと思っているのは、自分だけではないのではないかと思いはじめました。

　私は小さな分厚いノートに、いく編かの短編の様なものを書きはじめました。「悪夢」と題し、ある親しい女性の帰った後、彼女がそのスカーフを置き忘れたことに気づきます。明日返そうと思いながら、それをみている内に、彼はねむり込んでしまいます。……

「おまえを、真実の世界に案内しよう」という声に目をあけると、ハート型の赤い大きな門があり、中に踏み込むと、霧で一杯におおわれています。しばらく何も見えぬまま、歩みつづけると、やがて前方に、うすら明りがぼんやりと見えます。

　近寄っていくと……それは、若い女性の裸の身体が発する光で、何人もの女性が、柵の中に閉じこめられていることを見出します。しかも、よくみると、皆、彼の女友達の顔です。やがて、背後に足音がすると、それは柵の前で止まり、すさまじい音をたてて柵扉を開きます。そして「きょうは誰が喰われる番だ」と言いながら、一人一人の女性の身体を

撫でまわした後、一人の女性を選ぶと、泣き声も立てられないでいる彼女をつかんで、どこかに消えていきます。

あわててその方を追っていくと、吐き気のする様な、しかし同時にひどくうまそうなにおいのする部屋の前に来ます。思い切ってその扉を開くと……そこは、その若い女性を料理する台所でした……「なにをするんだ！」と叫ぶと、その化物はこちらに向き直ります、「おれはおまえだよ」うちのめされた様になって目を覚ました彼は、もはやそのスカーフを彼女に返すことも出来なくなったと感じます……。

また「鮫と人魚」と題したものもありました。それは一匹の鮫が、うら若い人魚を襲おうとしますが、透き通った、その無邪気な美しいひとみでながめられると何も出来なくなり、そのまわりを、ただくるくるまわっているというものです。このノートのはじめのページには、「これから自分の心の奥底に入っていこうと思う」と書かれ、そして無論、誰にもみせたことはありませんでした。

他のノートには、漫画のようなものを描いていました。ローマ帝国を思わせる様な時代、極端な飢餓状態がきた時、人々は一つの決断に迫まられます。……コロシアムの中央に、素裸の若い男と女が引き出され、二人とも鎖につながれ、その裸の尻を、ギロチン台の様な穴からつき出しています。やがて一匹の飢えたライオンが放たれます。客席では、気位の高そうな女が、隣の男に、「あの筋肉りゅうりゅうとした身体だって、ちょっとしたもんですわ」とささやいています。ライオンは、はじめ男の尻の方に近づき、それをなめようとしますが、顔をしかめてすぐに離れます。次に、女の丸いやわらかそうな尻をひとなめすると、たちまちそれに喰いつきます。すぐに台座ははずされ、放たれた鎖から、女は待っているライオンの上に、投げ与えられます。それと同時に客席では、悲鳴を一つあげたまま、あの高まんそうな女が、隣の男に組みしかれます。……決断はなされたのです。男と女とどちらが喰われるべきかという……。

高校一年の頃、ある日私は、家に誰かが週刊誌を置いていったのをみつけました。家には、週刊誌などなかったのです。読んではならないものだと、無言のうちに感じていました。

私は襖をしっかりとしめ、母が当分部屋には来ないと確信した後、ふるえる手でそのページをくりはじめました。若い女性の、素裸のグラビアなどの後に、映画広告の小さなコラムがあり、その中に「鮫」という文字があります。何とはなく魅かれて読みすすむうちに、目まいを感じました。海辺に住む若い男が、村を失い、母を殺され、応仁の乱で荒れ果てた京の街にやって来ます。そこには、食べ物も山程あり、別天地だと思っていたのに、累々と横たわる屍しかありません。餓死寸前になりながらさまよう内、若い女の死体からあらわれる白い太腿をみて抗しきれず、それにむさぼりつきます。それをみていた悪党と共に、やがて裕福な貴族の館を襲い、その美しい婦女をとってきては、むさぼり喰います。

ある日、尼寺に、それはうまそうな一人の美しい尼を見出し、すぐにつかまえて喰いつ

こうとしますが、その美しいひとみにみいられ、彼女が泣き声すら上げないのをみて、かつて母にした様に、浜辺を、彼女を背負って、ただ走りつづけます……。

小さな写真には、おそらく若い尼僧の尻でしょう、丸い白いものに、男が口をあけて近づいていくところがありました。まるで、自分の欲求を、そのまま映画にされた様に思い、到底忘れ得ないものになりました。もちろんその映画は、十八歳未満でみられず、文字通り、私の幻の映画になりました。

ある時私は誰もいない時に、受話器をとって、電話帳をくりながら、精神科医の名をさがしていました。そして、適当な名をみつけると、おそるおそるその番号に、ダイヤルをまわしました。受付の女性が出てきた時、「先生にお話したいことがあります」と、やっとそれだけ言うと、相手は「どんな御用件ですか？」と何度か繰り返しています。「病気のことでおききしたいのですが……」と言いかけると、「少々お待ち下さい」としばらく待たされました。動悸が激しくなり、顔があつくなって、何と説明したらよいものかと、心の中でそればかり繰り返していると、やがて受話器のむこうで、「電話での診察はなさらないとのことです」と一言言って、電話は切れました。すぐに受話器をおろし、もう二度とこんなことはするまいと心に決めました。「どうせ、この自分の、妙な気持など、他人（ひと）にわかるはずはない」

弟は、学校の寮に入っていて、週末には、家に帰ってきました。その土曜日の夜、同じ部屋で、弟と二人、闇をみつめながら、いよいよねむ気で何も話せなくなるまで、語り合うのが、何よりの楽しみになりました。そのある日、女の子の話をしようか、と二人とも慣れぬ話題に、のどをつまらせながら、おどおどと話しはじめ、やがて私は、この時しかないという気持になって、

「あ、あのお、ぼくね、女の子をみると……」とのどがからからになってくるのをおぼえつつ「た、喰べたくなるんだ」

「はは、かわいいね」弟は無邪気に少し笑い声をたてました。一度に、目の前の室中の闇が、ガラスの様にキラキラと木葉微塵になった様に感じ、そしてそれ以来、決して人には言うまいと決めたのです。

ある時テレビで映画をみていると、若い白人の女性が、〝土人〟にかこまれて、髪を引っぱられたり、つねられたりしている場面に出くわしました。顔をしかめているその女性をみているうちに、何か彼女が、〝土人〟に捧げられた聖なる生贄の様にみえてきました。それは、白人の、有色人種に対する優越感の表現であると同時に、それへの潜在的恐怖心の様にも思われます。

この頃、私は黄禍という言葉を知り、あたかも私自身が白人になった様に、この〝不気味〟な東洋人が白人の世界に侵入し、白人の女を犯し、むさぼり喰う、という情景が心をかすめ、次には、その黄色人種に帰って、白人女を片端からむさぼり喰う快感に身をゆだねている自分を見出しました……馬上の白人を切り殺した幕末の生麦事件——その時女は切らなかったのか、と思いました。

大学の三年の夏休み、私は友人によばれて、彼の自宅に一週間程泊まりました。その折、アメリカ人の若い女性が泊まりにきていました。

私はすぐに彼女と打ちとけて話す様になりました。海岸に行き、彼女と話していると、閉ざされた自分の心が、解放されていく様に感じました。皆で泳ぎました。彼女の肉付きのよいビキニ姿の、その股の下から、金色の陰毛が風にゆらぐのを目にした時、うっとりとした気持になりました。海にもぐって彼女のその股の下をくぐりぬけた時は、鮫の様に、その内股の肉を喰いちぎれないかと思いました。

夜、彼女とは正反対の部屋にねむっていました。夏ですから、網戸は開け放しになっています。庭に出て、彼女の部屋に忍び込もう、そして頭を一撃してから、あの大きなお尻に喰いつこう……そんな幻想がありありと浮かび、今にも立ち上がりかけようとしました。しかし……その家は、私の一番大切な友人の家でした。

やがて私の家族もやってきました。最後の夜、私達はすき焼をしました。台所をのぞきながら、「肉はどこにあるの？」ときいています。ふとったその油ぎった体が素裸にされ、大皿に盛られテーブルにのっている様がうかんできました。あれを皆で喰ったら、さぞうまいだろうなと思いました。

フランス語の語学学校に、めがねをかけ、背が高く、長い金髪の女の先生がいました。階段から降りてくると、その巨大な尻が、入口をふさいでいます。私の肩口に触れたそれはやや固く感じましたが、あの中には、どんな味の肉がつまっているのだろうと想像しました。彼女は時々ひどく意地悪になりました。意地のわるい肉を喰うと腹をこわすかも知れない、そう思いました。しかしその肉はこくがあって、独特のうまみがある様に思いました。

やがて彼女の担当するクラスをとった時、はやい目に教室に入り、教壇の一番近くに、椅子をもっていきました。そこから彼女の乳あての中の、二つのやわらかそうなふくらみをのぞき込みました。

どうしてこうも、西欧人の女にあこがれるのかと思いながら、一つの映画を空想しはじめました。私の様な、ひ弱い東洋人が、舞踏会の真中に座わっている。彼のまわりには、白い肌の西洋の女が、おどり舞っている。やがてその中にひときわ美しい金髪の女性があらわれ、すっかり彼女に魅きつけられた彼は、二言三言話しかけられると、文字通り有頂天になります。やがて彼女に何とか近づこうとしますが、彼女は軽くうけ流すばかりです。しかし、彼女が遠のこうとすればする程、彼はもえ上がり、そして最終場面、ブルターニュの様な荒々しい浜辺を、彼は彼女を追いかけている。とりすがる度に、彼女の服ははがされていき、そして遂に彼女に追いつき、飛びかかり、激しくもみ合う内に、彼女の首を絞めてしまう……そして……彼女の身体に喰らいつく……遂に希みの達せられた思いに全身浸りながら、その肉を喰いつづける……というものです。

それは、日本人の、西洋に対するあくなきあこがれ、という意味であり、それにからませて、自分の内の食人衝動を描き出すことにありました。そしていつか必ず映画化しよう

と心に決めていました。

ある日電車にのると、褐色の足をむき出しにした若い女性に出くわしました。そのふくらはぎに、夕日の赤い光がもえ、毛穴がうきあがってみえました。たまらなくなり、わざとものをおとしたふりをしてしゃがみ込み、そこに喰いつこうとしました。しかし目の前には思いの他に固そうな皮が広がって、かみつくことをためらいました。

帰ってベッドに横たわり、こんなことを考えはじめました。……街を歩いている、美しくおいしそうな若い女を片端からかっさらってきて、毎夜酒池肉林の宴を開く、はじめの晩はセックスし、その翌晩は、料理されたその肉塊に喰らいつく、というものです。

つばきののどにひっかかるのを感じながら、死ぬまでには必ず若い女の肉を喰ってやろう、そして死の病いを宣告されてベッドからぬけ出し、美女を求めて彷徨する姿がうかんできました……イヤ、あまり年をとると、喰う気が失くなるかも知れないし、喰っても、味覚が鈍っているだろう……やはり、三十すぎまでには、必ず喰ってやろうと決心していました。そして本当に、その頃喰える様な気がしてならなかったのです。

明りを消し、しかしピジャマには着替えず、これと決めていたボロシャツとズボンをつけて、私はベッドに横たわり、夜がふけていくのを待っています。彼女はもう寝たろうか……その白い寝姿が浮かんできます。外では、しきりに虫の声がします。闇の中を、彼女のアパートに向かい、その部屋にしのび込む自分の姿がありありと目に浮かびます……やがて、私はベッドからおり、床のきしみをおそれながら、廊下に出ます。それから、玄関におり、鍵に手をかけます……しかし……周囲の空気が石にでもなった様に、それ以上、びくとも身動き出来ません。荒々しい自分の息づかいばかりがきこえてきます。全身に疲労を感じて、そのまま部屋に引き返し、ピジャマに着替えると、ベッドに倒れかかり、その日常生活のぬくもりの中に遠くから引き返してきた様に思いながら、もうやめだ、もうやめだ、と繰り返します。

ふとラジオでオリンピックの実況中継があるのに気づいて、スイッチをひねりました。その中で、日本選手が金メダルをとりました。涙がとまりませんでした。ひどい嵐を乗り越えて、体が限りなく広がっていく様に感じていました。「もうやめよう、決してやるまい」そしてぐっすりとねむり込みます……しかし……翌晩も、やはりピジャマに着替えることは出来ません。虫の声は、あおる様に、耳の底にビンビンとひびいてきます。頭の血が逆流していく様に感じ、今晩は、今晩こそは千載一遇の好機だぞ……と重い身体を起こし、玄関に向かいます。しかし……やはりその扉を開くことは出来ません。次第に夜の来るのがおそろしくなってきました。

そしてある夜、私はその扉の鍵を開くことが出来ました。外に出ると、ひんやりとした秋口の風を、ほおにうけ、ガランとした、すっかり様子のかわった街を、まっすぐに彼女のアパートに向かいます。いつもの、ビールの自動販売機の横を通りました。その、光の灯ったところに、そのビールのテレビ・コマーシャルに出ていた、若いカナダ人の女の子の写真がありました。彼女は、数カ月前、母国のアパートで、睡眠薬をあおって自殺しま

した。その若々しい顔をみながら、今頃、豊かなその肉体は墓の下で、うじ虫のえさになっているのだろうか……もったいない、とその時心からそう思いました。

アパートの表の扉は、あけ開しになっています。何か幸先がよい様に感じました。私はすぐに、奥にまわり込みました。しかし……雨戸は閉まっていました。これをこじ開ける方法はないだろうかと思いながら、今度は扉の前に立ち、もってきた、祖母の部屋のドアの鍵であけようとしました。おそるおそる鍵穴にそれを入れ、まわそうとすると、ビビーンと、響く様なすさまじい音がし、中でわずかにもの音がした様な気がして、ハッと飛びのき、今まで張りつめながら、平衡を保っていた空気が、木葉微塵に割れた様に感じて、一目散にそこを立ち去りました。

「もうやめよう、もう絶対にやめよう」心にそう叫びながら、家の玄関に飛び込みました。そして扉を閉め、はずむ息を殺しながら、耳を澄ましました。今にもパトカーの音がきこえてくる様に感じました。しかし、外の闇には以前の通り、虫はかわりなく鳴きつづけています。部屋に入り、頭からふとんをかぶって寝込みました。

……私は次第に、身体が衰弱していく様に感じました。弟と腕相撲をしようとすると、「それでも力入れてるの？」と言われます。夕方のラジオのフランス語の講義をきいた後、ベッドの中で少し、大学院の試験の為の準備に、英文学史の本を読みはじめました。しかしふと、頭の中が真空になった様に感じると、次の瞬間私は立ち上がっていました。その日の夕食はカレーの様でした。そのにおいが家中に漂っています。もしかしたら、

もう二度と家で食事することは出来ないかも知れない、そう思いながら、トイレに行った後、茶室でお茶のけいこをしている母をみました。ふと声をかけようとしました。母は何も気づきません。そのままその前を通りぬけ、チェロをひいている弟の部屋の前を通り、茶の間をぬけて、自分の部屋にひき返して、カバンをとり、その低い窓の敷居をまたぎました。飼犬のコロが、小屋から出てきて、おどろいた様に私をみつめています。

そのまま庭から玄関口にまわり、門を出て、通りに出ました。夕飯前の、まだ日の高い時で、赤みを帯びた道には、買物姿の婦人が時々通っています。わざと裏道をとおって、私はその方に向かいました。小さな子供連れの、女性の脇をすりぬけてもだれも、私がこれからしようとすることに気づきません。自分が、まったく外界から切り離されたところを歩いていると感じました。

彼女のアパートの前は静まりかえっています。門にふみ込んで、裏にまわろうとしました。その角にある部屋から、陽気な女の歌声がきこえてきます。もしこれが彼女の部屋なら、もっと簡単なのに……そんな、とりとめのない考えが浮かんできます。そのアパートの窓の敷居は低く、私でもすぐにまたぐことが出来そうでした。

私はそのまま裏にまわりました。背後から、話し声がきこえてきます。塀越しに、すぐ隣の家の、やや高い窓から、夕餉のにおいと共に漂ってくる、二人の、やはり女の声です。めざす窓は簾がおりてあけ放しになっていました。

窓に近寄るには、小さな垣を乗り越えねばなりません。またいで、中をのぞき込みまし

たが、何も見えません。闇の中に、少し甘みのあるコーヒーの様なにおいがしました。その内、白い影が、横に長く伸びてきました。そして次の瞬間、息をのみました。ベッドに裸の人間がうつ伏せに横たわっています。毛布にかくれた頭以外は、白い肌が薄明りにさらされて、びくとも動きません。長い大きな足をみて、ふと男ではないかと思いました。「まさか……」私は予定通りシャツを着、仮面をつけましたが、息苦しいのでそのままカバンにつっこみ、靴を脱ぎ、片足を鴨居にかけ、息をこらして部屋に入りこみました。

窓からベッドまでのわずかな距離の間に、なにか細々としたものが置いてある様な気がしました。トルコ風のコーヒー入れなど……しかし、目の中にちかちかと光の玉が残って、すべてがボーッとかすみ、はっきり見分けがつきません。手前にある、隠れた頭の真上まできて、一瞬たじろぎました。どうしようかと思ったのです。予定では、彼女は、私に後を向けて立っているはずでした。今の状況は、それよりはるかに私にとって有利であるにもかかわらず、何故かかえってためらっていました。まだ男では……という懸念があった為でしょうか……。

近寄ると、先程の甘いかおりがさらに強くなった様に感じました。あまりに静かに寝込んでいるのが、不思議な気がしてきました。私は傘を持った手をゆっくりとかかげて、少しその頭の方にかがみ込もうとしました。その時、私の右膝が、がくりと前に落ちた様に感じました。その途端、目の前の白いものが突然はね上がり、私が起き直ろうとした瞬

間、形容しがたい奇声を上げました。頭がしびれた様になり、後ずさりしようとしても、足がもつれて動きません。金髪の頭が、私の前で激しく揺れ、右手がつかまれた様に感じました。

私はそれを押し返す様に、何度か腕をふりおろしました。足首に何かがあたり、次に熱い液体の感触が走りました。私は重心を失なって、後に倒れかかりました。声は、さらに激しく、押し返す波の様にくり返され、そのまま、窓際までくると、鴨居に片足をかけ、次に両足をかけて、ころげ落ちる様に地面につくと、はきすてられた靴を踏みつけて、もと来た方向に走りかけました。

既に二、三人の影がそこに立っていました。私は逆方向に走りぬけ、庭に通じる垣根を飛び越えて、門の方向にまわりこもうとしました。何事かと叫ぶ様な人の声がその方角から響いてきます。ためらって、門の影にかくれました。それからふたたび入口の方を向いて、一気に飛び出しました。

門から少し離れたところに、買物籠を下げた一人の婦人が、立ちすくんだ様に、私の顔を見上げています。それをにらみ返す様に、私はその反対方向に、早足にかけぬけようとしました。そこには、新聞配達の男が、自転車からおりて、こちらの方を見ていました。

「何があったんだ？」

「さあ、わかりません。何だか警察を呼んでいる様です」

私はそう答えて、さらに早足でその横を通りぬけ、真直ぐ家の方に向けて歩き出しまし

た。

「はだしじゃないか、やっぱりおかしい。いっしょに来い」

新聞配達の男のそういう声に、私は家の庭が目に入ってきたところで立ち止まり、引き返しました。

私はその時、一週間留置されました。示談になったのです。「家宅侵入、強姦未遂」といわれ、相手方は、ほっそりと美しい、三十五歳の、ドイツ女性でした。

第五章

秋風が立ち、木の葉のいそがしく舞う季節でした。街頭に散っていくその葉をみながら、自分も果てしなく、落ちていく様な気がしました。

冷たい透き通った空をみながら、遠い日本の空を思いました。やがて、あの白い小さなワゴン車が目に入ります。駆け寄っていくと、自然にドアが開かれます。「久しぶりだね」そういう私の声に、上目づかいに彼女はながめると、すぐ車は走り出しました。

「もしかして、僕の家ではダメ？　たくさん払うから……」

「いくら？」

「千フラン」

車は止まりました。それは、いつもの五倍の値段でした。彼女は、私を見上げています。そして、私の目の中をさぐる様に見回しはじめました。私は、目をそらすまいと、見返しました。「いや、こわい」、恐怖の色がはっきりと目に浮かんでいました。「こわいって、なにが……？」もう一度、私の目をのぞき込むと、「ノン」と繰り返しました。

私はその夜、ここに出かける前に、電気のコードを買ってきてその先を切り、水を満たしたタライを用意し、その中に放り込みました。シャッ！と、一瞬閃光を放ちました。そこで別のコードを、同じ様に先を切り、コンセントのすぐ下におきっぱなしにしておきました。次に、風呂桶に湯をためました。彼女にそれをすすめ、その間にコンセントにコードを差し込み、風呂場にまわって、それを浴槽に投げ込むつもりでした。

……私達は結局、彼女の知っているホテルに向かいました。小さな階段を上がって部屋に入ると、すぐに彼女は値段を言いました。払うと、バッグをベッドに投げ捨て、ブラウスを頭から脱ぎ去りました。はじめて、彼女の全身を、光のもとでみた様に思いました。それまで暗い木蔭に車を止めて、私に後を向けると、さっとスカートをまくり上げます。スリップはつけていません。すべて闇の中でおわります。染めてあるのでしょう、生え際が、暗褐色のブロンドの髪に、少し日に焼けた、すっきりとした顔立ちで思いの外に大柄でした。

体は、思ったよりやや年を食っている様に思いましたが、四肢はすらりと伸びて、やや

ヤセ気味の、しかし胸や太腿は、充分な丸みをおびていました。ビデで洗うと、そのままベッドに身を投げました。大きな褐色の全身が、目の前に横たわり、一瞬どうしようかと思いました。首のつけ根から、胸を抱擁していき、へその下の茂みをぬけて、太腿のつけ根の、少しうきでた骨盤から、豊かな肉塊にきた時、金色のうぶ毛の光るその褐色の肌が、とりの足の様に思われ、思わずかぶりつきました。顎ががくがく震えます。噛み切りたいのを必死でおさえながら、やがて恍惚となっていきました……。

その翌年の春のおわり、日本から家族がきて、そして帰った日の夜、むなしい寂しさから、近くのヴィクトル・ユーゴー広場までふらふらと歩いていきました。

中央の噴水の青白い光に、ぼおーっと浮かぶ女の顔があちらこちらに浮いています。その一つに近寄っていくと、濃い化粧をした仮面の様な顔があらわれます。目をそらし、そ知らぬふりでまた別の影に近づきます。若々しい髪の陰から、やはりどす暗い化粧をした面が、ふいにこちらに向き直ります。

それを何度か繰り返した後、私は一人の金髪（おそらく着色したであろう）に声をかけました。まさかと思いながら、試しにアパートに来てくれるかときくと、思いの外簡単に承知しました。思わず身震いしました。のどの奥がかわいてきます。とうとうその時が来たと思ったのです。彼女に寄りそいながら、時々、そのすんなりした姿勢を伺い、ほとんど胸がむかついてきました。

アパートに着き、鍵をあけ、彼女を招き入れました。強い香水のにおいと、それからお

そらく腋臭であろうにおいとが鼻をおおいました。部屋に入り、向き直ると、目のふちが黒く色どられ、歯がどこか欠けている様で、光がうしろから照らしている為もあり、何やら気味悪く見えました。話すと、舌がよくまわらぬのか、少し白痴じみています。それでも服を脱ぎ去ると、若い娘のなめらかな肌があらわれました。

彼女が浴室に消えると、すぐ、台所の抽出しから、料理用のナイフを取り出し、忍び足で、浴室に通じる短かい廊下から、彼女に近づいていきました。もう一度ナイフの柄を握りしめます。一体自分は何をしているのだろう……ふとそう思うと、途端に、ヤセた東洋人の小男が、ナイフをかざして、裸の大きな西洋人の若い女性の後に立っている映像が、くっきりと頭に浮かんできました。まるで、怪奇映画の一場面の様に思われてきます。グロテスクな自分を思いました。

水の勢いよく流れる音がつづいています。おそるおそる中をのぞくと、光をうけた白い背が、目にとびこんできました。まるで私を待っている様にすら思われます。ナイフを、胸もとの高さまでかざしました。しかし……しかしどうしても、それ以上は上がりません。一突きして、一体すぐに彼女が倒れるものだろうか？ ギャッと飛び上がって、逆にはね飛ばされるのがおちではなかろうか……。一体どうしてよいのかわからなくなってきました。あれ程夢にみたものが目の前にあるにもかかわらず……。次第に息苦しくなってきます……。

その内、水の音が急にやみ、床のきしる音がしました。ぎくりとして台所にとって返し、ナイフを抽出しにしまいました。ベッドに戻ってきた彼女は毛布を勢いよくはね上げて、その中にもぐり込み、頭まで隠して、くっくっと笑っています。次に頭を出すと、枕元に置いてあった動物のぬいぐるみをみて、「これ頂だい」と言い出しました。

私も体を洗い、彼女の横にもぐり込みます。裸の女性とそうやって、自分のベッドで並んで横になるのは、無論はじめてでした。自分以外の体温が、そこにしみ込んでいくのが、何故か不思議な気がしました。腋臭がまた鼻をつきます。すべすべした肌によりそいながら、丸い乳房を目にした時は、やはり噛みつきたくなり、軽く口にふくむと、「いやー！」と拒絶反応を示しました。それでも遠慮しながら噛んでいって、股ぐらに達すると、「絶対ダメ！」と言いました。そこで、その両足の太腿の肉を、かなり強く噛みました。「うしろ向いて」というと、これも「絶対ダメ！」と言います。それでも事をおえ、ふたたび浴室にいく彼女の背中を見送りながら、何とはなしの満足感と、いつも、ことの後におそってくるバカバカしさとが、入りまじって胸に浮かんできます。もはや、ナイフを抽出しからふたたび取り出して、その後を追う気持は失せていました。

それから、度々、その娘を部屋に招くことになります。そしてその度に、「これが最後だ。きょうこそは……」と思うのです。しかし、抽出しの中でナイフの柄をにぎりしめるのがやっとでした。ある時、その白い背中をみながら、ふと、飛び道具があれば……と思いました。

また、ある晩は、たまたま街にでていた〝人喰い映画〟の看板をたよりに、それをみた

後、その気分の失せないうちに、すぐに広場に向かって、彼女を招きました。彼女の腹の上にのりながら、「ここをこうやって……」と、そのつややかな胸から、下腹にかけて、人差し指でなぞりながら、切り裂く仕草をしました。若い、美しい土人の娘が、仲間の男達に叩きころされ、その腹をさかれ、その中に焼け石を入れて料理され、その後、その全身を、部落の人々にむさぼり喰われるというその場面を、頭に繰り返し描き出しながら、その細部を彼女に逐一説明して、目の前の、その彼女の腹を〝切り裂いて〟みたのです。

「あんたの中にも、そんな考えがあるからよ」半ば真剣に言われたその彼女の言葉に、いや、その通りだと、心の中で答えながら、しかし、自分の心の奥をみすかされた様に、やはりぎょっとしました。そして、また、その映画の幻を、現実化することは不可能になりました。

その娘を、最後に自宅に招いた時は、大げんかをしました。その前の晩、彼女はウイスキーを所望し、そのうち、少しよっぱらってきたのか、シーツの上にすっかりこぼしてしまいました。「あしたの朝来て、洗ったげるわ」何となくうれしい様な気になり、その朝はめずらしく早く目を覚まして待っていました。

……しかし、昼になっても、夕方になっても、ついに彼女はあらわれず、闇が下りて、いつもの時間になった頃、広場まで歩いていきました。彼女は、いつもの様にそこに立っています。近寄っていきながら、おずおずと口をききかけると、「なによ！」と、あごをしゃくり、見下しています。何も言えず「アパートに来てくれる？」とだけ言って、彼女とアパートに帰ってきました。そして「ずっと待っていたんだよ……来てくれなかったの……」と言い出すと、「なんで?!」とたたみかけてきます。「だって、きのうの晩、シーツを汚したから、洗うって……」と言いかけるや、「ふん！　あたい、そんなお人好しじゃないわよ!!」と、私の肩越しに、壁をみつめて言いました。その調子に思わずカッとして口論になり、最後に、帰ろうとした彼女の前に立ちはだかると、「このチビ男が!!」と叫びました。結局彼女は、シーツを腹立ちまぎれに浴槽に投げ入れ、その上から洗濯石鹼粉をばらまきました。

翌日、私はそのぬれたシーツを、洗濯屋にもっていかねばなりませんでした。それでもその夜は最後に、セックスをしながら、「ごめんね」と訳もわからずあやまっていました。「それなら、他の娘（こ）を探したらいいでしょ。あたいはもうおしまいよ！」と言う言葉がこたえたのかも知れません。私のアパートまで来てくれる〝他の娘〟は、いそうにないと思ったからです。そして、「本当は君が好きなんだ」と、その言葉を言ったとたん、なぜか涙が出そうになりながら、その身体に改めてだきついていました。

その夏、一年三カ月ぶりに日本に帰った時、大学院の先輩に、パリで会った娼婦の話をしました。そして話しながら、本当に自分は、西洋の女を抱いたのだろうかと、夢の様な気がしてきました。

一カ月余りの滞在を終え、パリに引き返してすぐ、エクサンプロヴァンスで開かれた、言語と文学の国際学会に参加しました。一週間の日程を終えた最後の日、その日だけ学生

食堂で昼食をとらねばなりませんでした。

一人で食事をしていると、どこからか、若い女性の声がします。「あなた、日本人？」振り返ると、薄い栗色の髪に、これも薄く透き通る様な灰色のひとみが、私をみつめていました。この街に住む画学生だと自己紹介し、問われぬまま、いろいろ自分のことを話しはじめました。最後に、「いつ帰るの？」ときくので「あした」と答えると、心持ち顔がくもって、「もっと居られないの？」と言います。「明日友達と一緒に街を案内したいわ」

しかし、私の頭には常に、もうすぐパリに来るという、あの、初恋の彼女のことがあり、しかも、この帰りには、一泊どまりで、アヴィニヨンに寄るつもりでした。ミレイユ・マチューの生まれ故郷を見たかったのです。「ろーん、考えてみるけど……ちょっとむずかしい……」と答えると、「それじゃ、きょうもし時間があれば……」といいます。「午後も講演がある」と言うと、「じゃあ、夕方むかえにくるわ。よければ、セザンヌの描いたサント・ヴィクトワール山に案内するわ。私、小さな車をもってるから……」と言っています。本当かな、と少し信じられぬ気持で、それでも夕方の約束をしました。

講演がおわり、玄関で、半信半疑で待っていると、少し遅れて、彼女があらわれました。石段の下に、小さな、これでも走るのかなと思われる車があります。乗り込むと、油絵の絵の具の匂いか、オイルの匂いがします。「よければ、学生食堂で食事をしてから行きましょう」と言って、ふたたび私達は、大学の食堂にいきました。

パリと違って、その食事は豊かでした。二、三人の男の学生達が、冷やかし半分の様に、彼女に声をかけました。彼女はそれをさらりと流して笑っています。今晩のナイトは私だというのでしょうか……。生まれてはじめて、自分が主人公になった様な気がしました。窓の外では、サント・ヴィクトワール山が紅色に燃え上がっています。「今から、本当にあそこにいくのだろうか……」ほとんど信じられぬ心持でした。皿に山盛りとったものを大方残して、彼女と共にそこを出ました。

一度暮れかかると、南フランスの夕暮はたちまちやってきます。車がやっと山道に差しかかった頃は、ほとんど周囲は闇に沈み、こわれかかったヘッド・ライトの薄暗い光が、黒々とした灌木を、生きものの様に照らし出しています。もし彼女がよからぬ意図で、私を連れ出したのだとしたら、自分は、造作もなく、その罠にはまり込んだことになります。追いはぎの一味だろうが何だろうが、こんな若い女性になら、身ぐるみはがれて、命を取られても構わないという気になりました。この薄ら寒いセザンヌの山のふところで、今一生をおえてみるのも、あるいは私の人生の、妥当な結論のような気がしてきます。「この山の奥に、お友達が住んでいるので、そこに寄ってみましょう。いいかしら？」いいかしらと言われても反対する理由のあるはずもありません。その友達というのは、追いはぎの一族かしら、あるいはその家は、鬼の家かも知れない……。

その内、風邪をひいて、くしゃみか咳でもする様に、車は妙な音をたてて、ゆらぎはじめました。このまま止まってしまったら、本当にどうなるのだろうと思っていると、彼女は唯笑いながら、「あら、やっぱりダメかしら……」などと言っています。それでも何と

か走りつづけ、富士山の五合目に来て、頂上を見上げた時の様に、真黒い岩の塊が、それよりわずかに明るい闇の空に、突き出ているのが目に入った時、もう一人の友達のところにも寄ってみたいからと、ふいにカーブを切って、どす黒い壁を前にみたと思う途端、それを突きやぶる様に急停車しました。

あたりにも何の光もなく、ヘッド・ライトはつけ放しにしました。彼女に次いで、ためらいながら車を降りた私に、「ちょっと待ってて。見てくるから……」と言ったまま、彼女は黒い壁の向こうに消えていきました。

昼間の暑さにも拘らず、身体の中心から凍ってしまいそうに感じながら、もしかしたら、このまま彼女は消えてしまうのではないか、あるいは、もうすぐ他の誰かがあらわれて、いよいよ殺されるのではないかと思っていると、しばらくして、サッサッサッと、背後からもの音がして、はっと振り返ると、彼女が立っていました。

「だれもいないわ。どこかへ行っちゃったのかしら……」一体こんなところに、本当に人の住む家があるのだろうかと思いながら、ふたたび車に乗り込みました。車はそれから、

さらに山道を登りはじめます。めざすその友達の家は、あるいは、サント・ヴィクトワール山の頂上にあるのだろうかと思っていると、「着いたわ」と彼女は突然言いました。みると確かに、前方の闇の、やや高いところに、わずかに家の灯らしいものがみえます。ザッザッザッザッザッ、と、大きな音をたてて、車は、砂利の中にのめり込みました。

「私の友達、勇気あるでしょう、こんなところに、小さな娘と二人丈で住んでるのよ。御主人は水兵さんだから、しょっちゅう留守なの」彼女はそう言って、車を降り、先にたって石段をのぼっていきます。私の心にはその時、妙な連想がうかびはじめました。しかし無論口には出しません。私達が近づくと、扉が開いて、想像した様に、若い、しかしやや疲れた陰のある、金髪の婦人があらわれました。

「車の音で誰か来たことがすぐわかるのよ」わずかに微笑を浮かべてそう言いました。

「そりゃ、用心がよくていいわ」階段をのぼってきたその歩調をゆるめずに、彼女の方はそう言って、玄関に入りました。ややためらって、それから促されるまま、私も中に入ると、そこには、銀色に輝く、ものものしい金属を口からはみ出させた、小さな女の子が立っていて、私達をのぞき込みました。「歯の矯正してんのよ」「そうね、今のうちにしとかなきゃね」いつのまにか、私の後になった二人の声が、玄関先でします。「さあさ、入って」婦人の声が、私をすぐ右手につづく小さな応接間に通しました。

そこには、水兵らしい持ち物——どこかの、あやしげな小店で買い込んだ様なマドロスパイプなどが、ものものしくガラスのケースに収まっており、その前には、子供のおもちゃが、雑然ところがしてありました。

「ごめんなさいね。いつもこうなの……」「ええええ、わかっててよ。小さな子供がいれば当然よ」と彼女は、相手が何か言う度に、まるで大分前から、その答えを用意していた様に、相手がすべて言いおわらない内に、すぐにそれに答えていきます。あたかも、私にその如才なさをみせかけている様に感じられ、次第にいらいらしはじめました。

「それにしても、この家の女主人は、私のことをどう思っているのだろう。そして、突然、その見知らぬ東洋人を、闇の山道を連れだって、自宅まで連れてきたその女友達のことを……」自分がまるで、あらぬところに迷い込んだ、黄色い蛾の様な気がしてきます。あるいは、文字通り馬の骨か……。出来る丈早く時が過ぎたらいいと願う様になりました。しばらくして、突然、ウァーンという鋭い泣き声が起こりました。「どうしたの?!」と、彼女はやや青くなって婦人にききました。「なーに、目が覚めて、わたしがいないから泣いてんのよ、ちょっとみてくるわ」先程の、金属を口からはみ出させた、その為か、少しもかわいく思われなかった、女の子の顔が浮かんできます。立ち上がって応接間から出る婦人の後姿を目で追うと、そこに、すらりとした真白いふくらはぎが、美しく輝いていました。

「もしも、もしも……」と私は、先程の連想をまたつづけて自分に言いました。「もしも私が一人でここに忍び込んできたら……やはり、あの砂利の音で、この婦人は、玄関の扉を開くに違いない。その扉の陰から、やにわに、おどり込み、婦人の脳天を一打して気絶させ、それから、奥でウァーンとまだ泣いているかも知れない女の子にも一打くれた後、この婦人のところに引き返して……それから、それから、それから……服をぬがし、ゆっくりとその白い、やや疲れた皮膚をながめまわした後、あの、すらりとしたふくらはぎの上につづく太腿にかぶりつこうか……どんな味がするだろう……白い豆腐のような味、二日目の冷やっこ……」

次の瞬間、自分は何を考えているのだろうと、目の前の、視線が会うと、精一杯笑顔をつくる彼女の姿をみとめました。間もなく引き返してきた婦人の前で彼女は、「やっぱりあした帰るの？」と、私にふり向いて言いました。もう一度頭に、初恋の彼女のことや、ミレイユ・マチューのアヴィニヨンのことなど浮かべてから、「ええ」と答えました。

彼女は、ふっと顔をそむけると、婦人としきりにまた話をはじめました。ようやく、彼女が立ち上がり、ホッとしながら玄関口に出、そしてふたたび闇の中に立った時、ここの主人は本当に帰ってくるのだろうかと思いました。砂利の音を残して、次第にその家の灯りが遠のき、ついに闇の中に消える頃、もう一度彼女は言いました。「本当に、彼女は勇気があるわ」下りのせいか、行きよりも車は楽そうに走りはじめます。それでも、黒々とした灌木が、やにわにライトに照らし出されると、やはり自分達は、人界からは程遠いところにいると感じました。

先程の連想が、また燃えかかすの様に、私の心をよぎります。彼女は、本当に僕を信用し切っているのだろうか……ここでもしふいに彼女に向き直り、ギョッとして振り向いた、彼女のその長い首に、両手を巻き込んで、力いっぱい締め上げたら……そして気を失いかけた彼女の服を、すばやくはがして、そのやや汗くさい肌に口をつけ、そして思い切り噛みついたら……長年の夢を達成する、あるいは今は、千載一遇の好機ではないか……思わず、彼女の方を振り向きかけると、やにわに、前方から照らし出されて、目を伏せました。先程の御婦人の、水兵さんの御主人が、帰ってきたのだろうか、完全に人の世から、切り

離されていると思っていた闇の中に、ふいに、凡庸な形の小型車が乗り込んできました。

「やっぱりダメか……そうだ、あの婦人に見られている以上、やはりどうしようもない。後で、彼女の屍体が山道で発見されれば、当然、どこの馬の骨ともわからぬ、あのうさんくさい東洋人に違いないと、決めつけるに違いない。あきらめよう……」

しかし、その、連想の最後の燃えかすによって、私は激しく燃え上がってしまいました。手を少し伸ばせば、そこに、うら若い女性が、何の警戒心もみせずにいるのです。ふたたび、むしゃぶりつきたい様な衝動にかられていると、ふいに彼女は車を道の脇に寄せて止め、窓から、その裸の白い手を差し伸べて、白い小さな花をつけた草をもぎとり、それを両手ではさんで、私の顔の前に持っていきました。「嗅いで」と言うので、鼻先をそれにつけて、少し息を吸い込むと、草の匂いのうちに、やや甘ずっぱい匂いがしました。

それから彼女は、その花の、フランス語の名前を言いました。そしてしばらく彼女は、その花をじっと持ったまま、黙り込んでいます。白い彼女の手は、私の目の前にあります。一瞬、彼女は一体何を言いたいのだろうと思いました。「手を握ればいいのだろうか……」周囲の空気が凍りついた様に感じ、その塊が、喉に突きささる様な気がしました。指一本動かすと、まわりの空気は粉々に砕け散り、そして今、私達の居る、この闇の世界まで、跡形もなく消え失せて、そして後に一人、この灌木の中に、打ち残される様に感じました。

やがて彼女は何も言わずに、その花を、ポンと窓から捨てると、車はまた走り出しました。しばらくして、「これから、どこへ行きたい？」ときくので、「どこでも……」と答えると、「サカナというところで、お祭りをしているのだけど、行ってみる？」と言います。サカナ？　サカナのお祭り？……なんだか、周囲の空気が生臭くなった様な気がしてためらっていると、「それともあなたの学会のあったところで、まだ何かしてるの？」とききます。

その夜は、最後の、お別れのダンス・パーティーがあるはずで、彼女の車でこちらに来しな、派手なロングドレスを引きずりながら、教授の婦人達の中では、最も美しくみえた婦人が、亭主と喧嘩でもしたのか、ややしかめ面をして歩いているのが目にとまりました。その時、このダンス・パーティーをのがしてしまうことが、妙に惜しい様な気持になりました。今、その彼女の言葉に、ふいにまたその感情が蘇ってきました。

「最後の夜で、ダンス・パーティーがあるんだよ」と言うと、

「サカナにする？　ダンス・パーティーにする？」と重ねてききます。

しかし、そのサカナのお祭りが、いかなるものかもわからず「そこで何があるの？……その……サカナとかで……」ときくと、「サカナ？……ああ、サンカンナ。お祭りで、踊ったり、歌ったりするの。○○○って踊り知ってる？」「知らない」と言うと、「ピッタリくっついて踊るの。すごーくセクシーなのよ」

と言って、目をキラキラさせながら、笑って私をのぞき込みました。彼女の汗くさい体に嚢虫の様に吸いついている自分の姿が浮かんできて、だまっていると、しばらく車を走

らせて、「さあ、ここが別れ道。サンカンナにする？　大学にする？」と、ふたたびききました。追いつめられたまま、またあのロングドレスと、サカナのにおいが浮かんできて、「大学にちょっと寄ってから、そこに行こう」と答えていました。「ＯＫ！」と彼女は勢いよく答えて、私達はふたたび大学に帰りました。

ホールが、いつの間にか、パーティーの場所にかわり、そこで、昼間は、しかめ面をして、講演のリストをにらみながら、ペン先を噛んでいた人々が、今は赤い顔をして、その夫人や、あるいは、事務係の、太ったおばさん連中と、ゴーゴーを踊っています。例のロングドレスの婦人を目で追うと、別の婦人と共に、先程の渋面は忘れて、にこやかに、踊りの輪の外を歩いていました。

残り少なくなったつまみなど、皿にとっていると、ベルギー人で、日本に三年いたという教授が声をかけてきました。彼女は、日本を知っている同じ西洋人という為か、目を輝かせて、彼の話をききはじめました。しかし、彼の口からのぼる日本評は、妙に意地悪く、皮肉っぽく、抗弁しようとする程に、それは毒を増し、どぎついものになっていきました。私は次第に彼と口をきくのがイヤになってきました。しかし彼女は、かえってその言葉に魅きつけられる様に、いかにもナイーヴな視線を彼の顔にそそいでいます。

とうとう私は、「もう行こう」と彼女に言いました。何かまだいいたそうな彼女の素振りをわざと無視して、さっさと車に乗り込みました。やがて車は、闇に沈むオート・ルートを、猛スピードで走りはじめました。大分走った頃、「ボワチエまで〇〇キロ」という標示が見えました。エクサンプロヴァンスは、はるか彼方の闇の中に消え去っていく様な気がします。彼女は気のせいか、口数が少なくなりました。あのベルギーの先生によって、彼女の中の、日本への神秘のベールは見事切り裂かれたのでしょうか……。

オート・ルートからはずれ、ようやく車のスピードがおちた頃、「この辺りだと思ったんだけど……」と、闇の中をのぞき込みながら、彼女はそう言いました。祭りらしい、明るさはどこにも見あたりません。車をおりて、靴音が、その静まり返った夜道を、びんびんと揺るがす様に感じながら、しばらく歩いてみましたが、闇の向こうには、さらに深い闇がねむっている丈です。

夜中にふと目がさめて、皆寝静まっている部屋に、一人取り残された様に感じながら、その闇に目をこらしている子供の様に感じはじめていました。祭りのにぎわいは、夢の彼方に消えてしまったのでしょうか……その明るさ、人のさざめきを渇望する様に、あちこち歩き回っていた私達は、ようやく闇の彼方に、薄暗い、日本の提燈の様な光をみとめました。

人影はほとんどなく、ただ、がらんとした広場に、メリー・ゴーランドなどの遊園地の乗り物が点在しています。そしてそのほとんどは、電気の灯りももはやなく、薄汚れたカバーをかぶってねむっています。それでも、その一番奥の、テントから、音楽の調べがきこえてきました。

やっとたどりついたかと、中に入ると、その広い中に、わずかのカップルが夕食の後、

ちょっと寄ってみたという恰好で踊っており、中央では、疲れ果てた様な蓄音機が、今晩の最後の一曲だぞという様にまわっています。私達は、ただぼんやりと、この様子をながめていました。○○ダンスはどうなったのだろうかと、ちらりと彼女をみると、ボーッと正面をみつめたまま、「もうおしまいの様ね」と一言言いました。

ほどなく私達はそこを出て、それから出店の屋台で、かき氷と、この辺りのお菓子だという、饅頭の様なものを一つずつ買いました。「お先に」と言って、彼女の食べかけをその後ほおばりながら、これが彼女と私の、唯一の接触だという気がしました。

「私、少し疲れたの、もう帰ってもいいかしら」私達は、また夜のハイウェイを、はやくエクスに辿りつかないかと思いながら帰りました。

大学の宿泊所の前に止まって、「秋にはパリに行くかも知れないから、時間があれば連絡するわ」と言い「それじゃパリで」と別れを告げる時、ふと私は「フランスのお別れの仕方は……」と言いかけました。あの、相手の頬に音をたてて接吻するやり方を想い出し、びくびくしながらそうつけ加えたのです。しかし、その言葉が分ってか、分らずか、彼女はにっこり笑って、手を差し伸べました。

翌日私は、アヴィニヨンに発ちました。

ホテルに荷物をおいて、すぐに法王庁の方角に歩きはじめました。細い道の行く先が、夕日に燃えています。そこに法王庁はあるのでしょうか……その光の溢れる中、一度に視界が開けると、前方に、褐色の四肢をあらわにした若い女性が歩いています。その、半ズボンから伸びる太腿に吸い寄せられる様に、私は法王庁の広場の傾斜を登っていきました。

紺碧の空に突きささる十字架像を右にみて、ようやく頂上まで登りつめ、眼下を見下ろすと、朽ちかけたアヴィニヨンの橋のかかる、ローヌ川の、ゆったりとした流れの向こうに紅の日の玉がおちようとしています。やがて、それが地平線にかかると、橋が、川が、丘が、一度に、その光の中に燃え上がりました。

夢をみているのではないかと自らの目を疑いながら、その上に限りなく広がる空に吸い込まれるように仰ぎみると、宵の明星が、キラキラと、夕日の中に輝いています。胸が一杯になり、その光が滲んでみえると、真紅な火の玉も、そのまわりの赤に溶け込んで、水彩画を水に溶けこました様に、すべてが潤んでボーッとした単一色にかわりました。

夕食の後、闇に沈む街の中におりていきました。きれいに化粧をした、黒髪の、オリエンタルな美人が、通りを行きかっています。小さなカフェーのテラスに、二、三人の若い女性が腰かけているのを目にして、その間に座わりましたが、ボンスワールという一言さえ発することが出来ません。

賑やかな別のカフェーに入りましたが、そこでも唯遠くから女性を眺めている丈でした。ホテルに帰り、ベッドに横たわり、ドアに掛っている、アヴィニヨンと記したキーホルダーを見ながら手淫をしました。「ミレイユ・マチューのふるさとに居るんだ」と、心に言いきかせながら……。

翌日私は予定通り、そのアヴィニヨンを後にして、パリに帰りました。

第六章

インターホンのベルが鳴りました。受話器をとると、「ルネ」という、短かい、少し弾む様な早口の返事がありました。「入って」といつもの様に答えて、ベルが鳴った瞬間からドキドキしはじめた心臓の音をききながら、戸を開け、戸口に立って、彼女の上がってくるのを待ちました。

彼女は笑っていませんでした。もう知っているのでしょうか、きょうの自分の運命を。ふとそんな考えが走りました。しかしそんなはずはありません。すぐに彼女は笑顔になりましたが、その最初の、少し生真面目な、そして少し不安そうな顔つきは、心の隅に貼り付きました。「何度もごめんね」という私の言葉には答えず、すっすっと部屋の奥にすすみながら、肩からショルダー・バッグをはずし、ベッドの頭の方にポンと投げ捨てて、そこに座わりました。

白い二の腕が剝き出しになった黄色いノースリーヴの軽装でした。投げ捨てた時に、その白い肉がぷるぷる震えたかも知れません。いつか手を合わせて叩いた時に震えた様に。その時私は思わず生唾を飲み込みました。なめらかな白い肌が一杯にふくらんだ若々しい乙女の肌でした。

私は部屋の隅にわざと置いていた机を彼女の方に持っていって、いつもの様に紅茶を入れました。彼女はこれが好きでした。ポットには味つけに、たっぷりウイスキーが入っていました。少しはその時痛みが薄れるかも知れない、そう思ったのです。

ポットから、彼女のコップに紅茶を移しました。透き通った赤茶色の液体が、温かい湯気をたてて、白いコップの内側に満ちていきました。それから、いつもの様に砂糖壺の蓋を開けて彼女に差し出すと、彼女はその中に長い指を入れて、角砂糖の一つを取り出し、それを自分の手で二つに割り、その半分を、私にくれました。

これは以前、二杯目の紅茶の為に、受け皿に彼女が残りの半分を置いていたのをもらってから、彼女はそれをよく覚えていて、忘れず私にくれることになっていました。秘かに私は、その時彼女の指が触れて、彼女のにおいが角砂糖に移り、そしてそれが自分の紅茶に混じって、一緒に飲み乾したかったのです。砂糖が溶けない内に、ごくりとその液体を飲み込みました。

テーブルの上にはまた、日本のお菓子がありました。その内の一つをすすめました。彼女は、私の説明を、少し首を傾げて、ふんふんという様に聞きながら、にこにこ笑っていました。それから周りの紙を取って、口に入れました。「おいしい？」ときくと、「ふうーん」と軽く節をつける様な調子でうなずき、味わっていました。これが後、胃袋の中に残るのでしょうか。私は一齧りした丈で食べませんでした。お腹を空かせておかなければなりません。彼女もあまり紅茶も飲んでほしくありませんでした。後で、その音がしたり、溢れ出てきたら何となくイヤだからです。紅茶のアルコールのせいか、彼女は口軽になりました。

「さっき友達と散歩して日向ぼっこしてたら、うすいスリップ、すごーいうすいスリップしかつけていない、ほとんど裸の男の人がいたの。私達あまり近づかないで、少し離れていたけれど……」と、手振りを混じえて、上機嫌で笑いながら言いました。

「どこで？」と私がきくと、笑いが消えて、

「ろろろ、セーヌ川のところ……」と答えました。

「暑いと変な人が多くなる」と私は言いました。

彼女は笑っていました。一番変な人は自分ではないかと思いました。暑い陽光の下で、彼女の体は充分に温まり、その芳しいにおいが、体内から溢れ出たに違いない……私は、彼女の方に向き直って、息を一杯に吸い込み、そのにおいを胸一杯吸い込もうとしました。温かい健康なにおいです。今、生きているにおいです。体内一杯に血液がまわり、発散していくにおい、生きている生命の、肉体のにおいです……もうすぐこれが、予定通り、私の体内に滲み込むのです。

「あしたのことだけど、もしよければ、映画館の脇にある小さなカフェーで待ち合わせることになったの。あなたの友達が、そのカフェーを知っていたから。いい？」

「うん、いいよ」

「キムに電話したけど、全然通じないから、その友達のユシェットに電話して、あなたのところに電話する様に言ったの。そして相談して……」

彼女はいつもの様に、軽く飛ぶ様な口調で話しました。そして私は唯、話す時のその彼女の目と、忙しく動く唇の動きを、ポーッとなって眺めていました。「わかった？」その私の様子がわかったのか、パッと赤くなって彼女は笑いながらききました。

その時の表情を、私は忘れることが出来ません。それをきいたことが、まるで自分で恥ずかしい様に、内気に赤く顔をそめたのは、彼女の優しい、繊細な心を表わしている様で快かったのです。こんな優しい娘を私は……。

彼女はそこでもう一度、言ったことを繰り返しました。「ユシェットから電話あった？」

「いや」と私は首をふって答えましたが、心当りがありました。私はその時よくわからず、「まちがいだろう」と言ってさっさと電話をきってしまいました。何となく心が痛みました。嘘つきだと思いました。

「きょうのところ、まだ読んでないの」と言って、彼女はショルダー・バッグから本を取

り出しました。私はそれを取って、私の書いた手紙を挟んでおいたところを探しました。しかしもうその目的はなくなっていました。そこでもう一度探し、マークのついているところを見つけ出して、彼女に示しました。「ジョナサン」という作家の名が書いてありました。「僕の日本の先生が、今晩レストランに君を夕食に招待したいと言っているんだけど……多分ふさがってるだろうね」突然何故か私はこんなことを言い始めました。「特に何も……いいわ」意外にも簡単に彼女は承諾しました。少しびっくりして、その次のことを考えようとしました。

「フークというレストラン知ってる？　シャンゼリゼにある……凱旋門を後にして、右にある大きなレストラン……」

「地下鉄はどこ？」

「うーん、ジョルジュ・サンクだったと思う」

そこで彼女はメトロの地図を取り出しました。彼女と私の顔が近づきました。彼女のにおいが軽くしました。

「ここ」

「あ、わかったわ」

「メトロの駅のすぐ近くだったと思う。どちらにしても、大きくフークって書いてある」

彼女は少し笑いました。

「何時？」

「八時」

「こんな恰好でいいかしら」

彼女はそう言って、やや半腰になり、うつむき加減にちらりと自分の足元の方に目をやりました。彼女の動作に誘われて振り向いた私の目に、ブルーのサンダルにブルーのジーパン、そしてローブの黄色が飛び込んできました。生々しく呼吸する彼女の肉体。私の尊いいけにえ。何も知らないその無邪気な動きが、私の欲望の射程距離内で羽ばたく小鳥のそれの様に思われました。

「私のドイツ語の発音でいいといいんだけれど……」「僕の先生喜んでいたよ」「聴いたの?!」とちょっと大きな声を出して、少し驚いた様に彼女は言いました。

一瞬ハッとして、辻褄を合わせようと「ろ、うん、電話で聴いてた。受話器をこういう風にあてて……（と、仕草で示しながら）」無論これもでたらめです。そんな先生など存在しないのです。「今、イギリスにいる。きょうの夕方フランスに寄ってあすの朝イタリアに発つの」「大旅行ね」と目を見開いて、首を動かし、驚いた素振りをみせて彼女は笑いました。「この前、雑誌の写真で見せた先生。少し変わった先生だよ」彼女はまた、にっこりしました。少し間をおき、

「ちょっとしなければならないことがあるから、八時に行くわ」

「うん、いいよ」

何があるんだろう、ふとそう思い、時計に目をやりました。

り出しました。私はそれを取って、私の書いた手紙を挟んでおいたところを探しました。しかしもうその目的はなくなっていました。そこでもう一度探し、マークのついているところを見つけ出して、彼女に示しました。「ジョナサン」という作家の名が書いてありました。「僕の日本の先生が、今晩レストランに君を夕食に招待したいと言っているんだけど……多分ふさがってるだろうね」突然何故か私はこんなことを言い始めました。「特に何も……いいわ」意外にも簡単に彼女は承諾しました。少しびっくりして、その次のことを考えようとしました。

「フークというレストラン知ってる？　シャンゼリゼにある……凱旋門を後にして、右にある大きなレストラン……」

「地下鉄はどこ？」

「うーん、ジョルジュ・サンクだったと思う」

　そこで彼女はメトロの地図を取り出しました。彼女と私の顔が近づきました。彼女のにおいが軽くしました。

「ここ」

「あ、わかったわ」

「メトロの駅のすぐ近くだったと思う。どちらにしても、大きくフークって書いてある」

　彼女は少し笑いました。

「何時？」

「八時」

「こんな恰好でいいかしら」

　彼女はそう言って、やや半腰になり、うつむき加減にちらりと自分の足元の方に目をやりました。彼女の動作に誘われて振り向いた私の目に、ブルーのサンダルにブルーのジーパン、そしてローブの黄色が飛び込んできました。生々しく呼吸する彼女の肉体。私の尊いいけにえ。何も知らないその無邪気な動きが、私の欲望の射程距離内で羽ばたく小鳥のそれの様に思われました。

「私のドイツ語の発音で いいと いいんだけれど……」「僕の先生喜んで いたよ」「聴いたの?!」とちょっと大きな声を出して、少し驚いた様に彼女は言いました。

　一瞬ハッとして、辻褄を合わせようと「ろ、うん、電話で聴いてた。受話器をころいろ風にあてて……（と、仕草で示しながら）」無論これもでたらめです。そんな先生など存在しないのです。「今、イギリスにいる。きょうの夕方フランスに寄ってあすの朝イタリアに発つの」「大旅行ね」と目を見開いて、首を動かし、驚いた素振りをみせて彼女は笑いました。「この前、雑誌の写真で見せた先生。少し変わった先生だよ」彼女はまた、にっこりしました。少し間をおき、

「ちょっとしなければならないことがあるから、八時に行くわ」

「うん、いいよ」

　何があるんだろう、ふとそう思い、時計に目をやりました。

「じゃ、はじめましょうか」彼女は言って本を取りました。私はいよいよと思いドキリとしました。しかし彼女は立ち上がらずに、そのまま下読みをはじめました。

　この時はじめてゆっくり彼女の腕をみたのです。それは、思っていた様には白くふっくらとしていませんでした。やや赤味を帯び、肘のすぐ上に、皺が出来て生気が失せ、痩せてみえました。少しがっかりしました。「こんなはずではなかった。どうしたのだろう。いや暑さのせいかも知れない。暑さで一時的に生気が失せたのかも知れない。でも何だか年とってみえる。彼女は一体いくつなんだろう」思わず顔をみました。大人っぽさの中に、子供っぽさがまだちらほらみえます。「いや、まだ若い」私は少し安心しました。

「よければ、あなたのことしてちょうだい」彼女は、本をもっていた片手を離して、ふと振り返って言いました。あまり私が吸いついてみていたので、それを何となく感じたのかも知れません。「うん」と言って立ちながら、机が目にとまり、思いついて、「よければ、こっちに座わったら」と言いました。はやくことを済ませたかったのです。彼女は「ええ」といって、屈託なく立ち上がりました。

「死、死って、一杯出てくるわ、本当に陽気な詩だこと」

「それがドイツ表現主義の特徴だよ」

　そういいながら、私はテーブルをぐっと隅に寄せました（彼女が倒れた時、あたらない為です）それから、椅子の位置を充分に考えて配置しました。椅子をもったまま、彼女が座わるのを待ちました。

　私と彼女の位置が至近になりました。彼女の身体に触れることだって出来ます。彼女のにおいがこの位置からだと一番よく嗅げます。甘くて、ふくみのある健康ないつものにおいが鼻をかすめました。椅子が急に重くなって動かなくなりました。それから私は椅子から離れ、じっと下を向いて本を読んでいる彼女をちらりと見、早々ライフルに手をかけました。

「あなたの先生、英語話す？」突然彼女はそう言って、こちらを振り返ろうとしました。

私は内心あわてて、ライフルから遠ざかり、少し腹立たしい様な気持になって、

「うん、もちろん。だって、アメリカで教えてんだもん」と言いました。

「あー、そうだったわね」と言って彼女はふたたび下を向いて本を読みはじめました。

　ジェラニウムの花が目に写りました。初夏の光が一杯に、その花のまわりにあふれています。ふたたび目を部屋の中に移し、部屋の真中辺りまで帰った時、「ふん、いいわ」と彼女は言いました。

「いよいよだ」

　内心ふるえました。手も、心持ちふるえていた様に思います。私はそれでも平然と前に進み出て、テープレコーダーをセットしました。テープレコーダーは、わざと壁と直角においてありました。弾が彼女の頭を貫通して、機械がこわれないかと思ったからです。それを彼女は、自分の正面にもっていきました。テープレコーダーのまわる音。「アーベン」透き通るきれいな発音のドイツ語が響きました。

「今だ。今しかない。今をのがせば必ず後悔する」

　いつも、ふるえる声で内心そう言いながら、ライフルに手をかけます。そして、どうしても撃つことが出来ませんでした。しかしこの時は、もうさんざんそれを繰り返していたのです。半ば機械的に、しかし思い切ってすっとライフルに手をかけ、すぐに構えました。

　早かったですが、確実でした。そして、少なくとも表面は、ひどく落ち着いた動きでした。彼女の声は読みつづけています。一呼吸、二呼吸……それから軽くハァーっと息を吐きました。下を向いて読んでいる彼女の白いうなじ。細い鎖のネックレス。人差指を思い切って後に引っぱりました。

「ボン!!」

　瓶の蓋がはじける様な音がして、銃眼の、彼女の上半身が視界から失せ、机にうつ伏せに倒れかかり、バタンという音がしました。

　それから数秒の後、彼女の身体は後に大きく傾いてきました。思わず私は、銃を握りしめたまま、左手に身をかわしました。その時の、彼女の動きは、あまり脈絡のない、分解写真の様に、私のひとみの中に、焼きついています。

　その時、私は彼女の顔を見た様な気がしました。いや、彼女が、私を見た様な気がしました。青白い頬、見開かれた目、口から、鼻から、頬をつたって流れる二筋の赤い線。「しまった、またおかしかったね」と、私は照れくさそうな顔をして、話しかけようとしました。しかし次の瞬間、ドタンと床におちる音がし、頭ががくりとして、右腕が肘から曲がって後に投げ出されました。小さな手が見え、袖の下がぶるりと震えました。そしてその直後、首のつけ根が数回、びくびくと動くのをはっきりとみとめました。それが死の瞬間だったのでしょうか……。

　まだ銃を固く握りしめたまま立ちすくんでいる私の目に、第一番に飛び込んできたのは、彼女の首筋から、おびただしく流れ出る血です。それは、とどめようもなく絨毯に染み込んでいきました。いや、染み込んだ上にまたあふれてきて、文字通り、血の海となり、その中に倒れた彼女のひとみが私を凝視し、乱れた髪がたちまち紅にかわっていきました。しかし、動いているのはその血の流れだけです。その他は、彼女と共にすべての空間がとまってしまった様に、異常な静けさに沈み込みました。今まできこえていた彼女の声がぷつりととまり、それと同時に時間の流れがとまってしまったのです。

「これが死の静けさか」

　私は第一に、その静けさに驚かされていました。それは見開かれている目にある様な気がして、少しあわてて、その目を閉じようとしました。しかし、深く傾いた頭のせいか、瞼は重く、閉じてもまたすぐに、その異様に見開かれた目は、虚空を打ち眺めます。――深く吸い込まれる様な目、何度とじてもとじない様な目。しかし、先程の自分と、はっきり変ってしまったことを、何か決定的なことが、自分の身に起こってしまったことを悟った時。

　――この時、彼女は、今どこにいるのか、ふとそんな思いが頭をよぎりました。既にこ

の肉体からぬけでて、そのひとみの打ち眺める虚空を漂っているのか、あるいは未だそのひとみと共に虚空をにらんでいるのか……。その顔は異常にやすらかで、ねむっている様でもあり、あるいは幼ない日々は、こんな幼女の顔をしていたのではなかろうかと思われるやさしさでした。

しかし、その白い肌をおびただしく汚してゆく血は、たちまちその顔を、死相といわれる風に装っていきます。いずれにせよ、つい先程まで、快活に笑っていた、あの生き生きした彼女の顔は、瞬時にして失なわれたことは確かです。私は心の中で、その前後がどうしても続かず、秘かに苦しんでいました。一体何が起こったのか、あまりにあっけないその移ろい、その中に横たわるものは何なのか……そしてこの静けさは……？

私はしかしすぐに、この血の汚れを一刻もはやく拭きとらねばと気づきました。風呂場に走り、二本のタオルをとって引き返し、それを彼女の首の下に敷こうとしました。血の生温かさが掌をとらえると、たちまちそれはぐっしょりとぬれ、動かそうとした頭からは、新たにおびただしい血があふれでて、二枚のタオルは、真赤な濡雑巾の様になりました。もはや血の汚れはどうしようもないことを悟りました。

その時、ふと窓の外を見て、軽い恐怖が走りました。「誰か見ているかも知れない。そうだ、カーテンをはやく閉めなければ……」今にもその向こうから誰かがのぞいて、叫び出す様な気がしました。完全に閉め切り、暗がりの死体を避けて、机上のスタンドをつけにいきました。カーテンをひいた部屋はまったくの密室で、その部屋の中を、卓上のスタンドは、斜めに照らし出しました。

たった今まで、彼女によって読まれていたドイツ語の本は、その卓上の血の中に、倒れたマイクロフォンと共に、どっぷりとつかっています。一瞬の内に、こんなにも血が溢れ出たのです。

同じく血の中につかっている彼女の顔は、相変らず眼を開き、幼なく開かれた口の間からは歯がのぞき、そしてその間から流れ出た血の筋が、頰を横切り、床にむかってくっきり描き込まれています。首はやや左に傾き、右手はやはり折れ曲がったまま、頭の後に投げ出されています。頭は小さく、細長い胴体の下に、スラリとした、長い足が伸びています。頭は、床のほとんど隅まできているというのに、足の先はまだ机の下に隠れています。彼女の背の高さを思いました。

「今、自分の前に、あんなにのぞんでいたものが横たわっているのではないか。何を待っているのだろう」

私はふっと息を吸い込んで、その足元に向かい、すぐにジーパンのベルトに手をかけました。しかし、ベルトをはずしておろそうとしても動きません。そこで頭の方に向いて、ノースリーヴのうすいコスチュームを脱がそうとしました。しかしそれも首のところまできて、黄色い面は紅にそまり、それ以上動こうとしません。腕をもちました。「冷たい、そしてやわらかい……」まっすぐに伸ばして離すと、だらりと頭の方におちました。しかし、ロープはそれでも動こうとしませんでした。おそらくまだ腕が邪魔しているのでしょ

うが、何故か、首の辺りのおびただしい血が、文字通り血糊の様にはりついてしまった様に感じました。

そこであきらめて、まだ胸に残っているブラジャーを取ろうとしました。これも、彼女の身体が持ち上がらない為、はずれたものの、身体の下にはりついたままでした。

乳房は……悲しくなる程しぼんでみえました。先程まで、衣服の下で、勢いよくふくらみ呼吸していたこのふくらみも、死の瞬間と同時に失なわれてしまったのでしょうか。乳首の先さえ、白くかすんで、むしろ乳房の中に埋まっている様に見えます。健康な性的快感は失なわれ、ここにも死相があらわれている様で、思わず目を閉じました。若い命は、確かに失なわれたのです。

……そこでふたたび足元に向き直って、ジーパンに手をかけましたが、相変らずこれもはりついた様に動きません。ふと思いついて、前のチャックをおろすと、今度はあっという間に前が開き、はじめにヘソが、それから真白いパンティーが見えました。そのままひくと、ジーパンと共にパンティーも、一度に股の下までおりました。生きていた彼女の髪の毛と同じ色の陰毛が、やや痩せた股のまわりをおおっています。その中に、細長い陰部が見えました。それは、何でもなくあらわれ、そして私はそれを、何でもない様にながめました。

ジーパンの間に挟まった手の甲に、やわらかい尻のあつみを感じて、思い切って膝まで下ろそうとした両の手深くに、彼女の身体の温かみを感じ、そこからほのかににおう彼女

の体臭をかいだのです。この時はじめて私は、彼女を抱いた様な気持がしました。

しかし、膝から下は、未だ椅子に、かたくぶら下がったままで、それ以上動きません。そこでまず椅子をのけ、その瞬間どんと床におちた足の先についているサンダルをぬがそうとしました。はじめ、止め金もはずさず、脱がせようとした為、まったく動かないのが、まるでサンダルも足も、蠟か何かで作った人形の様に感じたものです。やっと気がついて止め金をはずすと、足の裏にまだやわらかさを残した女性の足があらわれました。そうしてジーパンを完全に脱がした時、はじめて私は彼女の裸をみたのです。

胴は細く、骨盤は少し出ていますが、尻から太腿は大きく、そのまま足の先まで、すんなりと伸びています。股の部分は思いの外薄黒く、割れ目の中に白い糸の様なものが見え、むっとする匂いがしました。

それから早々うつ伏せにするべく、身体に手をかけましたが、重くて、どの部分を持ち上げようとしても、すぐに床に吸いつく様に元に戻ってしまいます。最後に腰のつけ根の辺りをぐいと力まかせに押すと、ぐらりと死体は傾いて、そのまま下になった方の太腿を引くと、どすんと重い音をたてて下半身だけ裏返りました。そして肩先と腕を引っぱり、押さえつけて、ようやく彼女はうつ伏せになりました。

裏返る時、股の間の白い糸を引っぱりました。ずるずると糸が出てきて、最後に、血で黒く汚れたコルクの様なものがあらわれました。においをかぐとやはりむっとする匂いでした。すぐに捨てました。ちょうど月経なのです。

尻は、白く生き生きとふくらんでいるはずでした。しかし倒れた時の傷か、右に青痣が出来、全体に薄青くなっている様な気がしました。顔を寄せると、やはりむっとする臭いがして、思わずひっこめました。死の瞬間、肛門が開いて、便が洩れたのでしょうか……。しかしそれでも触わると、やわらかくてなめらかでした。右手でそっとなでてから、どこに食いつこうかと、少し考え、右の、一番ふくらみのゆたかな真中の辺りにかぶりつきました。

鼻先が、冷たい白い尻の面でふさがり、息が出来なくなりました。歯がずるずるとすべり、顎に力を入れると、ぎりぎりと妙な音はしましたが噛み切れません。さらに強く噛もうとすると、顎から耳の辺りまで激しい痛みが走り、思わず口を開くと、白い肌の上に、くっきりと歯形が出来ていました。

あきらめて、台所から果物ナイフを持ってきて、それを傷口から少し離れた所に突き刺しました。深くへこみが出来ましたが、刺さりません。

そこでふたたび台所から、肉切りナイフをとってきて突き刺すと、ようやくプスッという低い音がして、刃先が中に食い込みました。手前に引きましたが、切れません。そこで、上下に刃をゆすりながら、切っていくと、突然、黄色いとうもろこしの様なものがあらわれました。

さらに奥深くナイフを突き刺しても、そのとうもろこしがつづきます。少し気味が悪くなってきました。見ると、切口はほんの二、三センチに過ぎません。そこでもう一度台所に行って、さらに先のとがった肉切り庖丁をとって引き返し、それで切りはじめました。ぐっと深く切り込んでも、やはり、黄色い粒状の層は続きます。脂肪なのでしょうか、白人女性特有の、厚くてやわらかい脂肪の層なのでしょうか……。

その内、少し刃の先に赤い色を感じた時、はじめて牛肉そっくりの赤身の肉があらわれました。細かい肉片がぎっしり詰まっている様に見えます。それを刃の先でえぐり取り、すぐさま口に入れて、ゆっくり噛みましたが、強いにおいも味もなく、簡単に口の中に溶けていきました。においのない、マグロのとろの様なものです。ただ飲み込んだ後に、まったりとした感触がある丈です。

「おいしい、やっぱりおいしい……」

こうしてその肉の何片かを口に運んだのです。

「やっぱりうまいぞ！　やっぱりうまいぞ!!」

それから、白い肌と青い目の顔をのぞき込んで、そう叫んでやりました。

遂に白人の若い女を喰ったのです。そして思い通り、うまかったのです。

この上なくうまい肉だったのです……。

それから続いて太腿に移りました。同じ様に、肉切り庖丁を突き刺すと、やはり黄色いとうもろこしの層がまずあらわれましたが、ここは尻よりも、赤身の肉が楽にあらわれました。筋のないきれいな肉でした。切ると、するりと切れ、口に入れても、尻の肉よりさらに素直に口に溶け込んでいきました。まったりとして、実にうまかったのです。

この後、深い切り口をもったその白い屍体の写真をとりました。「顔さえ写さなければ、まさか写真屋も、本物の死体などとは思うまい」そう思ったのです。フラッシュをたいて、慎重にとりました。

この行為の後に、私は彼女の冷たくなった両肢の内に沈み込んでセックスをしました。しかし、今は青黒くくすんだそこへさしこむには、少しの努力がいりました。そこへつけると、冷たくかじかんで、すくんでしまう様な気がしたのです。ペニスを少しふくらませ、その中にさし込みました。冷たい。しかし感触は、生きた女のそれと同じです。それから彼女の全身をいだこうと、前へかがみ、胸の辺りにもたれかかると、フーッと彼女が息をしました。少しおどろいて顔をみると、目を見開き、何だか生きている様な気がしてきました。

「もしかしたら、まだ生きているのかも知れない……」私ははじめて恐怖にとらわれました。しかしそれは、胸にたまっていた空気が出ていったに過ぎません。弾があたってそのまま、吐き出すこともなかったのでしょう。しかしこれで、胸のふくらみをいだく意欲は失せてしまいました。そっと乳房に手をあて、もう一度空気が出るかと少し押したりしました。もう空気は出ませんでした。

射精した後、それでもきれいに穴の中に白い液体が残っていました。それをティシュ・ペーパーでふきとりました。後で死体から、私の精液が発見されることを恐れたからです。おえて、顔に近づき、冷たい硬直した唇に接吻すると、それでも瞬間、彼女の生きた生温かい息が吹きかかった様な気がして、思わずはっとしました。無論、それも錯覚です。

「愛していたんだよ、これでも」

そう言いかけたものの、その白々しさに自分で身震いしました。

いよいよ死体を、風呂場に運び込まなければなりません。どう見積っても、ベッドで狭くなった入口から運び入れることは不可能と判断し、まずベッドを動かすことを考えました。しかしこれは想像以上に大変な作業でした。ベッドの横のスペースは、彼女の身体で完全にふさがっています。そこでドアの入口においてある冷蔵庫をまずのけて、そのスペースへベッドをはめ込むことを考えました。しかしそれでは今度は、冷蔵庫を置くところがありません。仕方がないので、ベッドの上におくことにしました。そしてベッドを動かそうとした時、その上に、彼女の、いつも手にしていたショルダー・バッグを目にしました。死体を触わる時以上に、手が震えてきました。その中には、今は失なわれた彼女の過去が詰まっていました。学生証・定期券・財布・雨傘、そして淋しい程慎しやかな化粧道具……これを見た時、はじめて密かに胸のつまる思いがしました。この小さなアイシャドーで、その眉を描き、この毛抜きで、その体毛を抜いていたのでしょうか……一体何の為に……。

そんな感傷にふけっている暇はしかし今の自分にはありませんでした。それをベッドの上にふたたびおき、くたくたになって、ようやく冷蔵庫をベッドの上に倒し、そのベッドを、部屋の隅に動かしました。それから、死体を動かすのですが、頭の方にまわって、手

をその下にあてがって動かそうとしても、まだ腕を引っぱっても、びくとも動きません。困り果てて、最後に手の先をつかんで、力まかせに引っぱると、ずるっとわずかに動きました。それから、ほとんど死ぬかと思う、死体との格闘がはじまりました。川端康成の作品中の、〝死体の復讐〟という言葉が、心を始終占めていました。そしてまさに死体と共に倒れかかる様にして、それを風呂場に運び込んだ時、ほとんど自分の体力は尽きていました。

　それから、うつ伏せになった尻の上にまたがって、本格的にその肉をえぐり取ろうと計りました。

一番鋭いナイフで尻の穴から、太腿のつけ根、尻の真横までを、皮のついたまま切り取って、それをフライパンにのせ、焼きました。

フライパンが温まってくると、ジューッといって勢いよく油がにじみ出てきました。しかし、表面の白い皮膚の色は変わらず、一片の肉のかたまりになっても、彼女は白いやわ肌をもった女性であり続けようとしている様でした。いくら温めても、その皮膚の上は冷たく、その上に手をのせると、彼女の生きている尻をなでている様に感じました。その裏の、赤い肉が焼き上がって色が変わった時、火を止めて、皿に盛り、テーブルの方にもっていきました。

　それから彼女のパンティーをとり、その末だかすかにおろ甘いかおりをかいだ後、それをナプキンの様に、テーブルの、皿の横に添え、次にテープレコーダーの中で、歌う様

にドイツ語の詩を読む、先程まで生きていた彼女の声を響かせて、両の手の甲に若い女の肉のやわらかさを感じながら、そのひき肉の様にこまかく肉のつまった彼女の肉片にかぶりつきました。

　味はあまりありません。そこで、塩、胡椒をし、その上に、芥子をつけてもう一度かじると、新鮮で、上等な肉の味がしました。まったくくせのない最上等の肉の味です。

　それからもう一度風呂場に行き、今度は胸の上にまたがって、ふにゃふにゃになった乳房を切りとろうとしました。ナイフをあてると、そのまま奥深く引込んで、その割になかなか切れません。やっとナイフがその中に刺さると、やはり黄色いとうもろこしがあらわれ、やわらかさのまま、床に流れおちそうになった乳房を手にとり、裏をみると、一面脂肪で、赤身の肉は見あたりません。

　それを別のフライパンに入れ、火にかけました。すると驚いたことに、それはふくらみはじめ、乳首まであらたにあらわれて、ちょうど生きていた彼女の胸で、生き生きと呼吸していたちょうどその時の様に、元気な、ゴム毱の様な、若い女性の乳房にかえっていきました。喰われるべく、一片の肉のかたまりとなったこの乳房は、フライパンの上で、その女性の生命をとり戻したのです。それは単に、火の熱が、失なわれた彼女の体温のかわりをになって、その皮膚をふくらませたに過ぎないのですが、私は何か、このフライパンの上で、その乳房だけ彼女が生き返った様な気がしたのです。

　その蘇生した彼女の一部分も皿に盛って、それにナイフとフォークを添えてテーブルに

置きました。生きた彼女が、喰われる為に、テーブルにのっているのです。しかし、そのかたまりは喰うにはあまりやさしくはありませんでした。脂肪ばかりが口の中にはいってきて、それはそれなりに甘くておいしいのですが、同時にかなりしつこくて、たくさんは喰べられません。

次に、彼女の太腿の肉も、その様に、皮つきで切り取り、これもやはりフライパンで焼いて、喰べました。この部分は生で喰べた時と同じ様に、もっとも喰べやすく（ナイフでするりと切れました）歯で噛んでも心地よく、そして至極やわらかでまったりとした、まったくくせのないおとなしい味です。彼女が、口の中でその唾液と共にゆっくりと噛みくだき、その体内ですっかり彼女の肉の一部となった、かつての彼女の食べ物は、今、私の食べ物となって、私の体の中にはいっていくのです。そこには、彼女の唾液、体液の味がしみ込み、彼女の体臭がすっかりしみ込んだに違いない、まさに彼女自身の産物だったのです。今、彼女は私の身体の中にはいったのです。

こうして、この日の夕食は、先程ドアのベルを鳴らし、にっこりとその美しい頬に笑顔を浮かべて入ってきた彼女の肉体の一部分で済ませました。

これは長い間夢みていた私の最高のごちそうだったのです。

その夜は彼女と一緒にねむりました。彼女はドアのむこうに、あおむけになってねむっているのです。こわいなどという感じは、まったくありませんでした。むしろ、そのあちらこちら切りとられた身体のまま、ドアをあけて、私のベッドにもぐり込み、一緒に抱き

合ってねむりたい気持でした。しかし、事実は冷たく闇の中にねむり込んだままです。私もその晩は、ぐっすりねむりました。

翌日になって、まず彼女に会おうとドアをあけるのが少しためらわれました。それは死臭をおそれたからです。しかし事実は、さ程すさまじい臭いもなく、ただきのう切り取った大きな傷口に、血がたまり、明るい紅の血の色が、やや黒味がかってみえるだけです。やっぱり彼女はそこにいました。その顔をみると、やはりまだねむっている様に安らかです。生きていた時に話していた死んだおばあさんにもう会ったでしょうか？　その時彼女は、目に涙をためていました。会っているとしたら、もう彼女は、そのおばあさんの両の手に抱かれている様な気がしました。

さあ、きょうもまた戦わねばなりません、この美しい死体と。きょう完全に片づけて、カバンの棺に収め、湖の底深く沈めねばならぬのです。そこを、永遠の彼女の墓とせねばならぬのです。もう一度、さらに冷たくなった様に感ずる彼女の肌に手を触れて、どこから切り取ろうかと考えました。それにはまずきれいにまわりの肉を切りおとさねばなりません。切りおとしながら、その肉片で、朝食も、昼食も済ませようと考えました。

まずきのうのナイフを手にとって、切りかけたままになっている太腿の肉を処分しようと思いましたが、既に脂肪と肉とがからみ合い、それに皮がへばりついて、どうにも切れません。仕方なく、足の他の、肉の厚い部分を切り取ろうと考えました。

ふくらはぎに目をやると、やにわにその部分が喰いたくなり、そこにナイフを突き刺し

て切ると、とうもろこしの薄い脂肪の下に、きれいな赤身の肉がみえました。膝と足首をつかんで、頭を伸ばし、ちょうどとりの足に喰いつく様に、その部分にかぶりつきました。歯でそれは楽に喰いちぎれました。しこっといって噛み切り、ゆっくりと味わいながら噛みくだくと、まったりとした味が口の中にひろがりました。太腿と同じ様に、実にやわらかで、うまかったのです。

その肉の相当の部分を喰べてから、鏡で自分の顔をみると、首の後まであぶらがにじんでいます。生肉のあぶらです。すっかり体内にしみ込んだのでしょう。顔が、てかてか光っていました。

それから気分のおもむくままに、足首をつかみ、その小指に噛みつきました。じじじっといって噛み切れたのは、その厚い皮の一部分と、それから爪でした。まだほんのり足の臭いがします。

最後に土踏まずの部分にナイフをたてて切ると、深くに赤い肉がみえました。そこに指をつっこんで肉をつまみ取り、喰べました。味はまあまあでした。

それから二の腕のあの、ノースリーヴの下で、ぷるぷるとおいしそうにふるえていた部分にもナイフを突き刺し、皮を切って、その部分に喰いつきました。やわらかく、簡単に肉が口の中に入ってきました。やはりまったりとして、そしてうっすら、彼女の体臭のような味が口の中に広がりました。そこも想像以上においしかったのです。その勢いで、肘から下の部分も喰べました。

最後に股に向かって、陰部を切り取りました。口に近づけると、毛が唇にふれ、むっとする匂いです。クリトリクスに噛みつきましたが、ゴムの様にのびて、噛み切れません。フライパンで炒めてから口にほおり込みました。強く噛むと、脂身の甘い味が口の中に広がりました。少しやきとりの様です。噛み切れぬまま、毛と一緒にのみ込みました。のみ込んだ後、彼女が確かに身体の中に入っていく様で全身があつくなりました。

次にうつ伏せにして、尻の両ふくらみを押し開き、肛門をあらわしました。そしてその、きゅっとしまった穴のまわりを包丁の先でえぐりとり、口に入れようとしましたが、匂いが強くためらいました。同様フライパンで焼いてから口に入れました。二、三回噛みましたが、やはり強い匂いで、思わず吐き出しました。みると穴はもう見当らず、焦茶色だった皮が、よくしがんで出した牛肉の肉片と同じ薄茶色に変わっていました。

……

部屋に入ると、ロースト・チキンを焼いた直後の様な強い油の臭いが鼻をとらえました。入口の冷蔵庫の上には、ゴム毱の様な塊が皿にのっています。一瞬何かと思いました。無論、彼女のかつての尻です。手でなでると、やはりなめらかな肌の彼女を感じました。隣の皿には乳房がのっています。乳首が今は黒ずんでみえました。気のせいか心持ち

生臭い匂いがします。

風呂場に入ると死臭が強くなってきている様に感じました。既に二十四時間が経っています。見ると、明り窓から、親指の先程もある蝿が何匹も侵入して、わがもの顔に飛びまわっています。どこで嗅ぎつけてきたのか「おい、おれの食い物だぞ」そういって手を振りまわし、追い払おうとしましたが、逃げるどころか、その手に突進してきます。空恐ろしくなってきました。彼女の白い顔にも数匹たかっています。それを見て、改めて彼女は永遠に失なわれたと感じました。

もはやそれは彼女ではない、ただの〝もの〟にすぎません。「抜殻」という言葉を、この時程痛切に感じたことはありませんでした。果てしなく、彼女は遠いところに行ってしまったのです。つい昨日まで、にこやかに笑いながら話し、紅茶を飲み、私の顔にひとみを注いでいたあの彼女は、一体どこへ行ってしまったのでしょう。

「なくなったのか、文字通り、なくなってしまったのか……」

「こわしたのだ。こわしてしまったのだ」

自分でこわしたおもちゃに、きょとんとみとれる子供の様に、自分を感じました。

すぐに電気ノコギリをとりましたが、それはそう簡単に、使いこなせませんでした。それを、肉をえぐりとって赤い骨のみえたところに突きつけても、「ヴァァ……」というものすごい音の割にはどこも切れずに、やたら肉片や骨の粉が飛び散るばかりです。仕方なく、このスーパーマーケットのすぐ近くに立っていた露天市でみつけた、肉屋が使う小型のナタの様なものを使い、骨の部分めがけてガンガン叩きました。まさにこれは死ぬかと思われる程体力を要する作業でした。叩く度に、死体がはね上がります。もし彼女が感じていたら……そう思うと、痛みが全身に伝わってきました。

それでも不思議に、大腿部はつけ根から離れ、大きな足が、その母体を離れて横たわりました。とりの足の様にみえてきて、足首をつかみ、太腿のつけ根を手で支えて、太腿の肉塊にもう一度喰らいつきました。とりのももを喰う時と違って、重い足は勝手に動きます。時がたって、肉に味が出てきた様に感じました。

次に腕にかかりましたが、これは思いの外、骨がおれました。大腿骨の方が細くて、もろい位です。肩から二の腕にかけてがっちりとかみ合い、骨もかたい様な気がしました。ついに解体出来ず、すべては果てるかと思われました。しかし最後にふたたび取り出した電気ノコギリが、今度は思いの外、うまく骨にかみ合って、スイッチを入れると、「キーン」というかん高い音がしました。彼女の悲鳴の様に聞こえます。一度に切れて、肩からはずれた後、少し動かしてみました。腕輪はまだ手首にはさまったまま、指輪もはずれずについています。

その、すらりと伸びた指をみている内に、急に激しい衝動を感じて、その冷やかな先を、自分の股の下にあてがって、セックスをしました。これが意外に刺激的で、一辺に昇天しました。青白い、血の気の失せた指の先に、白い液体が消えていきます。その後、その指を噛もうとしましたが、かたくて噛み切れません。そのまま足と同じ様に、ごみ袋に

入れました。

その時彼女の顔をみました。相変らず、静かでおだやかでした。いや、さらに静かに、深くねむっている様で、次第にこの寝かされている部屋の中に、溶け込んでいく様な気がしました。あの高くてふっくらとした鼻の先も、それから、かわいらしく肉のついた下唇も、そのままです。

生きていた時、いたずら心にその鼻の先に思わず嚙みつきたくなった時の様に、その先に嚙みつきました。強く嚙むと、意外に脆く、口の中にその片が転げこみました。嚙むと、シャリシャリと軟骨の音がしました。味は特にありません。ナイフでそいで、もう少し喰べた時、下唇も喰べたくなり、ナイフでそのまわりをえぐり取って口に入れましたが、これは堅くて嚙み切れません。焼いて喰べることにしました。他の肉片ののっている皿に入れ、そして冷蔵庫にしまいました。

ついでに、その奥にある舌も喰べたくなり、口を開こうとしましたが、弾があたった時に嚙んだのか、上下の歯の間に、それは堅くはさまっており、なかなか取れません。そこで指でその先をつかんで、ひっぱり出し、ナイフで切りとりました。少し口の中に入れて嚙みましたが、やはり堅くて嚙み切れません。その時、鏡で自分の顔を写し出すと、舌が舌にからみ合っています。口を閉じると、彼女の舌が、私の口からのぞいています。やっと皮が嚙み切れたのか、その下のやわらかい肉が口の中に広がっていきました。

最後の目玉も喰べようと思い、えぐりとろうとしましたが、これが意外に難しく、ナイ

フの先は、瞼に刺さろうとしません。最も弱いと思っていた部分が、最も強に抵抗します。涙の一滴が、その時あふれてきました。

顔をみると、鼻の先がなく、唇が取れたせいか、歯のむき出した顔は、はや骸骨を思わせます。腐敗しはじめると、こうなっていくのでしょうか……軽い恐怖が身内を走りましたが、その上の目は、ナイフの先をのがれて、相変らず、美しい色と形を成していました。彼女はやはりそこにまだいるのです。

ごみ袋に入れて、すべてを捨てる為には、出来る丈それを軽くしなければなりません。そこで、内臓も出来る丈出してしまわねばならないと感じました。へその下にナイフの刃をあてて強く押すと、ようやく皮は切れ、少しの皮下脂肪があらわれた後、肉の赤身が見えました。その二、三片を切りとって皿に盛った後、さらにナイフの刃を沈ませると、きれいに透き通った内臓がはじめてあらわれました。腸であろう、くるくると巻かれたもの、そしてその下にあるねずみ色の袋は、股の下に深くはまり込んでいます。おそらく膀胱でしょう。強いにおいがして、つかみ出すと、その先に便の小さな先がみえました。そしてすぐにぺしゃんとしぼんだところをみると、その中にはいっていた尿が一辺に出てしまったものと思われます。膀胱の横にある黄色いものは、卵巣でしょう、卵の味がするかも知れません。その奥の袋は子宮で、今はすっかり切りとられた股の性器の辺りに手をつっこんで動かすと、その袋が動きます。ここで将来、ある男のものが入りこみ、そして生命の不思議によって、彼女の一部分と結合し、新しい生命の生まれることになったかも知

れません。その将来の、彼女のいとなみは、しかし今、完全に切り裂かれ、失なわれたのです。私のしてしまった事の意味を考えました。

内臓をひき出すべく、手をその股の奥につっ込み、つかみ出すと、おそらく小腸でしょう、次から次へひもの様につながって、果てしなく続く様な気がしました。その内、手がぴりぴりしみてきました。おそらく、胃袋や、腸にある液体のせいでしょう。こんなにも、腹わたを引っかきまわされても、彼女は静かに、やすらかにねむっています。死とは、それ程強固に、そしておだやかなものなのでしょうか。

最後に、おそらくこれが一番大変であろう、その首を切り落とす時が来ました。覚悟して、首のつけ根に手をあて、まず他の部分と同じ様に、まわりの肉を切り、骨が見えたと思ったところへ、まず電気ノコギリをあてました。やはり、かん高いものすごい音がしますが、音だけで切れません。みると切り口にきれいな赤身の肉がでています。その二、三片をつまみ取って口に運ぶと、やわらかで繊細な味がしました。

あの細いネックレスも、そのままそこにかかっています。例のナタを手にして、そこへ思い切り振りおろしました。やや長方形の、分厚い歯が、その首に打ちあたる時、ギロチンにかけられた自分の首を想いました。やがてこうなるかも知れないとその時覚悟したのです。

首の骨はしかし意外にもろかったのです。あるいは銃弾のあたった時、くだかれたのでしょうか、ボロボロと骨はくずれていく様で、三、四回の打撃で、あっけなくそれは胴体

からはずれました。そして首がとれた時、その彼女の身体は、はじめてまったくの肉塊になった様な気がしました。

無論今までもその肉塊をかじっていたのですが、しかしどこかそこには、彼女の人格がつきまとっていました。そしてそれは、その首から上にあった様な気がします。人間の顔のもっている不思議な力を思いました。

髪をつかみ、手にその首をぶら下げた時、はじめて自分が、〝人喰い〟だという気がしました。そのまま首を高くかかげて、歯を剝き出し、そう叫びたい衝動にかられました。しかしそのまま、ごみ袋にそれもほおり込みました。こうして私の前には、手も足もない、そして首も今はない女の胴体が、ぶざまにころがっているのでした。

これを持ち上げて、ごみ袋に入れるのは一苦労でした。完全に一つの袋には入りませんので、半分を一つに、残りの半分をもう一つの袋に入れて何とか収まりましたが、しかしどうしても持ち上がりません。仕方なく汚れたシーツを持ち出して、ぐるりと包み込み、満身の力をこめて持ち上げようとしました。しかし体力を使い果たした身体には無理で、ひととき、ベッドに転がり込みました。しかし頭の中はあつく、いろいろの思いが、次々に、トルコ絨毯の柄の様に頭に浮かんでは消えていきます。とてもそのままじっとしていることは出来ません。ベッドからおり、ふらふらしながら、ふたたびこの最後の仕事にとりかかりました。息をつめ、思い切り持ち上げます。そして持ち上げたところ、出来る丈近くに持っていったカバンの中にそれを入れようというのです。ほとんど不可能なこの作

業を、それこそ死体と死闘をつづけながら、カバンの中に収め、ふたをして、カギをかけ、それをもう一つの足や手の入っているカバンの横に置いた時、やっと一つの大きな仕事がおわったのです。そうして真夜中のしじまの中を、タクシーをよびました。

……

テレビのスイッチをつけ、それから冷蔵庫をあけて、ビニール袋のかぶさっている皿を一つ一つ引き出して、ガラスのテーブルの上に並べました。

「これはお尻、太腿……」

と思い出しながら確認し、それから台所のコンロを温めました。フライパンの上にこびりついている脂肪や肉の断片をけずりおとし、そこに新たに、新しい細かな肉片を並べました。

ジューッと軽く焼いてお皿に盛りました。そして前と同じ様に、芥子と塩、胡椒、それに焼肉のたれを皿の横におき、やはり彼女のパンティーを脇において、時々その匂いをかぎながら、また同時に、雑誌の女性のヌード写真を広げて、尻、太腿の肉片を口に運ぶ度に、この部分を喰べているのだ、今はこの部分を味わっているのだと心に言いきかせました。

しかしなかなかそれは結びつこうとしません。若い女性の肉体は、あくまで若い女性の肉体であり、自分の口に消えていく肉片は、たとえかつて若い女性の肉体の一部分であったにせよ、単なる肉の塊に過ぎません。そしてそれは食肉の味であり、女性の味と想像するにはかなり骨がおれました。

……

この翌日、逮捕される日も、彼女の肉を喰べました。

この時は、彼女がその前にすわり、テープレコーダーにドイツ語の詩をふき込み、そしてその上にうつ伏せに倒れて息をひき取ったその机に、今は細かい肉片となった彼女を皿に並べ、そして、今は皿の上の断片となっている、大きくやわらかなその尻を、彼女がのせていた椅子に腰かけて、やはり前日と同じ様に塩、胡椒、芥子、焼肉のタレを用意してから、一片ずつフライパンで焼いて口に入れ、ゆっくり味わいました。

肉はさらに味が出てきたのか、甘く、やわらかくなっていました。

解説

1

本書は佐川一政によって書かれた小説『霧の中』である。

著者について、あえて言葉を重ねる必要はないだろう。佐川一政は一九八一年六月、パリでオランダ人女性を殺害し、被害者の死体を凌辱したうえで、その肉を食べた。事件の詳しい経過については、本書および巻末に付した年譜を参照していただきたい。逮捕された佐川はひとまずサンテ刑務所へ送られた。

彼は、事件当時心神喪失であったという判決を受けたのち、八三年四月以後、ヴィルジュイフ病院内アンリコラン病棟に護送された。現在（同八月）同病棟にて、精神病者として療養の日々を送っている。

食人事件の報道は文字通り、全世界をめぐった。とりわけ、当事者の祖国である日本と、事件の現場であるフランスでは、テレビ、新聞、週刊誌を始めとするあらゆるメディアが動員され、佐川一政についての情報を追った。マス・メディアによる誤った情報と粗雑な解釈は、ともすれば興味本位に走りがちで、事件の真相を曖昧のままに終わらせてしまう結果となった。

「話の特集」編集部は、乱れ飛ぶ流言のなかにあって、事件の真実の姿を、直接、当事者の口から聞き尋ねることができないものか、と当初より考えてきた。古来より、わずかの例外を別とすれば、犯罪事件のさなかにあった者がみずからの意志で記した言葉とは、稀なものとされている。警察権力が当事者を強いて語らせる調書と、直接現場にはいなかった者たちの噂や流言が、犯罪を物語として語り継いできたといえる。その意味で、佐川一政には、いかなる制約、限定もなく思う存分に発言を行ないうる機会が与えられるべきである、と当編集部は考えてきた。この書物は犯罪心理学的に興味深く、また貴重なドキュメントとなるだろう。社会学的観点に立つならば、マス・メディアの作りあげた佐川一政の虚像と、現実の本人の自己認識の差異が問われることになるだろう。

だが、本書刊行の意図は、こうした原因に尽きるものではない。事件の性格そのものに起因している部分をけっして無視してはならない。それはいうまでもない。近親相姦とならんで、いや、今日ではそれ以上に厳粛なタブーとされている人肉嗜食（カニバリズム）の問題である。人

間が同じ種である人間を食物と見なして、その肉を喰らう。このとき問われているのは、万物の霊長たる人間の定義であり、文明の根源にある禁忌であるといえる。道徳とはなにか。欲望とはなにか。人間と動物を境界づける分割とはなにか。人間がこれまで自明のものと見なしてきたヒューマニズムと生命の尊厳とが、本質的な再検討を余儀なくされることになる。

　現実の食人行為が物語られたごく最近の例として〈アンデスの聖餐〉の事件を佐川一政の場合と比較してみよう。七二年冬、飛行機事故でアンデス山中に遭難した乗客たちは、事故死した仲間たちの死体を食糧として生き伸び、奇跡の生還をはたした。この場合、主として論じられたのは、限界状況における人間の自己犠牲と道徳的苦悶であり、宗教的救済の有効性・妥当性であった。生存者たちは法的犯罪を免れており、文明と非文明の境界にありながらも、究極的には〈罪〉を犯さずにすんだ。彼らは英雄として祖国に迎えられたのである。結論からいえば、アンデスの生存者たちは、人間の概念から逸脱することなく、逆にヒューマニズムの神話をいっそう強固なものとすることに貢献したといえる。

　佐川の場合は、これとは別に考えなければいけない。本書を一読すれば瞭然としているのだが、彼にとって食人行為とは、考え抜いたあげくの倫理的決断などではない。もとより強烈に欲望された快楽の行為であったと推測できる。本書の著者は幼少時より食人の妄想にとらえられ、それを禁忌とする現実の社会に対して名状しがたい違和感を抱いていた。ルネの殺害は、事件直後に喧伝されたように、発作的激情のなせる業でも、侮辱され

たことへの怒りに発した復讐でもない。それはむしろ、周到に準備された計画のうえに実行された行為である。本書でも語られているように、事件の当事者にとって、セックスとは食人行為以外の何物でもなく、それは彼のアイデンティティーにおいて深く本質的な部分を占めていた。おそらく、本書を症例報告として、著者の深層心理に踏みこんだ精神分析学者は、性倒錯と文明の禁忌の関係について、貴重な研究をなしうるだろう。それが本書の著者の個人的苦悶を救済すると同時に、人類一般に通ずる欲望の理論の構築に寄与することを、編集部は希望したい。わたしたちの眼の前にあるのは、いかに危険で反社会的であろうとも、文明の境界を飛び越えて、ひとたび自分の欲望を思うがままに開放し、欲望に忠実に物語ろうとした者の言葉なのだ。

　佐川一政を文学的殉難者に仕立てあげることも、彼を公序良俗の名のもとに断罪し、狂人の烙印を押すことも、編集部はきわめて慎重に避けたつもりである。前者は、彼が生涯の前半においてかくも深く体験した、自己の性癖をめぐる苦悶や孤立を、何事もなかったかのように見過してしまう結果に終わるだろう。後者は、縁日の因果ものの見世物と同次元で本書が読まれることを警戒してのことである。わたしたちは、あえて超越的な道徳的権威やヒューマニズムの信仰を背景として、佐川一政を一方的に罪人と呼ぼうとは思わない。もちろん、これは非常に微妙な事態であり、誤解されうる可能性に満ちた立場である。かくまでに酸鼻きわまりない、殺人者の手記を刊行するとは、いかに言論が自由であるとはいえ何事か、低俗な商業主義に堕した営為ではないか、という批判も当然予想され

うると思う。

しかし、読者によりよく理解していただくために、一つの例を示したい。小説家の武田泰淳が戯曲『ひかりごけ』結末部に掲げた問いである。『ひかりごけ』は、難破した船中にあって次々と船員たちの死体の肉を喰らい、一人生き伸びた船長を主人公としている。さまざまな道徳的苦悶と生命の危機とを経たのち、船長は救出される。彼は食人行為が原因で法廷に呼び出される。彼の非人道的行為を糾弾する検事にむかって、船長は従順に振舞い、死刑にすら服する覚悟があるとものの静かに語る。だが、と彼は一方で確信している。なるほど、地上の人間の法律の次元で自分は一応裁定されるだろう。しかし、何人も人間として自分を裁くことは不可能である。唯一人自分に究極的な刑を宣告できる資格をもった者がいるとすれば、それは自分同様に人肉を嗜んだ者か、でなければ人肉として食べられてしまった者であろうと。

わたしたちがひとまず道徳的非難（あるいは賞賛）を離れた地点から、佐川一政のメッセージを一字一句ありのままここに提示しようと考えたのも、『ひかりごけ』の船長の問いを受けてのことと理解していただければ、幸いである。いったい人はいかなる道徳的責任において、食人行為を攻撃し、食人体験者を法的犯罪者として処罰したり、精神病者として人格的に排除監禁するのか。人間の法律はすべての人間の行為を、あらゆる次元において統轄し、秩序づけることが可能なのか。本書はこうした哲学的問題にも多分に抵触することだろう。

2

本書が考想され、執筆され、こうして刊行されるまでの経過を簡潔に記しておきたい。『霧の中』は、佐川一政が事件ののち、サンテ刑務所に収容された直後から書き始められた。それはなによりもまず「内的な衝動」に応じたものであった、と著者本人によって説明されている。原稿はひとまず小型のノートにびっしりと極小の文字で執筆され、次にコクヨ判ケー35の四百字詰原稿用紙に縦書きで書き直された。

「話の特集」編集部は、著者と個人的接触を続け、たび重なる文通ののち、自伝的小説原稿の存在を知らされた。その出版を承諾するや、徐々に原稿がサンテ刑務所より東京・原宿にある当編集部宛てに到着した。

もっとも、この間の事情については、著者本人の手になる経過報告がここに存在している。以下に引用する文章は、本稿の一部とともに、「『霧の中』と『佐川君からの手紙』」と題して送られてきたものである。

> 「……佐川君がわたしの手紙をサンテで読み、その返答として、今、一つの小説を書きつづけていることが書かれてある。それは『霧の中』という題名であった。」（唐十郎『佐川君からの手紙』河出書房新社・二八頁）

より正確には、私は『霧の中』を、サンテ刑務所に着いてすぐに書きはじめました。もちろんその時は、発表の意図も明確にはなく、ただ内的な衝動に従って、書いていた丈です。しかし遅々として筆はすすみません。彼女の思い出は無論、過去がありありと蘇えってきて、しばしば筆を置かねばならなかったのです。確か十一月の半ば頃だったと思います。知人の手紙の中に、唐十郎氏が私の事件を映画化する意図がある、と書かれてありました。屈折した感情の中であえいでいた私に、それは自己表現の一つの突破口の様に思われ、直ちに唐氏に宛てて、手紙を送りました。その内容は、単行本『佐川君からの手紙』の〝あとがき〟に、若干の伏字（＊）を伴って、全文が引用されています。しかし唐氏からはすぐに返事は来ず、あるいは、自分丈のはかない幻想だったかと思われ、また、自己表現といっても、それはあくまで唐氏の美的意識を通したもので、私の事件は単に材料を提供するに過ぎないのだ、あの様なことを唐氏に頼んだのは筋違いであり、僭越だったのではないかという気がしていました。そして三月の中頃、私はもう一度唐氏に宛てて手紙を書き、この私の気持と共に、私が抱くに到ったこの「食人衝動」について、日本人の心にぬきがたくある（従って私の中にも歴然とある）白人志向をからませて、かなり詳しく書き述べました。ほどなく、その返事が唐氏から届き、それには、シナリオライターの深尾道典氏を伴ってパリのあなたに会いに行きたいからと、予審判事への面会許可依頼書も同封されていました。と同時に、その手紙には「どうやって彼女の肉体を食べたのか」という質問がありました。それに答える為、私はこの時はじめて『霧の中』の存在を彼に知らせ、同時にその抜粋（つまり人肉嗜食の場面）を一部修正しながら、書き移しはじめたのです。しかしこれも、過去の想い出と戦いながら筆は思う様にすすまず、その間、唐氏のこちらに来る時期になりました。私はなるべく早く、彼の手元に届く様にと、弁護士を通してその原稿を送ろうとしたのですが、これは拒絶されました。唐氏は、予審判事がヴァカンスに発った為、面会許可をとることは出来ず、会うことは叶いませんでした。唐氏の滞仏中は、毎日の如く、時には二、三通の葉書やら手紙が舞い込んできましたが、一度帰国すると、彼からの音信はふっつり途絶え、手紙を送っても、何の返事もありません。その頃、両親も渡仏しており、唐氏が面会許可を依頼したことを、弁護士からきかされ、驚愕していましたので、弁護士のはからいによって、彼と私との文通が絶たれたものと思っていました。（事実は、唐氏は、私の手紙をすべて受け取っていた様です）唐氏の帰国から二ケ月程した九月の半ば、一人の看守の個人的な怨恨から、ミタール（刑務所の刑務所）に入れられていた私の元に、唐氏の手紙が届きました。今回は、K・オハラという女性のことについておききしたい、佐川君は彼女を御存じでしょうか？　という、謎の様な文面の手紙でした。同時に、今、パリ滞在中のメモをまとめているところだとあり、いよいよ映画製作も本格化してきたかと思いました。しかし、彼女の御両親は無論、私の両親のことも思い、映画公開は目下のところ控えてほしい、私の手紙の内容を公表することは無論、その存在を、第三者に知らしめることは呉々もつつしんでほしい旨の手紙を、ミタールか

ら出た後に出しました。しかし、ほどなく、彼からあらたに手紙がきて、あなたの小説を書いた、手紙も大いに活用させてもらった、そして最後に、あなたが窮地に陥いらない様に、気はつかったつもりです、とありました。彼が小説化を企てていたのが、パリに来る前からだと知ったのは、単行本『佐川君からの手紙』の、彼自身による〝あとがき〟を読んだ時でした。小説が芥川賞を受賞した為に、フランスの新聞やラジオでも大大的に報道され、あたかも、私が彼に小説の材料を提供したかの如く語られました。その為に、弁護士は色をなして怒り、ルネのお兄さんもR・T・Lというラジオ局から、自らマイクの前に立って、

「私達はこれまで沈黙を守ってきたが、もはや黙っていることは出来ない。イッセイ・サガワは気狂いではない。その証拠に、日本の作家に材料を提供して、小説を書かせたではないか」と訴えました。正直これは、これまで受けた最大のショックでした。ここに来てから、私の唯一つの願いは、彼女の御両親に何とか、わびの言葉を伝えることだったからです。唐氏は、私の最も内面的な問題にまで、足を踏み込むのかという気がしました。

　私はここで、唐氏の作品の価値を、その劇的想像力にみちびかれた、唐氏独特の美的世界を、云々するつもりは毛頭ありません。ただ、当事者として一言いえることは、その背景にある事件と、彼の小説は、まったく関係がないということです。

　本来私は、『霧の中』を、一冊のまとまったものとして、もっと時間をおいて発表するつもりでした。彼女の御家族の為にも、また私自身の家族にとっても、今は発表すべきでないと思ったからです。単なる事件のルポルタージュにするつもりもありません。しかし、唐氏の作品発表により、これ以上沈黙していては、彼女も含めた事件そのものが、あらぬ形に鋳造され、それがそのまま、後々にまで残ってしまうという強い危惧を感じ、敢えて発表に踏み切ったものです。その為、不十分なところも多々あり、私としては、これはあくまで、後のステップの為の過渡的な産物、その第一稿としたいと思います。尚『霧の中』と題し、一ジャーナリストが、独房に訪ねてくるという架空の枠組を設けたものの、描かれた事象そのものは、記憶の底に鏡をあてて、照らし出したものばかりです。

　最後に、挫折をくり返しながらも、ここまで書きついで来られたのは、一重に「話の特集」編集部のおかげであることを申し添えます。

（＊）伏字の部分に、私は次の様に書きました。「マスコミ関係は無論、この手紙のことは、しばらく唐さんお一人の胸におしまい下さい。」私には何故、唐氏がここを伏字にしなければいけなかったのか、その理由がわかりません。この作品を完全なフィクションとして発表するなら、その様なことは意味がありませんし、事実のことなら、作家として道義的責任に問われる丈です。はじめから、私に黙ってこの作品を発表しようという意図があったなら、何故この様な〝小細工〟をほどこさねばならなかったのか、やは

り唐氏の内にも、いくばくかのうしろめたさがあった為だろうか、背信行為はしたものの、その道義的責任はのがれたかったのか、などと、いろいろ思いめぐらしています。

3

次に、本書の構成について語っておきたい。

『霧の中』を一読された読者はすでにお気付きのことと思うが、この小説はけっして古典主義的な均衡をもって執筆されているわけではない。ある部分はきわめて入念に、微細にわたって書き込まれているかと思えば、別のある部分は簡略に、なおざりな形で触れられているにすぎない、といった印象を与える。事件の過程は細密に描写されているが、逮捕の有様は省略されている。第三章では、次々と女友達の面影が走馬灯のように登場しては消滅してゆくのだが、気を付けて読まないかぎり、登場人物の区別が曖昧になってしまうような書かれ方がされている。こうした不均衡や曖昧な記述は、著者の単なる手法上の未熟にかかっているのか、それとも事件を言葉として語るうえでの本質的な困難に対応するものなのか。以下では、簡単に『霧の中』の執筆の経過について、著者からの解説的書簡を手掛りに簡単に論じ、加えて、佐川一政における書く行為の意義を考えあわせてみたいと思う。その段階で、本書がなぜ事件の当事者による自伝としてではなく、小説という形態をとらなければならなかったのか、という問題が少しずつ解明されていくことになるだ

ろう。

> 『霧の中』は、一ジャーナリストがパリの独房に犯人を訪れる――という設定ではじまり、そのジャーナリストと犯人との会話――主に犯人の言葉によってこの事件を語っていくという形式をとりました。いきなり〝殺害の場〟から、人肉嗜食のデタイユ（細部―引用者註）、そして逮捕までの過程を追ってひとまず終え、独房にかけてある彼女の写真に夕日のあかくもえ上がった瞬間、それまでの、激怒にかられて殺害したという言葉を翻えし、彼女とのめぐり合いから、銃を放つまでの過程を、彼の過去――主に性的記憶を――フラッシュ・バックの手法で重ねながら、語りはじめます。それは、鏡をむかい合わせにおいた時の様に、無限に反映されていきます。人間の記憶というものは、決してクロノロジックなつながりではなく、どこを切ってもヒクヒク動いている、生きた球体の存在として感ずるからです。
>
> ただ、この形式をとると、当然、構成の上で、かなり複雑になり、主に渡仏後のことしか書き込むことが出来ません。本当は、それよりはるか以前より、人喰のPulsion（欲動―引用者註）はあったのであり、その欲情にふりまわされた様々の記憶が、ほとんど無限にあります。それをすべて書き込むつもりで（無論実際には不可能ですが）すすめて行く方法もありますが、そうすればどうしても、前述の作品構成は放棄せねばなりません。また前半の人肉嗜食の場合も、当然ながら、食おうと思ってやりはじめるのと、

殺してから食いたくなるのとでは、その様相にも違いが出てきます。もし先の作品の構成をとるならば、殺してから……ということになり、その描写も一部変えなければならなくなります。細かいことかも知れませんが、その様な問題も残っています。

当初、編集部に到着した手紙によれば、ここに引いたように、人肉嗜食の場面がほとんど冒頭に置かれ、以後、主人公のルネをめぐる回想が挿入されるという構成が考えられていた。だが、この場合、どうしてもルネのみを中心に物語が展開しすぎる嫌いがあり、著者が幼小時より抱いていた食人衝動が十分に語られずに終わってしまうことになる。また、ルネ嗜食の動機付けと描写との間にもいく分かのズレが生じてしまう。このため、作品の構成はやがて大きく変更され、ルネとの出会いから事件までが時間の順序を追って語られ、その間に幼年期よりパリ在住時までの回想が錯綜した順序で挿入される、という形をとることになった。やがて、全体の構成について、アルファベットの順番をふられた予定表が、編集部のもとに到着した。以下に引用する。

＊ジャーナリストの語りによって

A・ジャーナリストが犯人を独房に訪ねて来る。

B・ジャーナリストと犯人との短い会話。

＊犯人の語りによって

C・（激怒という動機を基礎に）殺害から人肉嗜食・死体解体・死体破棄そして逮捕に到るまでの過程。

＊ジャーナリストの語りに返って

D・独房内の簡単な描写（壁にかかっている〝彼女〟の写真など）。

＊ふたたび犯人の語りによって

E・（前述の動機を否定してから）彼女との邂逅。

F・彼女を殺して喰べることを決意してから、その第一の試みの前夜まで。

G・過去の回想に入って、はじめてパリで娼婦を拾った想い出。

H・そこからさらに過去にさかのぼって、日本でドイツ女性を喰べようとして、彼女のアパートにしのびこみ、つかまったこと。

I・ふたたびパリでの娼婦との想い出いくつか（彼女を喰べようと試みた、果たせぬ想い出）。

J・カービン銃を買う。

K・それをつかって何度も娼婦を撃とうとするが、果たせぬ想い出。

L・ジーン・セバーグの死にからんだ妄想。

M・ふたたび娼婦とのむなしい想い出。

N・サン・トロペの浜を彷徨した想い出（食人魂をもって、ヌーディスト海岸の美女達を観賞する）。

O・日本に帰ってから、娼婦を喰べる為に、二日間パリに帰ってきた想い出。

P・日本で友達のフランス人女子学生と正月を共に過ごした想い出（その女学生との、パリでの邂逅を交えて）。

Q・ふたたびパリに帰って、娼婦との想い出（あせりつつ、何度も殺して喰べようとするが、果たせない）。

R・Fの情景にかえって、〝彼女〟の身体に喰いつくまで。

＊ジャーナリストの語りに返って

S・語りおえた犯人の短い描写。

＊筆者の語りによって

T・ジャーナリストが独房を去っていく描写（最後に、この様に、外部の人間と長く語りあうことも、また独房に訪れてくることも、現実には不可能とことわって、すべては〝霧の中〟にある、としておわらせる）。

ここに刊行された本書は、この予定表を大体の原案として執筆されたものと考えられるが、細部を照合してみるならば、随所に省略と予定外の逸話の挿入が見られる。ちなみに、本書は六章に区分されているが、章区分は著者からの原稿の束が送られてくるたびごとに編集部がつけたものである。それは読者の読みやすさを考えたうえでの配慮でもあったが、一つには、著者本人の手による、作品の部分わけの痕跡を保存しておきたかったためでもある。著者は語りが切りのよいところで一段落するたびごとに、原稿を送ってきたのである。

第一章は、前記予定表のA・B・C・Dまでを含む。原稿用紙にして七枚から構成されている。

第二章は、Eの前半の四四枚から構成されている。

第三章は、Eの後半の七七枚とF十枚から構成されている。

第四章は、G二枚、H二九枚、Iの断片九枚から構成されている。

第五章は、話者のエクサン・プロヴァンスからアヴィニヨンへむかう紀行的回想の二一枚から構成されている。

第六章は、R四八枚から構成されている。

このように、当初の予定と現実に執筆された原稿では、大きな異同が生じている。S・Tといったエピローグに相当する比較的短い部分は別としても、JからQにいたる女性遍歴の部分が省略され、かわりに本来は存在していなかった南仏旅行の回想部分がIのあとに続いている。全体を通してみるならば明るく、淡い幸福感のただよっているこの部分を前に置くことによって、突然登場してくるRの暗黒小説的部分をより効果的に描こうと意図したのか、それとも単に原稿の欠落が全体の構成を不均衡なものにしているのか。そのいずれが正しいか、判断の分かれるところであろう。

こうした一見構成上の破綻とも見られる部分は、他にも存在している。第三章には、ル

ネが帰宅したあと一人きりになってしまった部屋で主人公が悶々とした妄想に耽ける場面がある。彼の脳裏を、過去に知りあった女友達の幻が、次々と走馬灯のように横切っていく箇所である。だが、この部分はよほど注意深く読み進まないかぎり、登場人物の区別が容易ではない。デンマーク女性、大学院時代のアパートの近所の女性、大学院の級友、ピアニスト志望の女性、父親の会社のパリ支店の女性秘書、パリ大学に留学した日本人女子大生、日本人の婚約者のいるフランス人女性、フランス人女子大生。娼婦を別としても、ざっとこれだけの人物が現われては消えてゆくのだが、その区別が厳密につけられているとは言い難い。いや、むしろ、著者は意図的に人格と人格の差異を曖昧にし、彼女たちを総合して、自分の前に現われた女性一般として括っておきたいと目論んでいるようにさえ思われる。ルネの言葉使いやほんのささいな表情までもが微細に描写されるのに比較して、彼を邪険に取り扱い、何の予告もなく失望と落胆を味わわせた女性たちは、満足な人格すら与えられず、一般化されてしまうと考えてよい。その意味で、第三章における人物関係の錯綜と混乱は、著者の手法的未熟と見るよりも、意図的に準備された混乱であると判断できる。彼女たちは、次々と顔と名前、時間と空間を変えながらも、本質的には同一の存在なのである。

先に引いた予定表に従うかぎり、『霧の中』は未完であるといえる。とはいうものの、それはけっして本書の価値をおとしめるものではない。未完であることは、作家としての佐川一政の未熟を示しているというよりも、彼が抱えこむことになった出来事のとほうもない重大さに応じている。食人の禁忌とその侵犯の問題は、誰もが了承できるように、人類のアイデンティティーを根拠づける問題であり、それに早急に結論を下すことは避けなければならないし、事実また不可能である。第六章まで読み終えた読者は、おそらくは見知らぬ場所へいきなり連れ出されてしまった者のように、一種の当惑と虚脱感めいた感情を体験することであろう。それは同時に、事件の当事者であり著者でもある佐川一政をひとたび襲った感情であるともいえる。佐川一政は、ここに問題を提出した。だが、まだ完全なる解答を導くにはいたっていない。なぜならば、彼が結論を獲得する日とは、人類全体がなんらかの意味で食人の禁忌の謎を解明する日でもあるためである。誤解を恐れずにいうならば、『霧の中』の著者はその極限の行為によって、人類の最先端の瞬間を生きたといえる。したがって、本書が未完結のまま終わっているのは、時間的余裕や著者の力量といった現実の次元の問題ではなく、人間一般にとって、この小説の主題が未完結のままであるという問題として考えなければいけない。言葉を重ねていうならば、本書は食人行為の頂点でいきなり〈中断〉されてしまうがゆえに、より大きく、無気味な衝撃を読む者に与えるであろう。

4

とはいうものの、『霧の中』をめぐる疑問がこれで完全に解決したわけではない。最後

に、もっとも根底にあって重要な問題が残っている。

本書は、なぜ、佐川一政の手記・告白としてではなく、小説という形態をとらなければならなかったのだろうか。もちろん、容易に思いつくのは、実在する人物のプライヴァシーへの配慮のことである（本書では、両親・親戚をめぐる記述は避けられており、ごく一部の例外を除けば、一切の固有名詞が省略されている）。とはいうものの、著者がかくも小説であることに拘泥したことの理由は、別に考えてみなければならない。

著者は、編集部に宛てた手紙のなかで、自己表現こそが自分に残された唯一の自己救済の手段であるとしばしば語り、進行中の作品を自分の「吐袋」であるとすら呼んでいる。事件について記述を行なうことは、著者にとっては、心理的な浄化行為であり、治療とも考えられている。

> 誰にでも、自己劇化の本能はある様ですが、私の場合、自分の欲望の方向とその劇化の方向とが殊に微妙にからみ合っている様で、自分自身その辺が実に混沌としており、逆に、再度〝劇化〟することによって、その辺が明らかになる様な気がしています。

自伝の執筆者には、多かれ少なかれ自己を劇化する傾向が存在している、とはよく言われていることである。生涯の終わりにあたって過ぎ去りし日々を安逸に回想する者も、生涯を決定した事件の直後にそれまでの経過を赤裸々に告白する者も、体験した事実をありのままに並列するだけでは、自伝作者となることはできない。自分の生涯を物語として語るためには、そこになんらかの意味で、大きな起承転結の秩序をもちこんだり、いくつかの重大な事件だけに焦点を当てて、全体を短編小説の連続といった構成をとるといった操作を行なうことになる。そのため、近代における自伝は、ややもすれば小説を模倣することになり、語り手は小説の主人公のように振舞うことになる。これを、作者の虚偽として責めてはならない。自伝の主人公も実在した作者の過去の姿そのものではなく、物語ることの論理に組み込まれた、なかばフィクション的な登場人物なのである。それは事実を隠蔽しようとする作者の悪意に起因しているのではなく、むしろ物語の側から強いられた論理的結果といえる。人はかつての自分を語るときに、知らずと過去を完結した時間のかたまりと見なし、自分が現時点において完結し、物語の終点に到達してしまった存在であるかのように錯覚するものである。過去の彼はやみくもに、前後の見通しもなく生きてきた。しかし、その彼を語る現在の自伝作者は、すべてが終わった時点から、一段高いところに立って、過去の自分をまるでなかば他人であるかのように観察する。このとき、強い反省行為のもとに、かつては想像もつかなかった因果関係が発見され、自伝は物語として存在を始めるのである。その主人公がある程度までドラマ化されて描かれることは、いうまでもない。

ながながと一般論を述べたが、著者が自伝的小説と銘打って『霧の中』を執筆していたとき、もっとも編集部を悩ませたのは、そこに記述された内容が事実としてどれほどの信

憑性を獲得しているか、という疑問であった。たとえば、第六章で描かれているルネの死体の解体および凌辱食人行為の描写は、どの程度までに真実であろうか。ひょっとすれば、獄中に監禁された著者が、日夜片時ともわが身を離れぬ妄想に促されて、必要以上に潤色を加えてはしないか、という危惧があった。この点を著者に問いあわせ、あわせて肉体のグロテスクな描写と比喩の使用が、著者のメッセージを誤解させる可能性はないか、と尋ねたところ、次のような解答を得た。

> 私の拙い書きものに対し、誠に適切な御批評をありがとう御座いました。短いコメントながら実に要を得た評で、感服致しました。まず、人肉嗜食の場面が、私の fantasmes（幻想—引用者註）の所産ではないかという御指摘は、胸にこたえました。事実は決して曲げていません。してはいないことをしたという様には書いていません。しかし例えば、彼女の尻の肉を焼き上げ、それに喰らいついた時「最上等の肉の味がした」かどうかは疑問です。ひどくわるいにおいがしたとか、味がしたということはありませんでしたが、ものすごくうまかったという記憶もありません。むしろ味気ない程、味がなく、やっとそれを感じたのは翌日になってから、つまり死体が少し腐敗しはじめてからです。生で喰べた時は、正直うまいと思いましたが、しかしそれとても、例えば首の肉を口に運んだ時、内心、結局どこも同じ味だなあという気がしていました。喰べやすい、喰べにくいということはありますが、とりわけ、太腿や二の腕がおいしかったのかどうか、わかりません。やわらかかったという丈でしょうか……？　これは自己弁護になるかも知れませんが、すべては幻だと思うのです。クレオパトラが美しいと思うのも、恋しい女性がかわいいと思うのも、そこには何らかの先入観（クレオパトラだから美しい）や、恋愛感情があるからで、彼女達について無知の人間が見れば、単なる〝女〟でしょう。ルネの肉だって、第三者が何も知らずに口にすれば、牛肉とも豚肉とも思ったに違いないので、私がそれこそ全身全霊をかけておいしいと思ったのも、恋しい彼女の肉だからに過ぎず、彼女の美しい面影を知っているからに過ぎません。そのものと、彼女のイメージとを、それを食べている時、私は必死になって結びつけようとしていました。そして、その結びついた接点に、自分丈の、幻の王国を築き上げていたのです。つまり、すべては幻で、あるものはただものだけ（それがサルトルの『嘔吐』の木の根かどうか知りませんが）です。それならば、その折の〝事実〟を描こうとすれば、必然的にそれはものを描くことにはならず、〝幻〟の産物を描くことになるのです。少なくともその折は、私はその幻の王国の中で、自らの作り出した幻を見ていたのですから。それ故、結果的にそれは fantasmes の所産と写ったに過ぎぬと思います。
>
> また比喩の卑俗さという御批判も、的を得ていると思います。というのも、他ならぬ私自身それを書きながら感じていたことだからです。とうもろこしとかゴムまりとか……何度書き改めようと思ったことか。しかしその度にこう思ったのです。例えば私が彼女の尻を切り開いて、その分厚い脂肪の層を目の前にした時、若干の驚愕と共に、心の

内に何という言葉を発していたか……それは細かい粒子状の物質という言葉でもなく、硫黄色の脂肪層という言葉でもありません――まさしくそれはとうもろこしだったのであり、そのイメージが敢然と念頭を占めたのです。それならば……たとえその比喩が文学作品としてふさわしくなくとも、それをあえて用いることが、自分の感性に率直なのではないかと思ったのです。クリトリスに嚙みついた時も、伸縮性の物体というより、ゴムの様に伸びたといった方が、余程その時の感覚に忠実だと信じました。その時点で、私はこれを何としても〝文学作品〟に仕立ててやろうという様な腹はきれいにすててしまいました。それよりも何よりも、自分に忠実なドキュメントを書こう、それを一人でも多くの人々の心に伝えよう――それ以外には考えまいと努めました。これが結果的によかったのか、わるかったのか、私にはわかりません。しかし、私の自己表現としては、この様な方法しかなかったと信じています。因みに、小説としての深い考察に欠けるというのもその意味で、的を射ていると思います。自分で読み返しても、いかに感覚のみに頼って書いているかを強く感じます。医学生がもしこれを読めば、おそらく失笑を禁じ得ないでしょうし、まして人間性への深い考察などそこには皆無です。しかし

……これは自分の作品への下手な弁護ではなく言うのですが……まさしくそれこそが、その折の偽りのない私の精神状態であったのです。内側から押し上げてくる激しい情念のとりことなって、知性も意志もかなぐり捨てて、文字通り彼女の肉体をむさぼり喰ったのです。その様を表現するに、下手な人間性への考察など不要だと感じました。無論、

作品世界は、主人公の狭い視野からのみ描かれるものではない以上、これでは小説としての世界は成り立ち得ません。もう一つ高く深い視点がなければ、作品とは言えないことは確かです。それを枠組にすえることが、目下の課題なのです。しかしそれすら、私には正直疑問があります。この作品は（もしそう言えるのならば）私の内の渦まく、あるいは渦まいていた感性だけで書いてみようという気がしています。それには、それを裏切る表現、言葉づかい――すなわち私でないもの――は、それがいかに魅力ある、あるいは含蓄ある高い表現であっても、極力排さねばなりません。まさしくそれが私の感性の所産だと言い切れるものでなくてはならないのです。無論、かといって、卑俗な興味本位の〝読み物〟になってしまっては、その本来の意図も崩れてしまうので、その限りに於ては卑俗なものは出来る丈改めていくつもりです。ただ、目下自分が一番心がけていることは、自分の感性に率直になるということです。過去に文学研究なるものにたずさわっていて、最も痛切に感じたことは、ありきたりの感受性を、もってまわった文体や表現で飾りつけ、それをもって文学的と称する態度が、研究なるものの中に頻繁に見られるということでした。私自身もその僻に陥っていたと思います。もちろん言葉が、表現が、感性を呼びさます、ということはあり、その例は、古今の秀れた文学作品の証明するところです。しかし、私にとっては、まず〝感性〟ありで、私にとっての言葉は、それを出来得る限り忠実に再現する手段に他なりません。これにはおそらく多くの異論があると思いますが、それは私のかなり強い信念の一つです。少なくとも、今回

の事件を記述する上では、この方法を取らねば、到底それは成し得ないのです。何故なら、私にとってこれを書くということは、この事件を〝材料〟にして別のなにものかを創り上げるということではなく、そのものを、そのものとして表現し、そうすることによって、自分の行為の意味を引き出すことにあるのです。今、私は街を裸で歩かされている気がしています。それこそ尻の穴の中までのぞかれ、指さされ、笑いものにされています。そんな時、私に出来ることは何か、名誉はおろか、人間としての最低の尊厳すら剝奪されて、その上で私の出来ることは何なのか……ある人はそこで素裸のまま、壇上に立ち、皆に向かって、高邁なる演説をぶつかも知れない。それによっておのれの失った内的名誉を回復し、ひいては〝愚衆〟を、その無明の闇から引き出すこともあり得るかも知れません。しかし私はその代わりに、素裸の自分を、さらに裸にして、その裸の感性を、皆の前にたたきつけたいと思うのです。私のあるがままの姿を公衆の眼前にさらし、ずたずたに引き裂かれた自己を表現することによって、逆にその自己を再確認したいのです。これも比喩が適切ではありませんが、いわばこの『霧の中』は吐袋の様なものです。たとえそれをのぞいて、人が顔をそむけ、地面にたたきつけようと、私の感性がその中に忠実に表現されていれば、私の目的は達せられたことになります。無論、それには、その感性が本物でなくてはなりません。それがもし万一まやかしであったならば——その時こそ、私の破滅すべき時でしょう。

長い引用になったが、著者がこの作品をいかに考えているかを知るにあたり、重要な部分であると考えられるので、そのまま引いた。

ちなみに、著者は少年時代より小説家となることを夢見てきた。小学校卒業記念文集には「ぼくの将来」なる一文が寄せられている（年譜参照）。そこには幼ない記述ながらも、小説家として世に出ることの期待と野心が十三歳の少年の手によって書かれている。中学生時代に『悪夢』『鮫と人魚』といった短編の習作や、供犠を主題とした漫画が書かれたことは、本書第四章のすぐれて語るところである。この時点ではやくも女性への人肉嗜食的妄想と書く行為が密接に重なりあっていたという事実は、注目に値する。また、ルネの事件に先立つ娼婦との交渉のさなかにあっても、娼婦を殺して食べる妄想を描いた短編の試みがあったことを、編集部は書簡で知らされた。『銃の先』と題されたこの作品は、残念ながら事件直後の混乱に紛れて失われてしまった。ともあれ、佐川にあっては、小説家たらんとする夢と女性嗜食の夢は不可分であり、渾然と重なりあっていたといえる。

フランスの哲学者ミッシェル・フーコーは、前世紀初頭に自分の家族を惨殺したピエール・リヴィエールなる青年の手記を論じたさいに、**auteur** というフランス語が「犯人」という意味と「著者」という意味の両方を兼ね備えていることを指摘している（『ピエール・リヴィエールの犯罪——狂気と理性』岸田秀・久米博訳・河出書房新社・二一二頁）。同じことは、佐川一政においても指摘できるだろう。彼もまた「犯人」であり「著者」であった。彼は事件を生き、そして事件を語り直すことで、もう一度事件をわが身にたぐり寄

せ、生き直したのである。

『霧の中』は当初、小さな一冊のノートに細小の文字で記された。そのノートは奇しくも、はじめてルネを見かけたサンシェ分校のゼミナールにおいて著者が携帯していたものであり、その冒頭にはルネの顔のデッサンが描かれていた（本書十六頁参照）。佐川は期せずして、事件の前後を通じ、一冊のノートにルネの面影を刻みこもうとしたといえる。このことは、食人行為と書く行為が本質的には同じ時間においてなされたということを教えてくれる。犯罪のあとにその回想が書かれたのでもなく、犯罪を予告するために夢想が記されたのでもない。両者はともに平行して、深いところで融けあいながら実行されたのである。佐川にとって、食人行為を物語ることは、行為の外側にあることでも、行為を超越した地点からの内省でもない。ルネの死体の解体を微細にわたって記すことは、死体の解体という行為を構成し、完了させるためにも必然的なことであった、と考えられる。先に引いた長い手紙から編集部が読み取ったのは、そのような認識であった。

5

付録として本書に収録された佐川一政の論文『川端康成　日本と西洋との間――ある文学創造の軌跡』Kawabata Yasunari entre le Japon et l'Occident : Etapes d'une Création Litteraire について、簡単に解説を施しておきたい。これは、七九年にインスブルックで開催された第九回国際比較文学学会において、口頭で発表されたものである。原文は端正なフランス語で書かれており、八二年にインスブルック大学より刊行された。本書が原本としたのは、その抜刷である。

佐川はパリ大学東洋語学校で川端康成と今世紀のヨーロッパ前衛文学の比較を、修士論文としてとりあげた。七九年に執筆された当論文は、その原型をなしているといえる。彼が達しえた学問的水準を理解するためにも、いかにして彼が川端文学に魅惑されたかを知るためにも、編集部は付録としてこの論文を訳出し、本書に収録する方針をとった。

『川端康成　日本と西洋の間』は、川端の処女作である『十六歳の日記』に始まり、晩年の『眠れる美女』にいたるまでを、年代順にたどり、「日本の魂（アーム）をすぐれてとらえている」と通常考えられている川端文学が、いかに同時代のヨーロッパ文学から影響を受けたかを解明した論文である。ジェイムズ・ジョイスの内的独白の手法やシュルレアリスム的純粋表現といった、新鮮で前衛的な知覚法が日本固有の現実を対象としたとき、そこに新しい美学が生じた。だが、敗戦後の川端は対象としての日本との距離を捨て、その深奥に同一化をはたそうと企てた。そのため、彼は手法と意図の間にギャップを招き、この分裂が作者の自己破滅へと通じた。佐川論文を要約してみると、このようになるだろう。

とりわけ興味深いのは、川端の肉体描写について、論者が執拗な分析を重ねていることである。『禽獣』では人間と動物が同一平面上にある存在として語られている。名作の誉高い『雪国』では、実のところ女性は「きわめて美しい獣」であるかのように描かれる。

通常の人間性を越えた、怜悧で醒めきった視線がこうした作品を構成している。『十六歳の日記』では「残酷さが頂点に達するや、ちょうど不意の感情が炸裂するようにして、抒情が噴出する。」そして、この処女作から、オスカー・ワイルドの『サロメ』の頽廃美に比較された『眠れる美女』まで、〈冷たい視線〉こそが川端文学の本質をなしているのだ、と著者は結論を下している。

こうした観点は翌年の修士論文『小説家の眼差—川端康成と二十世紀西洋前衛文学』において、より深く彫琢された。この論文の巻末には、付録として、衣笠貞之助が川端から示唆を受けて演出した『狂った一頁』なる映画作品の分析にあてられている。川端論は、また、「国文学　研究と解釈」八一年四月号に掲載された座談会『川端康成におけるエロティシズム』においても、展開されている。『眠れる美女』の仏訳をめぐる佐川の発言を、以下に引いておきたい。

（『眠れる美女』の翻訳は）フランスではかなり広範囲の読者をつかんだと聞いています。事実ここから川端専門の研究者まであらわれた程です。また、ソルボンヌ比較文学科の昨年の一年生の授業でもこの翻訳がテキストに選ばれました。その場に二、三回立会ったのですが、若い学生が非常に興奮してそれを聞いているのです。どうしてそれほど強くひきつけるのかと考えたのですが、やはり、それはこの作品から発散する独特のエロティシズムの匂いに強い衝撃をうけるのではないかと思いました。現に、この翻訳者御自身に直接お伺いしたところ、やはり強いショックを受けたとおっしゃっておられました。なぜかというと、それがあまりにも日本的なもの、日本独特なものだったからということです。ただ、私個人としては、ここに展開する非人間的な美の世界はむしろ（何々的というのはよくないのですが）西欧的なものではないかと思ってきているんです。ことにヨーロッパの世紀末的な耽美主義の芸術を連想してしまうのです。少くともこれは川端的であって、特に日本的とはいえないのではないかと思います。何故ならわれわれ日本人にしてもやはりこの作品には非常に強い衝撃をうけるからです。皮肉な見方をすればフランス人にこのタイプのエロティシズムが本質的に好まれるから多くのフランス人に読まれるとも言えるのではないでしょうか。（これは世紀末の作家でも、耽美主義の画家でもないので）ちょっと唐突な例になりますがフランスの画家クールべの作品にこのような（画集を示しながら）「眠り」という作品があります。これは二人の一糸まとわぬ〝眠れる美女〟、白い肌の娘と浅黒い肌の娘が抱き合ってねむっている大変エロティックなテーマを扱ったものなんですけれども、むろん、このような場面が直接川端の『眠れる美女』に出てくる訳ではないのですが、しかし、最後の方にある白い肌の娘と黒い肌の娘の描写には、何かこれを彷彿とさせるものがあると思います。ところでクールべという人は女性の肉体を見る目がキャニバリストのそれだと皮肉られたという訳です。つまり、女性を肉の塊〝もの〟として見る、その冷やかさ、冷たさをいうのです。この絵でもこれほどエロティックな場面を展開しながら、その背後にある静物の描

> き方などぞっとするほど冷たい。これはちょっと日本にはないのではないでしょうか。日本の作家の目はもっとうるんでいると思います。そしてここに、川端の、あの凝視する視線が見えて仕方ないのです。

この発言を受けて、『霧の中』のとりわけ第六章における、ルネの死体の描写には、川端の手法が影を落としているのではないか、と編集部が書面で問うたところ、次の返答を受けた。

> 僕が彼女を解体していく心理は、川端の作品にみられる〝非情の目〟に通じるのでは？ ということを書かれておられましたが、僕にとってはむしろ〝通常の〟人間心理以外の〝情熱〟に身をまかせた、あるいは、まかせようとした結果であり、川端の様な冷やかな、透視するかの如くの視線は、僕の性格の上でも、相容れることの出来ぬものだと感じています。その過程に於て、時にグロテスクな自分の行為がふいに立ちあらわれてきたり、また彼女の生きていた時のやさしさが彷彿としてくる折など、あるいは単に生理的な嘔吐感を感じた時など、自分の内部に育くんできた幻の中にすべてを緩和させようと試みていました。それのくり返しによって、あたかも外見だけは、まるで情を知らぬ鬼の様な心理に化身していったのでしょう。因みに、川端に、僕の様な心理に通じるもの、つまりカニバリズム的要素があるかということですが、僕ははっきりナイと答えたいと思います。確かに『死体紹介人』などには、若い女性の骨に、とりの骨をみたてようとしたり、『片腕』の女性の肉体の一部から〝生命〟を吸いとろうとして、それに唇をつけたりしますが『眠れる美女』をみても、決して対象の女性の身体の皮膚の下まで犯して、その美をすいとろうとはしていません。それには、川端はあまりに冷たすぎるのです。僕の様に、それだけ女性から自己を切り離すことが出来ないと、その女性の身体を自らの身体の内にとり込んで味わおうとする、もっとchaud（熱い―引用者註）な情念が残るのです。僕は自分の行為を〝非情〟のものと思うどころか、あまりにセンチメンタルな、つまりは〝あまりに人間的な〟行為だと思っています。

長い引用が続いたが、事件の前と後で語られた川端への言及を引いた。著者は編集部への手紙のなかで、しばしば未来の執筆計画について、言葉を重ねている。川端康成を主題とする博士論文完成の夢は挫折したが、人肉嗜食に関する長大な論文をものしたいという。「人類史（特に犯罪史）を通して、過去にどの様なカニバリズムが存在したか、あるいは事実だけではなく、小説・絵画などの芸術作品に於て、それがどの様に扱われてきたのか、それを出来る丈多く調べ上げ、まずあたろう限り主観を排してそれを仔細に記述し、それから私なりのコメントと私がどう反応していったかを、一つ一つ書き加えていくという形をとります。それを書くという行為が、他ならぬ私の行為そのものに光をあてることになり、つまりは自己確認につながります。これは私にとってはきわめて重大な問題

ですので、これ丈は実現させたいと思っています。また、カニバリズムの問題を扱った作品も書いてみたいと思っており、そのいくつかの案もあります」

　編集部は、佐川による、深い自己洞察を含んだ食人論が遠くない日に完成することを願う者である。おそらく、それは本書『霧の中』同様に、人間がなしえた極限の行為の記録として、貴重かつ真摯な書物となるだろう。重ねて記しておきたいが『霧の中』は未完の作品である。しかし、それは著者の怠惰や非力を原因としているのではない。あくまで事件そのものが、佐川を含めたわたしたち全員に、困難な問いをつきつけているところから来ている。

　言葉を換えていうならば、これは永遠に完成を欠いた物語かもしれない。事件がパリで起こってから、すでに二年以上が経過した。しかしながら、食人の禁忌をめぐる問題は太古の昔より現代まで、解き明かされたためしがないといえる。その意味で『霧の中』は、水の泡のごとくに現われて消えていく現代の書物のなかでも、不朽の意義をになうものである、と編集部は信じている。これは永遠に呪われた書物である。

　最後に、佐川一政の名を用いて、著者の書簡を許可なく引用し使用した試みが、わが国のジャーナリズム界にあって一度ならず存在した。著者みずからの手による本書成立の文章（一七九頁以降）を読まれた方にはもはや説明の必要はないと思うが、そうした試みは（コリーヌ・ブレによるインタビューを除けば）すべて佐川一政の意志に背き、彼の信頼関係を裏切ることによって行なわれたものである。したがって、本書が現在のところ、佐

川本人の意志と希望によって発表された唯一の彼の文章である。編集部は、章分けと改行、および明らかな誤字を除けば、原稿の一切を変更しなかった。また、一行たりとも削除せず、著者の主張をあるがままに再現することに腐心した。本書を刊行するにあたって、この事実だけは確認しておきたいと思う次第である。

一九八三年八月一日

編集部

佐川一政年譜

一九四九・四・二六　兵庫県神戸市にて佐川明と登美子の長男として出生。未熟児。生まれた時より弱く、二十歳までもたないと言われた。両親の厚い愛情に囲まれて育つ。父親明氏は東京商大卒、伊藤忠商事入社後、兵卒として渡満、シベリア抑留を体験する。登美子夫人は実業家佐川与一の娘で、神戸第一高女出の才媛。明氏は佐川家の婿養子で一政誕生当時三十四歳。

一九五〇（一歳）弟誕生。やがて一家は鎌倉・材木座に移転。「三つか四つの頃、弟と共に釜に入れられ、茹られている夢をみました。」（＊）（以下、＊印は本書より引用）

一九五六（七歳）聖ミカエル学園に一年遅れで入学。弟と同級。食人をめぐる素朴な夢想。「『どうして人の肉を喰べてはいけないの？先生』と、無邪気に、女の先生にきいている小学校一年生の自分の姿がうかんできます。」（＊）この間の事情は本書に詳しい。やがて、食人の空想の対象は「女の子に、そのお尻に」限定されることになる。

一九六〇（十一歳）五年生の三学期に鎌倉市立御成小学校へ転校。児童版世界文学全集に親しむ。とりわけシャルル・ペローの童話には深い感銘を与えられ、『眠りの森の美女』の後半の人喰い鬼の物語は「ほとんど暗記してしまう程くり返して読みました。」（＊）

　卒業記念文集に記された「ぼくの将来」なる作文は、小説家としての人生の希望に満ちたものである。「ぼくの将来、理想とする所は、小説家、又は画家になりたい。それも、ただの何の意味もない小説や、絵ではなくて、人間ひとりひとりの心に、明かるい光を投げかけ、人生の生き方というものを、教えるようなものを作りたい。小説なら、小説の文章一行一行が、生命のある文章であり、絵であれば、人物をかいたとすると、その人物の心のうちまでもさとしてしまうものである。それには、やはり、自分も、人格者でなければいけない。人生の生き方を、ほんとうに知った人でなければいけない。人生を実際に歩んで、その経験を味わった人でなければいけない。（……）」

一九六二（十三歳）市立御成中学へ。あいかわらずの虚弱体質。社会科の授業でクノッソスの神殿での若い処女の犠牲の話を教えられ、印象づけられる。ノートに『悪夢』『鮫と人魚』といった短編、あるいは漫画を試作。

一九六五（十六歳）父親、伊藤忠より取引先の栗田工業へ出向、専務となる。

　神奈川県立鎌倉高校入学。電車通学で十五分の距離であったが、しばしば母親による自家用車での送迎を受ける。新聞部入部。武者小路実篤を何の紹介状ももたず突然訪問し、気に入られて、文学談議を交したこともあった。この頃、田坂具隆監督『鮫』の紹介記事をたまたま週刊誌で読む。また食人衝動に悩み、電話帳で精神科医の番号を調べ、試みにかけるが、すげなく断わられた。

一九六九（二十歳）和光大学人文学部へ推薦入学。英文学コースを選択。小田急線鶴川駅より徒歩二十分の通学を続ける。小田急線・藤沢－町田間のダイヤ編成に抗議して朝日新聞に投書。一家は世田谷区梅ケ丘に移転。

一九七一（二二歳）このころ、初恋の女性にめぐり合う。

一九七二（二三歳）近くのアパートに住むドイツ女性（二五歳）を、食人の妄想に促されるままに襲う。「家宅侵入・強姦未遂」（＊）で捕えられ、一週間勾留される。事件は示談で解決した。脳波検査を受ける。同年、父親は経営困難の栗田工業を再建し、社長に就任。

一九七三（二四歳）和光大学卒業。卒業論文はシェイクスピアの『テンペスト』を論じ、工藤敏治教授の指導を受けた。関西大学大学院の聴講生となり、先の女性の近くにアパート

を借りる。この年はじめてトルコ風呂の女性の手によって、童貞を捨てた。

一九七四（二五歳）関西学院大学大学院に進む。矢本貞幹、中条和夫両教授に指導を受く。

一九七六（二七歳）シェイクスピアの『テンペスト』を主題とする修士論文を完成。ただし博士課程への進学試験には落第。東京に戻り、アテネ・フランセでフランス語を学ぶ。

一九七七（二八歳）四月、はじめてパリの地を踏む。コメルス・ホテルにひとまず落ち着き、さらに十六区のロンシャン街へ移る。アリアンス・フランセーズでフランス語に磨きをかける。

パリ第九大学東洋語学校日本語学科（ドフィーヌ分校）に籍を置く。F嬢と知りあう。早川雅水講師のゼミナールで歌舞伎『四谷怪談』についてレポートを書く。（のちに早川は「佐川一政・悲劇的な正気」なる一文を「文藝春秋」八一年九月号に発表。「かつての教え子への批判なのか、中傷なのか」と憤慨した一政はただちに反論を執筆。しかしそれは「文藝春秋」には掲載されず、本人の意志に背いて「週刊文春」八三年四月二一日号に発表された。）

一九七八（二九歳）ルヴァロア・ペレの銃器店でライフルを購入。

一九七九（三十歳）インスブルックで開催された国際比較文学学会の第四部小部会「小説の進化」部門にて、『川端康成　日本と西洋との間——ある文学創造の軌跡』を発表し、好評を受ける。ヴィクトル・ユゴー広場周辺を徘徊する一娼婦となじみになり、しばしば自室に呼びよせる（＊）。

一九八〇（三一歳）十月、東洋語学校修士課程を終了。論文は『小説家の視線——川端康成の初期作品群と二十世紀ヨーロッパ前衛文学』。同時にパリ第三大学東洋文学科博士課程に進学（サンシェ分校）。ひとたび帰国。室蘭に新設予定の短期大学文芸科で教えることが内定していたが、大学側の希望により、

博士課程第一目をおえるために、パリ再訪を決意。帰国中に雑誌「国文学　解釈と研究」八一年四月号のための座談会『川端康成におけるエロティシズム』に出席。出席者は他に武田勝彦（早稲田大学教授）、ハイメ・フェルナンデス（上智大学教授）、ミシェル・ブルジョー（国際会議通訳連盟員）。

一九八一（三二歳）二月、ふたたび渡仏。四月より十六区エルランジェ街十のアパルトマンの二階を借りる。1DKで家賃は千二百フラン（約五万四千円）。仕送りは月額にして四千〜五千フラン。「中央公論」に『間違いだらけのフランス認識』なる一文を投書、七月号に掲載される。

五月、オランダ人女子留学生ルネ・ハルテヴェルトとゼミナール教室で知りあう。ルネは五六年四月エムステッド生まれ。父親は多国籍企業の社長。ライデン大学を卒業後、八〇年十月よりパリに留学し、ボナパルト街の屋根裏部屋に「オ・ペール（住み込みアルバイトのお手伝い）」の口を見つけ、下宿していた。以下の経過は本書に詳しい。ルネと一政は学校近くのカフェーで級友たちをまじえ、はじめて名乗りあう。

六月一日　ルネを自室に招き、すき焼を二人で食べる。歓談。

六月九日　かねてから準備しておいた消音装置付二二口径ライフル銃にて狙いを定めるが、不発。気付かれず未遂に終わる。ルネを送り出したのち庭にむけて銃を撃つと、今度は弾が発射した。

六月十日　母親の誕生日のため、犬の絵葉書を送る。スーパー用の手押し車を無断借用する。

六月十一日　ドイツ語の詩朗読の録音を口実に、再度ルネを自室に招く。約束に少し遅れ三時十分頃到着。しばらくの談話ののち、ルネの朗読が始まり、一政はそれをカセットテープ・レコーダーに録音。三時三十分すぎ頃、ライフル銃にてルネを背後より射撃。ル

ネは即死。死体から時計をはずすと、三時三十四分をさしていた。殺してから警察に言うべきか一瞬迷う。頭部の血をぬぐい、衣服を脱がせて、全裸にする。まず臀部に噛り付いたのち、屍姦。バスルームへ死体を運び込み、解体を始める。写真を撮影するが、フィルムが足りなくなる。ナイフで臀部、乳房、太腿を切り取りフライパンで焼いて夕食とする。五時三十分頃、犯行後初めて外に出る。近くのスーパーマーケットで、スーツケース、ナイフ、ゴミ袋、写真屋でフィルムを購入した。以前よりこの写真屋のマダムは好みのタイプだったが、ルネを殺した後では「それほどでもなかった」。三〇枚ほど撮影する。その後、ルネのハンドバックから鍵をとり、ボナパルト通りのルネのアパートへ行く。何回かルネに出した手紙をとり戻すため。この日の約束も手紙で行っていた。アパートの扉は閉じているといわれアパートには入れぬまま帰宅。論文を友人に見せる約束があり、一時間ほど論文を執筆した。朝方四時に眠りにつく。

六月十二日　朝、八時に起床。バスルームに入る時、ためらわれた。再び、ルネのアパートに行く。朝市で五フランの肉切り包丁を、スーパーで電気ノコギリのモーターを買う。ノコギリ本体は以前より持っていた。のどが渇いたのでカフェーでアイスクリームを注文。一緒についてくる水が飲みたかった。テラスに坐ると、目の前を行きかう若い女性の太腿が気になった。論文をみせるため友人の事務所へ。帰宅し、バスルームのドアをあけると大きな蝿が飛び出て来て驚く。ルネの顔にも蝿が止っているのを目撃。ショックを受けた。ふくらはぎから足の裏にかけて生のまま、陰部周辺をフライパンで焼いて喰べる。自分の耳のうしろが脂でベトベトになっており、人間の肉には随分脂がのっているものだと実感する。電気ノコギリを苦心して操作し、死体解体を企てる。ルネの手を用いてマスターベーション。鼻、唇、舌を口に含む。ルネと、その他の友達と約束していた映画館へ。部屋に戻り、腹部を切開して、内臓を取り出す。「腸はとてもきれいだった」。首を切断。髪の毛を持ち、ルネの首をぶら下げ、「カニバルだ！」と叫びたかった。ゴミ袋にバラバラの死体を入れ、袋に入りきれないので、シーツにもくるんで、スーツケースに詰め込む。その途中、黒澤明の『羅生門』をテレビでつけ放しにしていた。深夜一時すぎ、タクシーを呼び、死体を捨てに行く。途中、パトカーに誰何され、手押し車をスーパーに戻すように言われるが、スーツケースについては問われなかった。結局、捨て場所はみつからず帰宅。

六月十三日　朝、ブーローニュの森を偵察。森の中のレストランで野菜ばかりの食事をした。デパートであらためて、ゴルフ用伸縮自在の荷物車を買う。カバンがにおうのでオーデコロンをまく。自宅前のエルランジェ街にタクシーを呼び。ブーローニュの森にむかう。八時三十分頃、下湖の周囲までスーツケース二台を荷物車に乗せ押して行き、池に捨てようとしたが、疲れたので、荷物車を木にしばりつけ、うとうとする。その後、場所をかえて別の場所に行く。気づくと、散歩中の女性二人がスーツケースにさわっていた。「私のだ、私のだ！」と慌てて叫ぶ。二人が去り、しばらくすると今度は男がスーツケースにさわっていた。「おまえのか？」と聞かれるが、「違う」と答えてしまう。男はスーツケースをあけ、血染めのシーツを発見。警察に通報する。一政は急いでバスに乗って部屋に逃げ帰った。街中が夕陽で真赤だった。その後、イタリア・レストランで食事。食べている内に眠ってしまうほど疲れており、タクシーで帰宅。

六月十四日　アパルトマンの家主の手により、ルネの失踪届と捜索嘆願届がパリ警視庁に出される。ルネの肉を焼いて喰べる。昼すぎ、もう一度ブーローニュの森のカバンを捨

てたところに出かけた後、オペラ座わきのエルデ街大阪食品にタクシーを乗り付ける。すき焼の材料としてしらたきの缶詰と白菜を求め、小切手で支払う。この時、肉はどうかと聞かれ、「肉は家にあります」と答える。シャンゼリゼにルネの持ち物を捨てに行く。夜七時、母親から電話が入る。事件のことが出ていないかと思い、キョスクに新聞を買いに行くが売り切れだった。その後、電気ノコギリ、ナタなどをセーヌ川のポン・ヌフの下に捨てに行く。おりしも祭礼の日で、橋上には夜店が並び、花火が空を彩った。欄干に佇んでいると、ベートーヴェンの第九が流れてきた。家に戻り、ルネの学生証、ドイツ語詩集を焼いた。

六月十五日　朝、東京の母親と電話で話す。昼、死体の一部を焼いて喰べる。東京銀行で金を引き出そうとするが残金なし。逆に借りる。夕方、鞭打ち症治療のため、かかりつけの医者を訪問（一政はパリ滞在中に三度鞭打ち症を体験し、最後のものは事件のわずか数日前であった）。パリ警視庁は犯人を割り出し、午後八時エルランジェ街のアパルトマン入口で帰宅した一政を逮捕する。一政とともに刑事が部屋に入る。部屋にはフライパンに調理済みの、冷蔵庫には生の、肉片が残っており、刑事たちを大いに驚愕させた。

六月十六日　パリ中の新聞はいっせいに事件を報道し、それはただちに日本に伝えられる（時差の関係上、日本では十六日夜のテレヴィジョンでまず字幕放映がなされた）。深夜、一政、留置場へ送られる。

六月十七日　日本の新聞での報道が始まる。

六月十八日　一政、パリ検察庁へ出頭。ルネの遺体は鉛で封印されて、祖国オランダへ戻る。鈴木善幸がパリを訪れる。

六月十九日　父親明氏がパリを訪れ、フィリップ・ルメール弁護士と接触。

六月二十日　ルネの葬式。一政は父親と十五分間の面会を許される。

六月二二日　父親との二度目の面接。一時保釈と博士論文執筆の可能性を尋ね、父親の怒りを受ける。明氏は翌日帰国し、二四日大阪本社で記者会見を行ない、社長辞意を表明。以後、日本では週刊誌、テレビを中心に事件の報道が話題を呼ぶ。

七月　「パリ・マッチ」誌にたまたま独房で隣室のバディアスなる男による、一政との書面インタビューが掲載される。一政は、事件が自分の愛情の告白を嘲弄したルネへの激怒からくる、発作的で偶然の事故であったと語り、食人の事実を否定。

十月　サンテ刑務所にてルネの彫像製作に取りかかる（像は翌年五月に完成し、オランダ人牧師を通してルネの両親に送ろうとするが失敗）。

一九八二（三三歳）二月　ブリュゲール予審判事と二人の刑事が来日。一政の過去の足跡を調査。一政は、事件をぜひ映画化したいという唐十郎の言葉を信じ、文通を始める。唐は河出書房編集者平出隆をともなって、パリを訪れるが、警戒されて一政との面会はかなわず。無断で一政の手紙を引用したうえで、「文芸」十一月号に小説『佐川君からの手紙』を発表。同年下半期の芥川賞を獲得。

九月　一政は懲罰房に三日間入れられる。

十月　精神鑑定が下り、幼児期の病気が原因で、脳に異常が見られ、犯行時には心神耗弱あり、と認められる。

一九八三（三四歳）三月三一日　パリ南西十五キロにあるヴィルジュイフ病院内アンリコラン病棟に、精神病患者として送られる。

四月二四日　「週刊文春」に広岡裕児がルネの胸像と一政から送られた手紙を無断で公開、発表。

六月二五日　コリーヌ・ブレによる一政インタビュー「僕は唐十郎に裏切られたんだ!!」が「プレイボーイ」誌七月号に発表される。

七月十一日　ルネの両親は、心神喪失を理由に不起訴処分となったパリ予審裁判所の決定の取り消しを求めていたが、パリ犯罪控訴院は、予審裁判所を支持。申し立ては却下され、不起訴が確定した。

（編集部）

川端康成　日本と西洋との間――ある文学創造の軌跡

佐川一政

ストックホルムノーベル財団は、一九六八年十月、川端康成〈一八九九―一九七二〉の業績に対してノーベル文学賞を授与した。「川端の言語芸術作品は、もっとも日本の魂（アーム）なるものの、すぐれて特徴においてとらえ、繊細極まりない感性をもって、それを表現した[*1]」というのが、その理由である。

本論文ではこれをうけ、川端の作品を話法上の側面から考察することで、作者の文化的特殊性に関する先の批評が妥当か否かを検討し、さらに川端の新しい側面と、小説の進化の歴史に彼がもたらした寄与とを明らかにしてみたい。

川端の処女作は『十六歳の日記』である。執筆は一九一六年、出版は一九二四年。作者自身の祖父の臨終の姿を描写し、「日記」のかたちで、日常生活を可能な限り簡潔に素描しようとした作品である。

> 骨立つた顔、大方禿げた白髪の頭。わなわなと顫ふ骨と皮との手。ごくごくと一飲みごとに動く、鶴首の咽仏。

この日記の語りはきわめて客観的であり、そこに文体の新しさが生じている。それは日本の作家には稀な[*2]、非常に乾いた文体であって〈冷たい抒情〉とも呼びうるものである。次の文章も良い例である。

> 苦しい息も絶えさうな声と共に、しびんの底には谷川の清水の音。

一九一六年に執筆され、推敲を重ねてたのち、一九四九年に発売された中編『骨拾ひ』では、川端は祖父の火葬を詳しく描写している。ここには前述の客観性がより強くあらわれている。

> 渋紙をもみつぶしたやうな掌の上の白紙に、一寸くらゐの石灰質が幾人かの眼を集めてゐる。

「石灰質」とは、かつて「ごくごくと一飲みごとに」動いていた祖父の咽仏に他ならない。おのれの親族をかくも大胆に物質化する少年川端は、祖父の遺骨を距離を置いた眼で見ていたにちがいない。あらゆる感情を拒絶したこの乾いた眼は、『十六歳の日記』のときよりも、いっそう苛酷なものと変化している。この眼は、おそらく川端自身の悲惨な少年時代の経験から生まれたものであろう。彼は孤児であった。

『骨拾ひ』の文体の新しさは、簡明であると同時に新奇かつ詩的な雰囲気を作り上げたことにある。残酷さが頂点に達するや、ちょうど不意の感情が炸裂するようにして、突然抒情が噴出する。

> やはり祖父も、昨夜の通夜の時に、青い焔の人玉（ひとだま）となつて、神社の屋根から飛び立ち、避病院の部屋を流れ、村の空にいやな臭ひを漂はせて行つたといふことである。

一九二四年、川端は、他の新進作家数名と徒党を組み、既成の文学の因習[*3]に抗って、感性と文体の刷新を主張する文学運動を設立する。その刷新の基本理念となったのは、同時代のフランス人作家ポール・モランの「感覚（サンシビリテ）の論理」であった。

この運動は「新感覚派」とよばれ、一九二七年まで続いた。運動の理論と方法は、第一次大戦後のヨーロッパ前衛文学から影響をうけたものである。この運動からは、マルセル・プルーストやジェームズ・ジョイスの作品を範としてあおぐ「新心理主義」が誕生した。たとえば、同時代の著名な小説家であり、川端康成の盟友でもあった横光利一（一八九八—一九四七）の書いた『機械』は、プルーストの『スワン家のほうへ』の日本語訳に影響されている。この横光作品に衝撃をうけた川端は、『水晶幻想』（一九三二）を発表、一人の女性の意識の中に揺れうごく、さまざまな性のイメージを描き上げた。この小説では、川端は、ジェームズ・ジョイスの『ユリシーズ』にみられる内的独白の語法からも影響をうけている。川端はかかる語法に想を得て、彼のきわめて客観的かつ固有の人間認識を文章として表現するために、観念連合にもとづく描写法を創造したのである。

これまでに述べたような、川端作品の特徴（文体、客観性と新奇）がより鮮明な形で浮び上がってきたのは、こうした西洋の文学作品の影響をうけてのことであったし、ある意味では、この点にこそ新感覚派の傾向がもっとも顕著に顔を覗かせていたといっても、過言ではない。そのきわめて明確な例が、怜悧な眼で動物の生を描いた『禽獣』[*4]（一九三三）である。川端はここでも、みずからの人間認識をより自然に、より簡明に描くために、観念連合を用いている。

> この犬は今度が初潮で、体がまだ十分女にはなつてゐなかつた。従つてその眼差は、分娩といふものの実感が分らぬげに見えた。（中略）少しきまり悪さうにはにかみながら、しかし大変あどけなく人まかせで、自分のしてゐることに、なんの責任も感じてゐないらしい。だから彼は、十年も前の千花子を思ひ出したのであつた。その頃、彼女は彼に自分を売る時に、ちやうどこの犬のやうな顔をしたものだ。

作者は動物と人間とを、同じ平面の上に置いている。動物と人間との間に区別をもうけず、両者を同様に把握している。自由で自然な観念連合の流れが、人間と動物双方をめぐる作者の深い認識を生かすための契機となっている。こうして人間を動物と同一平面に置くことは、以後の川端の全作品の底面を流れる物の見方となった。

続いて川端は、『雪国』（一九三七）を発表、同じ視線を祖国日本の美にむける。この小説の主人公たちは、『禽獣』の主人公と同じく、外部の世界を冷やかな眼でみつめている。もっとも、その眼に映るものは、今度は獣ではなく女性である。

> 細く高い鼻が少し寂しいけれども、その下に小さくつぼんだ唇はまことに美しい蛭の輪のやうに伸び縮みがなめらかで、黙つてゐる時も動いてゐるかのやうな感じだから（……）

いうなれば、女性は自然主義作家の観点から見られている。そしてかくも客観的に見つめられることで、一匹の生き物、それもきわめて美しい生き物、さらに正確には、きわめて美しい獣以外の何物でもなくなってしまう。この観点に立つならば、『雪国』と『禽獣』とは同一の物語といえるだろう。つまり『雪国』にあっては、女性は、醒めた眼差しが鑑賞する、一個の美しいオブジェとしてしか見られていないのである。さらに、冷艶の鑑賞者たる川端は、女性を表現するためにここでも『水晶幻

想』や『禽獣』同様、観念連合の語法を用いている。この技法はヨーロッパのシュルレアリスムが用いた技法にも奇妙に似かよっている。

> 汽車のなかもさほど明るくはなし、ほんたうの鏡のやうに強くはなかつた。反射がなかつた。だから、島村は見入ってゐるうちに、鏡のあることをだんだん忘れてしまって、夕景色の流れのなかに娘が浮んでゐるやうに思はれて来た。
>
> さういふ時彼女の顔のなかにともし火がともつたのだつた。（中略）小さい瞳のまはりをぽうつと明るくしながら、つまり娘の眼と火とが重なつた瞬間、彼女の眼は夕闇の波間に浮ぶ、妖しく美しい夜光虫であつた。[5]

この光景は、あたかも無意識の隠れた運動法則に忠実であるかのように、一定のリズムをもって進行する。そこでは夢と現実が一つに溶け合っている。距離と境界は消滅し、「シュルレアリスム的」と形容したくもなる異常体験がうかびあがる。こうして川端作品では、日本特有の現実が二十世紀の西洋作家と近い、きわめて新鮮な知覚法を通してとらえられる。彼はその手法こそ、おのれの要求にもっとも適ったものと考えたのである。そして、この手法によって「残酷美（ラ・ボテ・サン・メルシ）」を描くことが可能になったのである。

日本が第二次世界大戦の敗戦をむかえたとき、川端はふたたび伝統的日本を意識し、その姿を作品に描こうと努めた。

> 私は戦後の自分の命を余生とし、余生は自分のものではなく、日本の美の伝統のあらはれであるといふ風に思つて不自然を感じない。[6]
>
> 私はもう死んだ者として、あはれな日本の美しさのほかのことは、これから一行も書かうとは思はない。[7]

この時期から作者の態度が一変する。これまで彼は一定の距離を置いて対象を観察してきた。一方、それに対して今度は、対象の深奥にまで参入を果たそうとするのである。したがって、対象はもはや対象としての輪郭の内に収まることをやめる。これまで小説素材と文体との間に保たれていた均衡調和は破壊されてしまう。一例として、『千羽鶴』（一九四九）を掲げよう。これは日本のすぐれて伝統的な芸術である茶道を描いた小説である。ここで川端は、精神性にあふれた茶道の儀式[8]をなんとか全体として完璧に描き切ろうと努めてはいるものの、結局のところ、茶道の断片だけを、純粋に美学的な観点から、再現するだけにとどまっている。こうした事態を象徴的に示すのが、茶道の精神を集約する、有名な志野焼きの茶碗である。この茶碗の表面には口紅のあとが残っているのだ。

> その志野の白い釉（うはぐすり）はほのかな赤みをおびてゐる。しばらくながめてゐるうちに、白のなかから赤が浮んで来るやうだ。
>
> そして口がこころもち薄茶色になつてゐる。ひとところ薄茶色が濃いやうだ。そこが飲み口なのだらうか。茶渋がついたと見える。しかし唇をあてたよごれもあるかもしれない。
>
> その薄茶色もまたながめてゐると、やはり赤みがかつて見えて来る。

茶がすなわち女性を連想させてしまうとすれば、それはすでに茶道の本質を離れてしまったといえる。そのため、描写の対象と効果の間に不調和が生じているのだ。

この傾向は、川端が年齢を経るにつれてますます顕著になる。『みずうみ』（一九六〇）、『眠れる美女』（一九六〇）や『片腕』（一九六三）は、かつての新感覚派を連想させる前衛作品のように読める。とりわけ『みずうみ』には、純粋状態における語りが存在している。そこに何が描かれているのか、何が小説の対象なのか、読者はそれを把握することができない。すべては、少女のイメージに憑かれた主人公の心理状態を通して描かれている。その意味で、ジェームズ・ジョイスの影響が幾分認められる。すなわち、「意識の流れ」。

シュルレアリスム的な性格を極端にまで押し進めたのが『片腕』である。これは美少女の片腕を一夜の約束で借りうけた男の物語で、片腕は女性の肉体全体を象徴するものとなっている。

> 肩のこの可憐な円みから娘のからだの可憐なすべてが感じられる。胸の円みもさう大きくなく、手のひらにはいつて、はにかみながら吸ひつくやうな固さ、やはらかさだらう。娘の肩の円みを見てゐると、私には娘の歩く脚も見えた。細身の小鳥の軽やかな足のやうに、蝶が花から花へ移るやうに、娘は足を運ぶだらう。そのやうにこまかな旋律は接吻する舌のさきにもあるだらう。

著者は次々に生起するイメージを重ねあわせて、いうなれば「抽象的な蜃気楼」を作りあげている。これはクレー、マチス、シャガールといった西洋前衛絵画を髣髴とさせる。時間も空間もない世界に、多彩な幻想が描き出される。これはシュルレアリスムの無意識運動による世界である。ある意味では、シュルレアリスムのもっとも純粋な表現を見ることとすらできるだろう。作者の深い内的世界が、きわめて具体的なイメージ（片腕、小鳥の足、蝶など）の形をとって登場してくる。こうして「物質化」された女性美は、『禽獣』のなかで冷酷きわまりない視線が捕えた獣の純粋な美しさに通じている。冷酷な眼の前では、描写の対象は物体化の過程を経るにつれて、純粋でイデア的なものとなる。この小説にあらわれる数多くのイメージがめざすのは、つまるところ、幻想的な、シュルレアリスム的な世界を出現させることである。ここでも、存在しているのはただ純粋状態における語りだけであって、いかなる主体も不在である。換言すれば、主体と語りとの乖離が主体の消滅をもたらすのである。そしてきわめて具体的でありながら生命感を欠いた一連のイメージによって、死に踵（きびす）を接する虚構世界が、誕生するのだ。

この効果は、『眠れる美女』において頂点に達している。これは睡眠薬で眠らせた美女の傍で夜をすごす老人を描いた物語である。娘たちは深い眠りに陥ることで生身の人間たることを止めている。意識を失なうことで、美の象徴と化している。

ここで、オスカー・ワイルドの作品『サロメ』に描かれた洗礼者ヨハネの首を例として思いうかべ、比較することは不可能だろうか。川端はワイルド同様、十九世紀末ヨーロッパの頽廃美を表現しているようにも思われる。

『眠れる美女』発表ののち、まもなく川端の作品は日本精神を代表するとの評価をうけ、ノーベル文学賞を授けられた。川端はその授賞式に『美しい日本の私』と題する記念講演を行なったが、その中でとりわけ次のようなことを言っている。

> 雲に入ったり雲を出たりして、禅堂に行き帰りする我の足もとを明るくしてくれ、狼の吼え声も

こはいと感じさせないでくれる『冬の月』よ、風が身にしみないか、雪が冷たくないか。私はこれを自然、そして人間に対する、あたたかく、深い、こまやかな思ひやりの歌として、しみじみとやさしい日本人の心の歌として、人に書いてあげてゐます。(これは川端が明恵上人の歌「雲を出でて我にともなふ冬の月風や身にしむ雪や冷たき」を評釈した件（くだり）である——訳註)

この言葉に人は、当時の川端の精神に内在していた葛藤と激しい分裂を感じ取らずにはいられない。『眠れる美女』に描かれた「非人間化された女性」とこの文章の「しみじみとやさしい日本人の心の歌」との間には、実際何という距たりがあることだろう。しかしながら、この二つの相矛盾した表現を同時に懐胎したのは同じ川端という一人の人物なのである。作者がたどった道は、かくして必然的に「自己の破滅」へと通じていくことになるだろう。

*1 「『千羽鶴』への序」より——（ノーベル文学賞叢書、エディション・デ・ビブリオフィル、一九七三年）、九—十頁。

*2 日本の作家は、自己と描写の対象の間に距離をもうけないのが伝統的な傾向である。彼らはむしろ逆に、対象に融即し同一化しようとする。かかる態度は、極東の自然観を深い源としている。端的にいえば、自然と人間の間にあるのは乖離ではない。それは一体性である。それは日本語自体にも浸透している。たとえば日本語では、「寒い」という同一の語が客観的な状態（気候が寒い）と、そこから派生する主観的な状態（私は寒い）の両者をあらわすために用いられる。

*3 当時の日本にあって支配的な文学運動の中心は、いまだに自然主義であった。ゾラとモーパッサンの影響を受けて生まれたこの運動の影響は、次の二つの方向で同時に浸透していた。

①自然主義の描写技法がもたらした、文体の次元での直接の影響。現実をあるがままの姿で描くこと、粉飾なしに、できる限り客観的に描くこと。

②自然主義を媒介として、ヨーロッパのロマン主義のいくつかの本質が摂取されたという、間接的影響。自己の発見、社会の中の個人の権利の主張、そして社会に対する個人の反抗。

これらの要素がいかに新鮮なものであったかは、文学の面では日本の伝統的な作品に自己の描写が存在していなかったこと、また社会の面では封建社会の中の個人は何の価値も与えられていなかったことを考えあわせれば、十分理解できるはずである。日本の自然主義はヨーロッパ文学から大きな影響をうけながらも、同時に、それに対して深い独自性を持ち続けたのであるが、それをもっとも明瞭に示すのは、自然主義から生まれ、自然主義と不可分であった文学ジャンル「私小説」である。これは、作者のきわめて個人的な感情を小説の形で表現しようとする傾向で、作者は一人称の「私」という形、または仮名で自分自身を物語のなかに登場させた。「私小説」は日本近代文学にあって重要な位置を占めている。今日にいたっても、少なからぬ小説家がこのジャンルに取り組み続けていることを追記しなければならない。

*4 川端の弟子である大作家三島由紀夫は、この作品について次のように言っている。「氏の最も西欧的な、批評的な作品は『禽獣』であって、これは横光氏の『機械』と同じ位置をもつというのが私の意見である。」（「川端康成」、雑誌「現代のエスプリ」、第三十五号、至文堂、一九六九年一月）

*5 『雪国』——藤森文吉、アルメル・ゲルヌ共訳によるフランス語版より（パリ、アルバン・ミッシェル、一九七八年）、六四頁。

*6 「川端康成全集第一巻あとがき」、新潮社、一九四八年五月。

*7 「島木健作追悼」、「新潮」、一九四五年十一月。

＊8　茶道の精神を要約するものとして、禅哲学の影響をうけた「一期一会」なる表現がある。これは〈生〉の小空間を象徴する茶室（茶道の儀式専用の部屋）で他の人々と出会うその瞬間を、もっとも素晴しい瞬間、もっとも充実した瞬間として演出するために、もうこれでお互いに二度と会うことがないとか、これが最後の出会いであるといった気持ちを抱くことをいう。

Kawabata Yasunari entre le Japon et l'Occident : Etapes d'une Création Litteraire,
Proceedings of the IXth Congress of the International Comparative Literature Association
(Innsbruck 1979) 4. Evolution of the Novel

霧の中

一九八三年 九 月 十 日　第一刷発行
一九八三年十一月十五日　第十七刷発行
定価　一〇〇〇円
著者　佐川一政
発行者　矢崎泰久
装幀者　平野甲賀
発行所　株式会社　話の特集
東京都渋谷区神宮前四—三〇—六
電話　〇三（四〇五）〇八一〇
印刷　株式会社　大竹美術
製本　株式会社　小泉製本所
© 1983 Issei Sagawa, Printed in Japan
小社の許可なくして、本書の一部を引用し、転用転載あるいは上演、放映、上映することを厳重に禁止します。
〈検印略〉落丁本、乱丁本は本社にてお取替えします。

話の特集の単行本

色川武大

怪しい来客簿

＊阿佐田哲也の名をもつ筆者のもうひとつの顔。直木賞作家がそれに先がけて発表した香り高い文学作品。「空襲のあと」「墓」「サバ折り文ちゃん」など全十七篇を収録した第一創作集。泉鏡花賞受賞。１２００円

虫明亜呂無

ロマンチック街道

＊十の短篇に描かれた女性の愛と生き様。透明な文章の中に清冽にあらわれる愛のかたち、そのバリエーション。スポーッ界に題材を求めて女性の〝心〟をしなやかに浮上させた、スポーッ恋愛小説集。１２００円

神吉拓郎

笑う魚

＊マティニを飲みながら、アズ・タイム・ゴウズ・バイを聞く……ハードボイルド、綺譚、ミステリ、SF、ブラックユーモア、艶笑、現代風コントなど、都会派ムードあふれる24篇の短篇・中篇傑作集。１２００円

中山千夏

クワルテット

＊人間関係のなかに女みずからの成長の糸口を捉えようとする、中山千夏の初の長編小説。鋭い洞察と得難い筆力で独自の創作を続ける筆者が『ダブルベッド』に次いで投げかけた新しい文学への挑戦！　９８０円

中山千夏

ダブルベッド

＊赤裸々な官能描写をめぐって、読書界の注目を集めた表題作のほか、十年前の処女作「屈辱」、夫妻の危機を異色タッチで描いた「悪妻の祈り」、幻想味あふれる「地図のそと」など六篇収録の第一創作集。９５０円

話の特集の単行本

黒柳徹子

黒柳徹子の動物劇場

＊「どの動物も美しい」という筆者が、動物のいちばん素敵なところを撮った写真に、ユーモアと優しさあふれる詩やエッセイを加えた、トットちゃんの動物交遊録。愛と感動にみちた本と全国から大反響。９５０円

ビートたけし

ビートたけしのウソップ物語

＊イソップ物語はもう古い。現代では正直者が得をしない。セコく、ズルく生き抜こうと、毒舌とギャグとパロディ精神で、日本の民話や西洋の童話を根底からひっくり返した、おかしなおかしな面白絵本９８０円

糸井重里

私は嘘が嫌いだ

＊今や人気最高潮のコピーライターが放つ傑作面白本。嘘かまことか、冗談か真面目か、ホラか実話か、一ページ読めばもうやめられない、限界をこえる面白さ。シティ感覚にあふれたスーパーストーリー。９８０円

妹尾河童

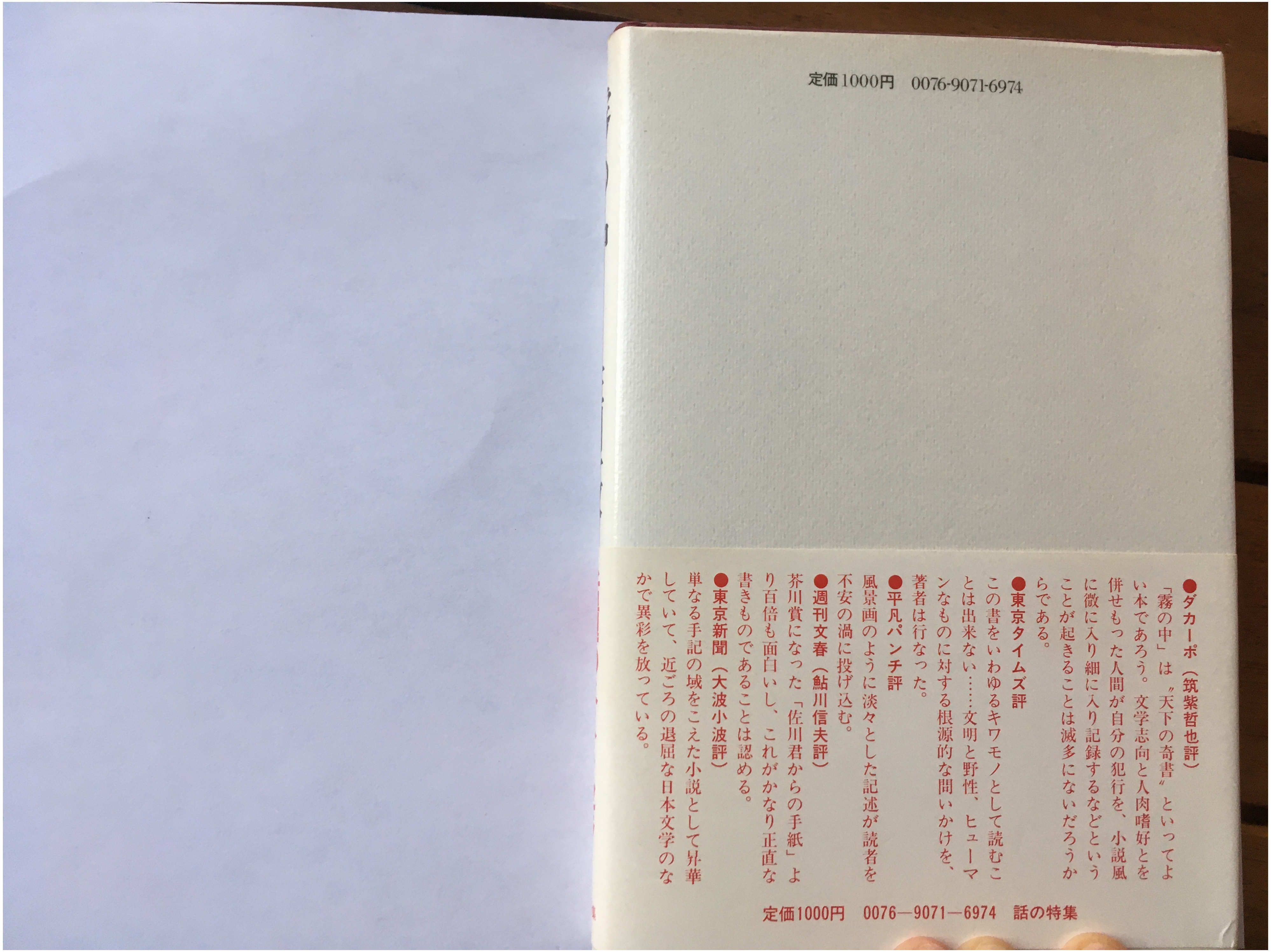
河童が覗いたヨーロッパ

＊一年間ヨーロッパを歩き廻った筆者の、好奇心と優しさに満ちた目が覗き感じたものを、旅の間中、片っぱしから描きまくった。そのノートをそのまま本に。全ページ手描きによる、記念すべき第一弾。９８０円

和田誠

倫敦巴里〈ロンドンパリ〉

＊和田誠の戯作・贋作大全集。デカルト曰く「我れ思う、故に我れ在り」著者曰く「我れ遊ぶ、故に我れ在り」。したたかな風刺精神を見事に開花させて、パロディブームの先駆けとなった、遊びの神髄。１３００円



定価1000円　0076-9071-6974

●ダカーポ（筑紫哲也評）

「霧の中」は〝天下の奇書〟といってよい本であろう。文学志向と人肉嗜好とを併せもった人間が自分の犯行を、小説風に微に入り細に入り記録するなどということが起きることは滅多にないだろうからである。

●東京タイムズ評

この書をいわゆるキワモノとして読むことは出来ない……文明と野性、ヒューマンなものに対する根源的な問いかけを、著者は行なった。

●平凡パンチ評

風景画のように淡々とした記述が読者を不安の渦に投げ込む。

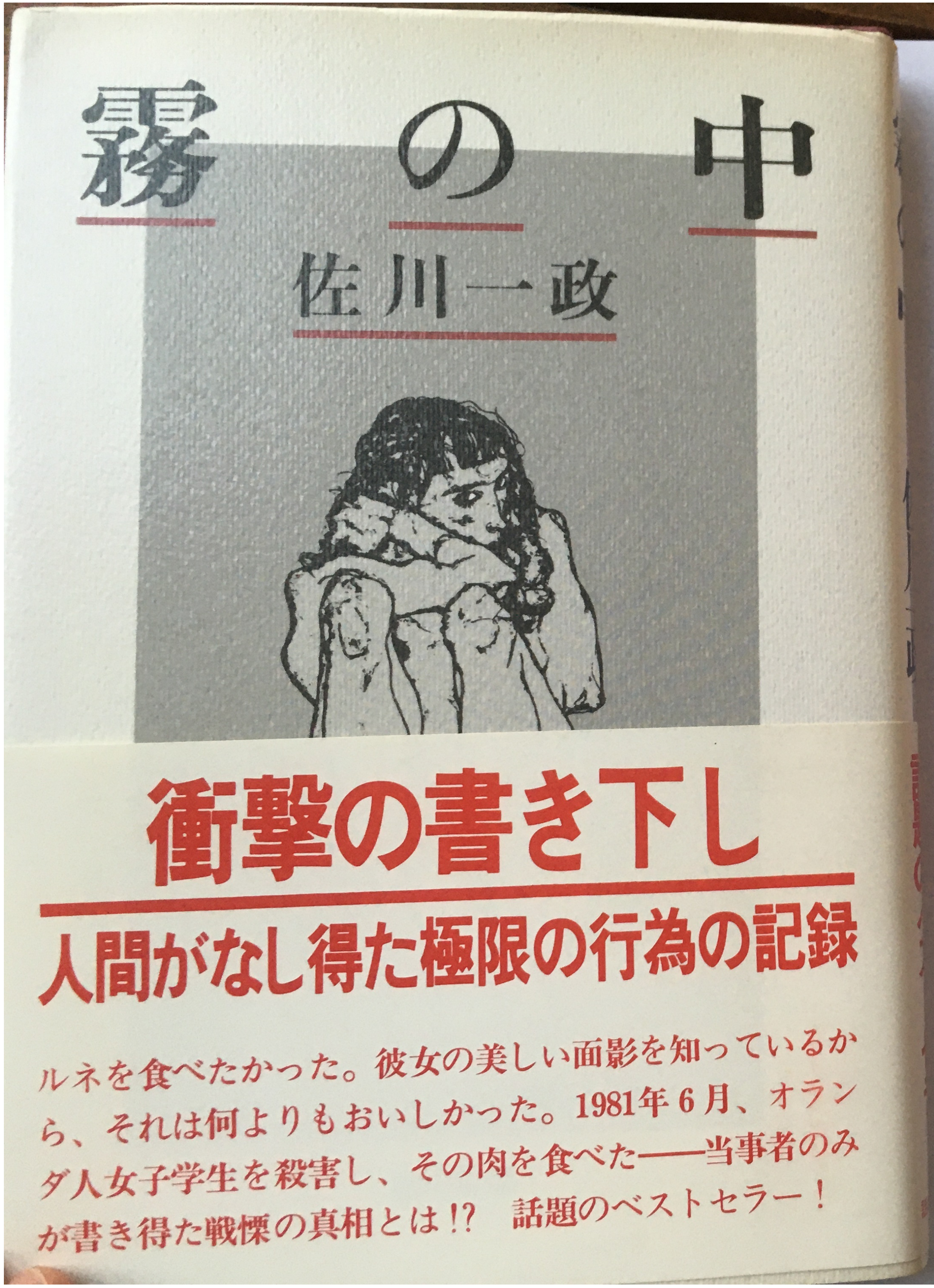
●週刊文春（鮎川信夫評）

芥川賞になった「佐川君からの手紙」より百倍も面白いし、これがかなり正直な書きものであることは認める。

●東京新聞（大波小波評）

単なる手記の域をこえた小説として昇華していて、近ごろの退屈な日本文学のなかで異彩を放っている。

定価1000円　0076―9071―6974　話の特集



霧の中

佐川一政

衝撃の書き下し

人間がなし得た極限の行為の記録

ルネを食べたかった。彼女の美しい面影を知っているから、それは何よりもおいしかった。1981年6月、オランダ人女子学生を殺害し、その肉を食べた——当事者のみが書き得た戦慄の真相とは!?　話題のベストセラー！